

まさかガンダム転生で  
ジーンになると思わな  
んだ

ワッタ～軍曹

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ファーストガンダム好きの20代が転生したら、ジーンになるとは思わなんだ。宇宙  
世紀の根本となるあの戦闘を何とかすれば、意外と何とかなるんじやないの?しかし、  
宇宙世紀はそこまで甘口ではなかつた……  
ジーン(転生)は生き残る事が出来るか?

# 目次

第1話 ジーン（転生）宇宙世紀に立つ	1
第2話 ジーン（転生）の腕前と赤い奴	6
第3話 ジーン（転生）V S アズナブル	13
第4話 ジーン（転生）とミーティング	19
第5話 ジーン（転生）の決戦前夜	28
第6話 ジーン（転生）とV作戦「前編」	39

第7話 ジーン（転生）とV作戦「後編」

48

第9話 ガンダム大地に立っちゃった	56
第10話 宿命の対決 赤 V S 白	72
第11話 ガンダム破壊命令 ——	81
第12話 ジーン（転生）の療病	101
第13話 俺達の補給艦を守れ！「前編」	112

第14話 僕達の補給艦を守れ！「後編」

174

第21話 大気圏突入「戦闘編」

124

第15話 ジーン（転生）の迷い

181

第22話 大気圏突入「突入編」

132

第16話 ルナツー工作作戦「前編」

第23話 一時の休息

197

第24話 コアファイター撃墜せよ！

188

第17話 ルナツー工作作戦「後編」

140

第18話 ジーン（転生）のオフ

第25話 ジーン（転生）の一人会議「ガルマ編」

204

第19話 ジーン（転生）の一人会議

第26話 YMS-106FB

159

第27話 技術士官セキヤ

167

第28話 ガルマの苦悩

第20話 大気圏突入「出撃編」

233 226 218 212

第29話 再考の時

第38話 帰郷

350

第30話 対決? ジーン(転生) VS ア

245

ムロ

第31話 父親と息子

265

第32話 ニューヤークにて

273

第33話 ガルマ散る「散らせない編」

251

279

第34話 ガルマ散る「散りに来ちゃつた編」

296

第35話 キヤリフオルニアベースの内情

296

第36話 再会 A-12部隊

310

第37話 改造グフの脅威

340

329



# 第1話 ジーン（転生）宇宙世紀に立つ

「うわあっ!!」

私は布団から飛び起き、荒げた息を整える。嫌な夢をみたものだ。なんてつたつて愛車のオンボロ原付で雨の中、憂鬱になりながら出勤していたら突然、反対車線のダンプカーが突撃してくるもんだからそりや、声を荒げてもおかしくない。

半ば放心しながら呼吸を整える。そうすると段々と落ち着いてきたので、もう一眠りすることにした。無理は良くない。そうしてゆっくりと寝落ちしてきて……

「ちょっと待て！」

ちょっと待ってくれ。何なんだこの部屋は！確かに自分の部屋は実家の六畳の和室

だつたはずだ。なのに自分は少し古臭いSFチックな部屋のベッドに寝ている。一体どうなつているんだ?!

いや、ここで落ち着かなければ。再び呼吸を整えて辺りを見回す。うん、少なくとも実家の部屋じやない。隣にベッドがあり、ここが二人部屋なのがわかつた。机も二人分ある。多分、それぞれのベッドの横にあるのが自分用の机なのだろう。

自分用と思われる机を漁つてみる。机の上には何もなく、引き出しを開けてみた。すると筆記用具やらノートやらがあつたが、金具かなんかで固定されていた。奥の方に紙みたいな物が挟まっていたので、それを取つて見てみると、パツキンチャンネーのヌードブロマイドだったので即座に引き出しにしまい、見なかつた事にした。

机の隣にはロツカーガリ、これも二つある。気になつてロツカーを開けてみると一着の服があつた。革ジャンとジーパンだ。下を見るとスニーカーもあつた。他の物も色々あつたが、それらに意味は無い。そしてロツカーの扉の裏には小さな鏡があり自分の顔が写つていた。

結論から言えば自分の顔じやなかつた。そこに写つていたのは、顔は整つているが目付きが鋭く、誰がどう見ても悪人顔という顔が写つていた。驚きと焦りと恐怖が同時に襲いかかってきて、今日三度目の深呼吸をする。今さらだが自分の体を確認すると、ジョン軍のノーマルスースっぽい服を着ている。もしやこの顔は、まさか!

「……誰だっけ？」

うん、見たことがあるような、ないような……

多分これ、いわゆるガンダムの世界に転生したっぽいんだけど、誰に転生したのかが解らない。階級を確認すると、鏡に写っていた階級章は伍長を示していた。低いな。ファーストガンダムのキヤラで伍長つて最底辺だぞ。

……やはり思い出せない、仕方ないので今世の記憶を思い出してみる事にした。目を瞑り、頭の中の記憶を観てみる。

サイド3生まれ。ジオンの軍人学校でMSの適正試験に合格し、晴れてMS乗りになつた。成績も素行を除けば結構優秀な方である。軍人学校を卒業した後、ドズル中将の部隊に配備され、シャア少佐のV作戦偵察チームに選出されて今に至つた事が判つた。

……え、え？ もしかして、これって、まさかとは思うけど、え？ え？ ええ？ 嘘でしょ  
??俺つて

ジーンに転生しちやつた？！

そう、今世の記憶を思い出して、脳裏にジーンという名前が焼き付いた。それと同時に自分の死が確約されてしまった。という事はあのダンプカーに突撃された夢は前世

の記憶で、本当の自分はそこで死んでしまったという事なのか？……信じられないが、多分違いないだろう。

10分程部屋の中をうろうろしてベッドにダイブしたりして気持ちを落ち着かせていた。前世での記憶を思い出そうとしたが名前が思い出せない。思い出せないどころか頭痛がしてくる。もう前世の自分は戻つてこないと落胆したが、もうそれどころではない。

今世の今日はU.C. 0079 09. 16 つまり、ガンダムとザクが戦闘になる歴史的瞬間の二日前なのだ。

時刻は午前9時半を過ぎていた。幸いにも今日は1800時にあるブリーフィング以外はフリーな日だったので、早速MSのシミュレーションをして少しでも生存確率を上げたい。果たして戦場の絆（曹長LV.1）の腕前がどこまで通用するかな？け、決してヘタクソという訳ではないぞ！実家とゲーセンの距離が遠いから中々通えないだけだぞ！？

そういうや転生にはチートが付き物だけど、どんなチートが使えるのだろうか……？素直にニュータイプみたいなMS操縦技術だと嬉しいのが……

原作知識ははつきり言つて役に立たないと思う。だってガンダム史における楔と言つても過言ではないイベントをぶち壊して生き延びようとしているのだから。まあ、

生き延びるだけなら何とかなるよね？

しかし、この転生が過酷なものになると想い知るのにはそう時間が掛からなかつた。

## 第2話 ジーン（転生）の腕前と赤い奴

私は今、MSシミュレーションルームへ向かっています。それにしても通路の横にある棒つて移動にめっちゃ便利よね。こう、スイーツつて移動するのが快感で実に楽。確かこの角を曲がったらすぐそこのハズ。ほら、見えてきた。結構しつかりした部屋だな。流石ファルメル、特別仕様のムサイなだけある。中は四基のMSシミュレータがある。簡単に言えば戦場の絆の豪華版である。

うおおおお、やはり凄い迫力だ。オラワックワクすっぞ！と、はしゃぐのもいい加減にしてシミュレータの手続きを済ませる。一基も使用されてなかつたのでササツと終えてシミュレータに乗り込む。

そういうえばシミュレータの起動つてどうやるんだ？流石にそこまでは知らんぞ？と思つてたらスレットと手順が浮かんできた。やはりジーン、MS操縦者だけはある。

AMBACシステムを順次稼働させる。聞きなれたMSの起動音がきこえる。立てよ！早く立てよ！今回のシミュレーション内容は最初の三十分は基本動作でその後三分十 分は仮想敵とのドッグファイトである。これで技量を測る。

前進後退、旋回にスラスター、ザクマシンガンやバズーカ、ヒートホークの動作を確

認して一連の動きを作る。武器の確認だが、戦場の絆と違つて弾数制限がある。（当たり前だけど）

ザクマシンガンは1パレット100発が入つてゐる。腰にパレットをスタッツク出来る所があるので2パレットは予備を置いておける。つまり、300発のマシンガンを撃てる事になるのだが、連発し過ぎると銃身が焼けて撃てなくなるので、クールタイムが必要になつてくる。ちなみに宇宙では放熱が出来ないので、一気に300発も撃つたら使いもんにならないうらしい。今は一回の射撃で6発撃つ設定で撃つてるのでそこまで気にする事はないのだが、頭の片隅には覚えておきたい。後はパレット交換も時間が掛かるので気を付けたい。

次はザクバズーカだが、これはORIGINの見た目に近い。バナナ型の弾倉で5発撃てる。これも腰に予備弾倉を付ければ。こつちも連発すると熱くなるが、そもそも連発する武器ではないし、連発した所で全く当たらない。元々対艦用だし、仕方ないよね。

最後にヒートホーク。実はこの武器、使い捨てである。意外かもしれないが4、5回使うと刃がボロボロになつて使い物にならないのである。これも一応対艦用ではある。もし、ガンダムと戦うならこれが一番のダメージソースだと思う。そうであつて欲しい。いやそうであれ。お願ひだから。

ある程度、動きを把握した所でドッグファイトに移る。最初は一対一で戦い、最終的

に三対一で戦う。一対一は意外にも好成績を残す。ザクマシンガンで牽制をして、ジグザグな動きで相手を惑わし、ヒートホークでぶつたぎる。いやあ、爽快感バツグン！これなら三対一でも楽勝でしょ！

と思つてたら時期が私にもありました。逃げることで精一杯。たまに牽制しては逃げる。牽制して逃げる。逃げる。逃げる。逃げる……

気づいた時には後ろからバズーカ撃たれてました。あほーん。ヤバいよ、自分は操縦センスがそこまで無い。転生チートはどこいったんだよ!!何かしらあるだろ!!!何とか言つてくれよバー（ry

若干の焦りを感じつつ、シミュレーションルームを後にすると一人の男が声をかけてきた。

「珍しいですね、あなたがこんな所に来るとは」

誰だコイツ？つて言いかけたが、何とか押さえる事に成功した。頭の中にホワーンと浮かんできた名前がスレンダーだった。ああ、スレンダーか！少し感動した所で会話を繋げる。

「昨日、シャア少佐がサイド7に入港してくる戦艦を発見したので、出撃も近いでしょ？」ウォーミングアップは、早めにしておいて損はありませんからね」

「へえ……」

信じられてない。これがジーンの人徳ですね。本当にありがとうございました。(一)  
「1800時にはブリッジでミーティングがあるのでそれまでには間に合うようにして  
くださいね」

「分かつてますつて」

そうしてスレンダーは何処かへ消えていった。

同年代とはいえ、一応スレンダーは軍曹で階級が上なんだよな……やはり日頃の素行  
は大事だと思った自分でした。といった所で時刻は11時を少し過ぎていて、どうする  
か悩んだが、少し早めに昼食を取り、休憩をした後にまた1730時まで訓練に慎むこ  
とにした。

食堂に入ると、そそここの人数が居るのが分かる。ツナギ姿の整備士やブリッジク  
ルー、医者の姿も居た。それぞれグループになつて雑談しながら食事をしている。そし  
て早速献立を見てみる。無機質なディストピア飯ではないのを確認できて安心した。  
どれも洋食ばかりだが、今日はハンバーグらしい。宇宙でハンバーグってどうやって食  
べるんだ?と思つていたら料理が出てきた。丸パンにチューブに入った水、チューブに  
入つたハンバーグ、チューブに入ったミックスベジタブル、チューブに入つたトマト  
スープ……

結構無機質じやないか!と叫びたくなつたが、ここで二度目の防衛に成功。口は災い

の元である。

とりあえず適当に席を選び、丸パンをかじりながらチューブに入った……えーと、ハンバーグを食べた。食べた？飲んだ？飲み込んだ？まあ、とにかく食べたが、意外と美味しい。温かくて肉汁もちゃんとある。宇宙世紀の技術の勝利を堪能したら結構お腹が膨れたので自室に戻つて休む。

自室に戻ると何故かスレンダーが居た。 どうか、ルームメートなのか。 軽く挨拶をするとお互に話す事はなく、そのまま沈黙が続いた。スレンダーが部屋を出ていき、特に何もなく時間だけが過ぎてゆく。

13時を過ぎた所でそろそろ、シミュレーショナルームに行く。 反復練習は大事だ。スーツとそこまで行き、部屋に入ると何やらギヤラリーが出来ていた。その中には先ほど部屋を出たスレンダーもいた。

「スレンダー、なんなんだこのギヤラリーは？」

「ああ、少佐がシミュレータで俺たちと相手しているんだよ」

「ええ！あの少佐が！」

「何でも実戦前のレクリエーションだつて。私も先ほどやつてコテンパンにされました

よ」

この部隊で少佐と言えばアイツしかいない。

皆さんご存じのマザコン シスコン ロリコン 赤い彗星と言われるシャア・アズナブル少佐だ。ドズル中将から特別編成の部隊を率いてVV作戦の偵察任務を任せられる。

そしてシミュレーションが終わつたらしく、二人が出てきた。一人は無論シャア少佐。もう一人は小太りのおじさんで多分、デニム曹長だと思う。

「あんなスピード、ついてこられる訳ないじゃないですか！」

「はつはつは、まあ、そう言うな。デニム曹長は古参らしく筋はいいが、まだ教科書の範疇から抜けきれていない。特攻する勇気は褒めてもいいが、もう少し頭を使つた方がいい。戦いとはいつも二手、三手先に読んで行うものだからな。」

「はあ……確かに。」

まさかあの台詞がここで、しかも生で聽けるとは思わなんだ。少し感動していくたら、少佐が気づき、話しかけてきた。

「やあ、ジーン伍長か。このシミュレータを使おうとしたら、君の名前が書いてあつて少し驚いたよ。この前の喧嘩での叱責が効いたのかな？」

「喧嘩での叱責……？」

あつ、もしかしてORIGINのあの喧嘩か？確か俺が折り畳みナイフを持って暴れたアレか？うーん何故だろう、本人の記憶があやふやである。つてかもう忘れてんのか

!? そんなんだから素人同然のアムロにやられるんだよ!!

「どうだい？ 貴様も私と一戦交えてみるかね？」

明らかに上から目線だが、上官のお誘いだ。それに、一回シャアと戦つてみたいと思つてた所だ。

「わかりました、一戦指導して頂けるとは光榮です。私も少佐に引き抜かれた人材です、期待に沿えるように善戦します」

「ほお……善戦とは言わず、私を撃破してもいいのだが？まあ、期待しているよ」

野次馬共が笑つてやがる。そんなんだからジーン暴走しちゃつたんじゃないの？とジーンに若干の同情を思いつつ、シミュレータに乗り込んだ。

そしてあのセリフを言つてみる。

「見せて貰おうか、赤い彗星の実力とやらを」

## 第3話 ジーン（転生）ＶＳアズナブル

どうも、こんにちは。ジーン（転生　この場合は前世での事故により転生してきた者を指す）です。今何しているかって？すまんな、よそ見出来ないんだ。した途端にシャアにボツコボコにされるからね。

とにかく逃げる。逃げる。たまに牽制。そして逃げる。シャアも私も同じ事をしているのに、なんで私が追い込まれているのだろうか？にしても速くね？通常の三倍のスピードとは言い不得て妙だけど、基本性能は三割増しなだけなんだよなあ。まあ、どうにもこうにも避けてる私も人の事を言えないけど。

「ちいつ！意外とやるな。」

オープン回線で行つてるので、少佐の声が聞こえる。逆もしかり。それにしてもシャアって攻撃を避けられる事に意外と免疫が無いのかもしね。テキサスコロニーでアムロと戦つた時も焦つていたし。（まあ、アツチは当ててきていたけど）そう考えると逃げる事に意味があるかもしね。しかもそれなりに上手にかわせている。

戦闘時間が十数分が経ち、シャアに僅かな異変を感じた。何となく動きが鈍つてきて

いるのだ。これぐらいの戦闘で疲労はしないだろうから原因は他にあるはず。もしかしたら推進材が減つてきているのだろうか？推進材は宇宙での生命線だ。これが無くなるとMSが動かせなくなる。無くなつた後は救難信号をだして、祈る事しか出来なくなつてしまふ程大切な物だ。

これを勝機と捉え、少しづつ攻勢に出た。やはり攻撃は避けられているが、最初ほど動きが減つてきて最小限になつてきている。いよいよマシンガンの弾数も少なくなつてきた。一つだけ予備マガジンはあるが、交換すると隙が出来るので交換しない方が安全だ。

「ジーン、いつまで逃げているつもりだ？ それでは昇進なぞ夢のまた夢だぞ」

どうどうどう、落ち着けつて少佐。煽り運転はいけませんぜ？一応コツチも推進材減つてきて気にしてるんだから、同じ舞台に立つてるのよ？しかし、そろそろこの戦闘にピリオドを打たないといけないのは分かる。ドローでしたゝ　なんて事になつたらあの人、多分認めないだろうからなあ。

よし、ここで一か八かの攻勢に出る。マシンガンを撃ち尽くし、避けられた所でザクマシンガンをシャアに投げつける。これを避ける為に上に回避したが、計画通り。ヒートホークに持ち替え、残り少ない推進材を惜しみ無く使いシャアに接近する。

「もらつたあーー！」

「なにい!?

決まつた。

と思つたら、あつさりかわされた挙げ句にロー・キックを喰らい、鉛弾のシャワーを貰つた。あばばばばばば。そしてトドメと言わんばかりに、ヒートホークの追い討ちであばーん。

この間たつたの8秒の出来事であつた。

「貴様の回避力には驚いたが、攻撃があれでは台無しだぞ。もつと腕を鍛えろ」

「はい……」

あんな事出来るの、アンタだけだつて……

「10分の休憩の後、レクリエーションを再開する。何度でも挑んで構わない。170  
0時までは相手してやる。」

まさか普通のシミュレーションが、少佐相手の特訓になるとは。でもこれは、チャンスだ。今のうちに攻撃力を鍛えとかなきやね。しかしレクリエーションとは言い不得て妙だ。何となく明るい雰囲気の中、あれこれ少佐にダメ出しされたりするが、少しづつだが成長を感じ、それを活かせるようになつてくると、少佐を追い詰める奴も少なから

ず出てくるようになつた。（三対一でだけど）

本来、こういつたシミュレーションは苦行なのだが、それを楽に変えるのは結構大変なのだ。ダメ出しが多いとやる気が失くなつてくるのだが、少佐特有のウイットが効いたダメ出しはそれほどストレスにはならない。（ちなみに普通の訓練ならもつとしごかれてる）こうして、皆が楽しみながら、あつという間に時刻は17時を指していた。

「私の考えたレクリエーションに付き合つて貰つてありがとう。この経験は諸君らの糧となるだろう。今日は楽しみながら訓練が出来たが、明後日には偵察任務に就いてもらう。万が一の事もある。任務が終わつてもまた、レクリエーションが出来る事を祈る。それと皆知つての通りだが、1800時にはブリッジでミーティングがある。忘れずにして欲しい。では解散とする。」

流石、演説が上手いだけはある。聴き惚れてしまうな。そういうや、レクリエーションの話なんて聞いてなかつたけど、もしかして自分だけハブられた？って思つていたら、入れ違いで食堂に入つた少佐が他のMSパイロットと話してゐる時に思い付いたらしい。スレンダーと私は偶然通りかかつたので参加出来たつぽい。よかつた、とりあえずボッチは回避できた。

それはともかく私は、汗をかいたのでシャワールームに行き、休憩した後、ブリッジへ向かうとする。やはりぶつ通しでやると目頭が痛くなる、ホットタオルで蒸らさな

きや。

まず最初にシャワールームへ向かう。シャワーを浴びる前に、汗だくになつたノーマルスースの処理に困つたが、どうやら専用の自動洗浄機械があるらしいので、そちらにかけてみた。シャワーを浴び終えて、タオルで身体を拭き終える頃にはピツカピカになつていた。科学のチカラつてスゲー！ノーマルスースは宇宙空間でも生存できる優れものだが、デリケートに扱わないといけない。だからこんな機械が出来たのだろう。

気分よく自室へ戻ると自分のベッドの上に袋が置いてあつた。中を見るとあのジオン軍服が入つていた。どうやらクリーニングに出ていたようだ。そういえばロツカーの中は私服しか入つてなかつたな。とりあえず袋からだして軍服を見てみる。一般兵士が身に付けている物で、深い緑色に黄色のラインが入つたデザインの軍服だ。

うわあ……これ、モノホンだよ。あのジオニストなら誰でも憧れる本物のジオン軍服だよ。うおお……ウヘヘ、ヨダレが止まんねえぜ……

脳裏に焼き付けるように見ていたら、部屋の入口でスレンダーがドン引きしながらこちらを見ていた。いつから居たんだよ、お前。

そろそろいい時間なので、早めにブリッジに行く事にした。10分前行動は基本だね。さて、どんな作戦になるのやら……やっぱり偵察任務だよね。というか、まだガンダムの第1話までいつてないのよね、コレ。なんか時間が長く感じるな。中一日も空い

てるし。そうして考え方をしているうちにブリッジへと着く。やはり皆、同じタイミン  
グで来ているので5分前には全員集まっていた。無論、少佐は最初からいる。時刻は1  
8時を指した所でミーティングが始まる。

「さて、V作戦偵察任務についてのミーティングを始めるとしよう」

## 第4話 ジーン（転生）とミーティング

「さて、V作戦偵察任務についてのミーティングを始めるとしよう。」  
ブリッジに程よい緊張感が走る。いよいよって所だ。作戦は偵察で変わらないはず  
だけど……

「昨日の9月15日未明、ジャブローから出航した連邦の新型戦艦の足取りを掴んだ。  
その新型戦艦はルナツーを経由してサイド7に向かつてゐる。我々はルナツーから新型  
戦艦を捕捉し、尾行している。サイド7に到着するのは明後日の9月18日の0600  
時と読んでいる」

なるほど、原作なら到着した2時間後にジーンが暴れるつて訳か。

「そこで、三機のMSを偵察に送る。サイド7は作りかけのコロニーで、裏側に工事用の  
ハツチがあるのでそこから侵入。今回はデニム曹長、スレンダー軍曹、そしてジーン伍  
長に行つて貰う」

「はっ」「了解です」「了解」

やつぱり行くのか。出来れば行きたくないけど。

「MSの発進は明後日の18日0200時。熱源探知を回避する為、出撃する際はカタ

パルトから射出される勢いでそのまま行つてもらう。特にサイド7付近でのスラスターの使用は極力避けろ」

そういうえば原作ではスラスター吹いてなかつたもんな、そういうことだつたのか。納得。

「ファルメルはここに待機。万が一の事があつた場合、直ぐに発進して援護をする準備を。それからMS整備班は今すぐMSの最終メンテナンスを行うこと。万全な状態にしてくれ。」

「了解」

整備長が敬礼をする。

「MS組の明日の調整は個人に任せる。トレーニングするもよし、一日気を落ち着かせるもよし、仲間と楽しく過ごすもよしだが、任務がある事を忘れないでくれ。流石に羽目を外されると困る。以上を持つて解散とする。少し気が早いが、皆の健闘を祈る。」

全員が敬礼をしてその場を解散する。

流石やなあ、私もあれぐらいビシバシと指示が送れるような士官になりたいものだ。とりあえず飯を食つたら早めに就寝する事にした。食堂に行つて今日の献立を見る。おつ、今日はラーメンか。お昼に食べたチューブ入りハンバーグより少し大きな物を渡された。どれどれ、お味は……（チュー）うん、味はラーメンなんだけどすすつて食べ

ないから違和感ありまくりだな。でも味はラーメン……うーん、不思議だなあ。

腹も膨れた所でとつとと自室で寝る事にする。部屋に入るとスレンダーが寝てた。考へる事は同じようである。ベッドにソッと入り、目を瞑る。しかし出撃が午前2時かあ。下手したらオールした方がいいような気もする。あー、ヤバい、こういうの考え出すと寝れなくなるんだよな。

そうだ、何かを数えよう。そうすれば段々と寝れるはずだ。よし、

ドムが一機……

ドムが二機……

ドムが三機……

ドムが四機……

ドムが五機……

ドムが六機……

ドムが七機……

ドムが八機……

ドムがここなのつ！

「ぜ、全滅う？！十二機のドムが全滅！？三分も経たずにかつ！？化物かつ……」

何で数えたのがドムだつたのだろうか。おかげさまで余計に疲れなくなつてしまつた。畜生。もうこうなつてくると、目を閉じても考え方で頭が一杯になつて寝れない。こういう時は軽く身体を動かして疲れさせた方がいい。私は隣にいるヤツを起こさないようソツと部屋を出た。

トレーニングルームを目指し、廊下をスイーツと行く。時刻は20時の方が近い。目的地に着くとちらほら人が居た。無重力空間では肉体への負担がほぼ掛からないので、筋肉量が落ちやすい。なので、MSパイロット以外の兵士も利用出来る。ちなみにMSパイロットは予約なしでの使用が出来る。それに加えて個別のロッカーとシャワーもついてくる。ラツキー。

MSパイロットの筋トレは大切である。何故ならMSでの高速移動や急旋回は負荷が物凄く掛かるので、己の肉体を鍛えて耐えなければならない。ひ弱な奴が戦闘を行うと、MSの性能もひ弱な奴に合わせて落ちるので、生き延びたければ肉体強化をする他ない。例え軽い筋トレでも侮れないのである。

自分のロッカーを開ける。3組のタンクトップと短パンがハンガーに掛かっていた。  
 おお、サウナスースまであるのかよ、スゲエな。でも、今回は軽く運動する程度なので  
 サウナスースはまた今度。タンクトップ＆短パンに着替えて室内に入る。さて、とりあ  
 えず軽くストレッチしてからランニングマシンにでも……  
 げえつ?! アズナブル!!!

重そうなベンチプレスを上げ下げしてる。てかあいつ、赤い半袖着てんぞ! 私生活ま  
 で赤色に侵食されてつぞ! 私は気付かなかつたフリしてやり過ごそうと思つたら案の  
 定、声を掛けられたでござる。チツ面倒だな。

「やあ、今日はよく会うな」

「ええ……まあ、会いますね」

「ランニングか」

「はい」

「では私も一緒に走るか」

何で私、少佐と一緒にランニングマシンで走っているのだろう。ただ軽く汗をかい  
 て寝たかつただけなのに。何の因縁があるのやら……

しかし、腕の筋肉量が凄い。細いのにしつかりとついてる。自分(ジーン)もそこそ  
 こついているが、向こうの方が一段上だ。ストイック過ぎませんこの人?

そういえば、ザビ家へ復讐するために本物のシャアや素性を知つてゴーグルをプレゼントした学友や親友のガルマを謀つて殺したりするストイックの塊みたいな人だつた。

「ああ、少しいいかな？」

「は、はい」

ビッククリしたな急に話かけてくんnyaよ。

「今日の訓練……いや、レクリエーションの事だが、君は中々良い動きをしていた。私の攻撃をあそこまでかわすとは驚いたぞ」

「赤い彗星にお誉め頂き、光栄です」

「まあ、皆の前だつたので少しキツくアドバイスしたが、攻撃さえ何とかすればエースの素養がある。その事は私が保証しよう」

「そこまで言つて頂けると、何と言つていいのやら……」

「……ふむ、やはり雰囲気が変わつたな」

「げえっ！もうちよつとフランクに接するべきだつたか？シャアなら多分何となく転生の事を理解してくれそうな雰囲気だが、万が一連邦のスペイだと勘違いされでもしたらエライ事になるぞ！軍法会議に出されて下手したら有罪、絞首刑でTHE ENDつてね。

ふざけてる場合じやねえ。あんまり目立ち過ぎると逆に駄目なんだ。そう考えると、

チートみたいなM.S操縦技術が無くて良かつたと思う。いや、それで良いのか?ともかく、目立たないように、そして生き残れるように行動をしなきやな……すつかり転生してきた弊害を忘れて浮き足立つてたわ。

「そ、そ�でありますか?」

「ああ、全体的に真面目な雰囲気になつたな。やはり私の喧嘩の仲裁で言い放つた叱責が効いたのかな?」

「そ、そうですね、私も少し短気な所があつたので、自省をして戒めています」「そうち」

怖い。何か怖い。万が一の事を考えると脂汗じやない汗が出てくる。私の尋常じやない汗を見た少佐は休憩を提案したのでそれに応じた。

「大丈夫か?かなりの汗をかいているようだが。とりあえず水分補給はしつかりと取れ」

「ありがとうございます……」

「もしかして緊張しているのか?」

「まあ、それに近いです……」

「確かに君と私ではかなり階級に差があるが、そこまで気にする事はないぞ」「ですが……」

「気持ちは解る。だが、自省し過ぎてそこまで消極的になると、こちらとしてもやりづらい。私はまだ20の若造で何でもかんでも知つてゐる人生の猛者ではない。」

嘘つきめ、お前の人生えげつないだろ。

「だからこうして、分け隔て無くコミュニケーションを取つて部隊をなるだけ円滑にしようと自分なりに努力をしてゐるのだ。別に嫌味を言つたりしてゐるのではないのだけは理解してほしい」

「はい」

そもそも自分はあまりコミュニケーションが得意な方ではない。しかし、コミュニケーションが必要な部隊では間違ひなく、私が連携を乱して部隊を危険に晒す要因となる。自分でも何とかしたいとは思つてたりするが、いかんせん、これは経験（と語彙力）がものを言う。私はどちらも少ない。ダメだこりや。本当に生き残れるのか？

「よし、休憩は終わりだ。私はクールダウンして終えようと思うのだが、君はどうするのだね？」

「私も軽く運動してから就寝しようと思つていたので、私も終えようと思つていた所です」

少佐と一緒にクールダウンして上がる。プロテインのお裾分けを貰つたので一緒に飲む。うわあ、何とも言えない味だ。不味くはない、旨い訳でもない。プロテインって

こんなもんなのか？シャワーを終えて着替えたら少佐と別れた。復讐に念を燃やす男だが、根はいいやつなのかもしれない、幼少期の生活環境つてかなり後の人生に響くからなあ。

ふあ～、眠くなってきた。この無重力の感じがまた疲れた身体に良く効く。このまま廊下で寝たい気分だが、それは兵士以前に人間としてマズイ。目が冴えない程度にゆーっくりと移動して自室に戻り、すぐさまベッドに寝転んだ。そして意識が明日へ遠のく……。

明日はどうなるのか、

それは明日の自分が決める事だ。

## 第5話 ジーン（転生）の決戦前夜

目を覚ますと適度に背伸びをしながら時計を見た。時刻は午前8時を過ぎていた。  
9時間近くも寝ていたのか。健康的で何よりだな。

ところで何故、私は自分の寝ていたベッドを第三者視点で見ているのだ？ベッドにもう一人の自分が居ないから幽体離脱ではなさそうだが。ああそうか、寝るときにベッドに付いているベルトをしていなかつたから部屋の中でふわふわ浮いていたのか。ふと、隣のベッドを見てみるとスレンダーが白目を剥いて気絶していた。幽霊とでも見間違えたのか？失礼な奴だ。

UC. 0079. 9. 17 AM08:13 運命の日まであと一日

そう考えるとやはりソワソワしてきた。

私の手で歴史を変える。そのまんまアニメの世界に落っこちてきた訳ではないが、今は確実にジーンとして生きている。原作知識の約8割は役に立たないが、やるしかない。とは言つても今日一日は（ゲリラが来なければ）何もする事はない。何をすればいい

いのだろうか？意識すればする程、時間という物は遅く感じる。

### グウ一

……腹が減った。とりあえず飯を食いに行こう。もう少し寝ていたいが、ぐうたらな兵士だと思われたら査定に響くやもしれない。飯を食べに私は部屋を出ることにした。にしてもアイツ、まだ白目剥いていたぞ。

スイスイと食堂まで行き、渡された朝食は、ディストピア飯そのものだつた。一瞬、絶望したがとりあえず食べる。うん、この黄色い棒はカ○リーメイトだね。しかもチーズ味だ。丸い錠剤は薄いラムネだし、チューブはイ○ゼリーそのものだ。味は前世を何となく思い出す程には美味しい。にしても量が多い。これはコツクさん曰く

「MSのパイロットさん特製だぜ？たくさん食つて勝つてもらわなきゃ困るからな！戦場で腹減つたなんて言わせねえんだからな！」

らしい。え？もしかして今日の食事全部コレですか?!そりやないよ！せめてこの前食つたハンバーグぐらい出して下さいよ！って言つたらすんごく睨まれました。スンマセン。

食堂を出ようとしたら、スレンダーに後で多目的室に来るようになつた。お礼参りじゃなさそうだが、はたして。

多目的室に着いて辺りを見回す。食堂とは違ひ、椅子とテーブルが丸い。観葉植物も

置いてあつて休憩にはピッタシだ。それより目を見張るのがそれなりに大きい窓だ。ここから外の景色がみえる。吸い寄せられるように窓に近付くと、無限に広がる暗闇とそこに輝く星達が居た。遠くの方に地球が見える。ああ、やつぱり地球ってのは青くて丸いんだなあ。ずーっと見ても見飽きない氣色は10分ちよつとで終わりを告げた。スレンダーに呼び出されてそちらに行くと、スレンダーとデニム曹長が居た。おお、あのデニム曹長だ。身長は自分より少し小さいが、横つ腹は一回り大きい。とりあえず三人とも席に着く。

「急な呼び出しで悪いな、ジーン。」

「いえ、大丈夫です」

「明日の事で詳しい段取りをと思つて集まつてもらつた。そこまで時間は取らせないから聞いて欲しい」

こんな所でミーティングかいな曹長さん。一応ミーティングルームがあるから、そつちの方がいいんじやないの？万が一スパイが居たら大変やし。まあ、とりあえず話を聞こう。

曹長が話したのは侵入ルートの再確認や役割分担などだつたが、ここで話す意味はあつたのだろうか？20分もしないで終わつてしまつて少し拍子抜けした。話が終わらうかと思つたら曹長が

「明日の事はこれぐらいにして、少し個人的な話がしたい。予定とか大丈夫か?」

「いえ、特には」

「私も同じく」

「じゃあ、少しだけ話をしよう」

もしかしたらこれが本題かもしれない。多目的室に集まつたのも何となく理由が分かつた。

「ジーン、お前最近になつてすこし丸くなつてきたんじやないか?」  
「えっ!?

ヤバい自分の話題かよ

「出発直後は野心燃えたぎっていた感じがしたが、最近になつて真面目になつてきたよな?」

「確かに様子が変わりましたよね」

スレンダーも追い討ちをかけてくる

「別に悪い事ではないぞ？野心のせいで偵察任務がおじやんになつたら元も子もないからな」

転生してこなきや命令違反してましたよこの人

「何か心変わりした事でもあつたのか？」

転生してきました！なんて言える訳ない  
めちゃくちゃこの場から逃げたしたい。

「やはり少佐の言葉がきつかけですかね……」  
「うーむ、やつぱりあれか……」

なんですか？軍法会議か何かですか？

「いやあ、時間取つて悪かつたね。また明日会おう」

……身構えてたが、どうやらこれで終わりらしい。え? もしかして私はパイ容疑掛かっています? ヤバくない?? 本当に軍法会議に掛けられるパターン?? イヤワタシジーンホントアルヨ?

まさか一時間もしないで開放されるとは思わなくて何するか全く決めていない。とりあえずもう少しだけ外の景色でもみようかな。いやはや、本当に自分は宇宙に居るんだなあと感心する。感慨深いなあ。

多目的室に備え付けてある自販機でジュースを飲んでのんびり過ごしていたらもうお昼が近い。本当に宇宙から見る星空は見てて飽きない。名残惜しく部屋を出て食堂に向かう。朝食と同じメニューと量が出される。モグモグ食べているとコツクがこつちを睨んでた。いや、文句はもう言いませんって。言わないから。

食堂を出た私はふと思う。「目立たないようにならなければ、もしかして危ういのでは?」と。実際色んな人に様子が変わったと言われる。もし転生したのがシヤアならまだ変人止まりで済むが、ジーンの場合はスパイと思われてもおかしくない。身の振り方を間違えないようにしなければ。でも生き延びたいからシミュレーションルームに行つて特訓する。こればかりはしようがない。誰も居ない事を確認してシミュレータを使

う。

とりあえず対ガンダム戦を予想して地上戦一対一でシミュレーションしてみる。相手ザクの見た目を白くして動きや装甲値を単純に5倍にしてみる。下手したら5倍以上だが。

とりあえず一戦やつてみたが、流石に移動力5倍はやり過ぎた。ザクIIの走行速度は確か100km/hだったはず。その5倍となるとガンダムを通り越してアレックスの速度になる。対アレックス戦を想定してるならあの設定でもいいのだが、あんな化物MSと戦う事なんて99割無いぜH A H A H A

とりあえず移動力は2倍に押さえて装甲値はそのまま。これで再戦してみる。

先ほどは10秒掛からずにやられていたのが、なんということでしょう。一分に変わつただけではありませんか。装甲値がザクの5倍あるのでザクマシンガンはおろか、ヒートホークでさえも効きません。連邦軍はなんていうMSを作つてしまつたのでしょうか？（シミュレーションだけど）

とにかく黙つていればガンダムと戦闘になることは無い。大人しくしていればモーマンタイだ。気づくと出撃まで12時間を切つてた。今のうちに仮眠を取ろう。そして自分の部屋に帰り、ベッドに横たわるとだんだんと眠くなつてきていつの間にか寝ていた。

……

……

……

うーん……ガンダム……

ビーム受けたら即死……

サーベルも斬られて即死……

後ろにキヤノンもタンクも要る……

やばない?……

積みやない？……

ムリゲーじやない？……

……

むにやむにや……

今何時？

……  
20時か。

20時!? ガバツ

やべえ! あと6時間で出撃やん! あのまま寝てたらあと4時間は寝ていたわ。ぼちぼちと食堂に向かいデイストピア飯を貰いに行つた。

「ないよ」

へ?

「なんだ? 胃袋に飯詰め込んで吐きたいのか?」

ああ、そういうことか。偵察任務だけど万が一戦闘になつた時に、宇宙空間でブンブンMSを動かしたら確かに吐きそう。ヘルメットの中が地獄絵図になる事は容易に想像がつく。朝と昼の量が多かつたのはこれが理由なのかな? にしても食堂に行つて言われた一言目がアレである。もう少し気を使つて欲しいもんだ。

仕方ないのでまた多目的室にいってジュースを飲みながら外を見る。窓の端にサイド7らしきコロニーが見えてきた。あそこに行くのかあ。しかし、地球が朝見たときよりも少し小さくなつた気がする。サイド7つて以外と遠いのかな? ホント、こんなところにコロニー作つて住んじやう宇宙世紀の人々には頭が上がりませんわ。

いやあ、2時間も潰せた。やはり宇宙の神秘や人類の叡智には見とれますわあ……な

んか色んな人に変な目で見られていた気がするけど気にしない。うん、こういうのは気になら負けだ。

通路をスイスイと移動日してトレーニングルームへ行く。ジーン（転生）さんがアツプを始めました。ランニングやダンベル上げなど疲れない程度に汗をかいてシャワーを浴び、MSハンガーへと向かう。

出撃まであと2時間だ。

## 第6話 ジーン（転生）とV作戦 [前編]

人類が増えすぎた人口を  
宇宙に移民させるようになつて  
既に半世紀が過ぎている

地球の周りの巨大な人工都市は  
人類の第二の故郷となり  
人々はそこで子を

産み

育て

そして死んでいった

宇宙世紀0079

地球から最も遠い都市サイド3は  
ジオン公国を名乗り

地球連邦政府に独立戦争を挑んできた

この一ヶ月あまりの戦いでジオン公国と連邦軍は  
総人口の半分を死に至らしめた

人々は自らの行為に恐怖した……

どうも、ジーン（転生）です。ようやつと機動戦士ガンダムの第1話にたどり着きました。コロニーまであと5kmといつた所です。そうです、三機のザクがスーザー言いながらコロニーに近付くあのシーン真っ只中です。

ちなみに出撃までの2時間は軽くミーティングをして待機室でゆっくりしてから出撃して約四時間のMSでの宇宙遊泳を楽しんでおります。予想通りゲリラとかに襲われる事も無くサイド7まで来れました。襲われてたら第1話無くなっちゃうもんね。

そろそろ独り言もこれぐらいにしてサイド7への着地の準備をする。ゆっくりとサイド7へ近付く。

クボオン

クボオン

クボオン

何とか成功する。いやあ、緊張してきたね。

「スレンダー、ハツチ開閉用のツマミがあるはずだ。探してくれ」

デニム曹長の指示でスレンダーがハツチ開閉用のツマミを探して開ける。そうするとゆっくりとハツチが開き、ザクが入れるぐらいまで広がった。曹長を先頭にサイド7へと侵入する。少し進むとスレンダーのザクが作業用のアームにぶつかり、壁に跳ね返り自分達が元来た道へ向かつていった。

「おい、あまり物音を立てるなよ」

「す、すみません」

そうしてもうひとつハツチの前まできてハツチを少し開ける。

「スレンダー、お前はここに残れ」

「はっ、曹長」

あのやり取りを見ている。本当にガンダムの世界に転生してきたのだと改めて実感する。二機のザクがコロニーの大地へ向けて下降を始める。遠くに見えるのはあの鬼畜天パと愉快な仲間達が住んでる居住区だ。人の気配はあるでしない。

ズササーッと山（みたいな？）の斜面を降りる。機体を安定させたところでザクの左手をコツクピットの位置に動かしてそこに乗る。

うわっ、高いな……実は高い所が苦手である。安全柵も命綱もない所での高所作業は

本当にヒヤヒヤするものである。しかしごりのもいい加減にして電子双眼鏡を手に取り、連邦軍の施設を探す。んーと、連邦の施設は……あつたあつた、右上か。

「曹長、軍の施設は右上のプロックのようです」

ジーン、記念すべき第一声。

「出勤時間のはずですが……車が一台行つただけです。人影はありません」

確かに、あそこらへんがアムロの家のはず……

「ん？ 居ました！ 子供のようです！」

家に入つていくフラウ・ボウを見届ける。確かに軍艦が入港するから避難するよう伝えられるんだつけ？ 見届けた後、デニム曹長が声をかける。

「いったい、どうしてこんなに人の気配が無いんだ？」

「もしかしたら、連邦の軍艦の入港があるからかもしません」

「どうしてそう思う？」

「連邦の新型軍艦は多分、サイド7にあるV作戦関連のMSを運ぶために入港したのだと思います。なので、その収容作業を住民に紛れ込んでいるかもしれないスペイに見られない為に住民全員を避難させてていると考えると、辻褄が合います」

「確かにその可能性が高いな……とするとやはりV作戦の施設はここにあるという事か」

「そうでしょう」

連邦の施設を見ているが、まだ動きは無い。時刻は午前6時32分。まだ入港していないという事か？追手から逃げる為にあえて蛇行したりして遅れているのか？

「ホワイトベースにガンダムの部品を載せればいいんだ。地上の作業を急がせろ」「はっ！」

連邦士官が外部観測所に移動する。

「ホワイトベースめ、よりによつてジオンの船につけられるとはな」

観測所に着き、入港してくる戦艦を見る。

「おほお、これか」

「はっ」

「流石、我が連邦軍の新鋭戦艦か。この艦とガンダムが完成すればジオン公国を打ち碎くなぞ、造作もない」

真っ白な戦艦が入港してくる。その戦艦はまるで木馬のような見た目で、力強い白馬

に見えてくる。その力強い白馬は本当にジオンを打ち碎く鉄槌に思えてきて、士官は満足そうな表情になる。

UC. 0079. 9. 18 午前7時00分

ホワイトベース入港 MSの運搬を開始

「連邦のMSらしき物が出てきました！」

「なに！ 本当か？ よし、撮影を開始しろ！」

「了解！」

手に持つていた電子双眼鏡で撮影をする。何気に優れものである。倉庫から出てきたMSの写真を撮る。あれはガンタンクの上半身だな。パシヤリ

あつちは、えーと……あつ、ガンキヤノンか。これも上半身。パシヤリ

肝心のガンダムちゃんが居ない。最優先で運び足しているはずなのだが……

「ジーン、MSの存在を少佐に知らせろ」

「はつ曹長。暗号を使います」

えーと、確か暗号は……

サイド7の遠く、そこには一隻のムサイ級戦艦ファルメルの姿があった。そこに、ヤツはいた。

「私もよくよく運の無い男だな。作戦の終わっての帰り道でみんな獲物に会うとは……ふふつ、向こうの運が良かつたのかな？」

「作戦つて何です？ V作戦の偵察ではなくて？」

「いやあ、何となく言つてみたかつただけだ。気にするな。」

「はあ……しかしシャア少佐、あんな僻地のサイドに連邦のV作戦の基地があるんでしようか？」

「あるよ。我々のザクMSより優れたMSを開発しているかもしけんぞ」「まさか。あんな僻地のサイドで……」

「……遅いな」

ピュウーーージジジ

「来ました！……暗号 C C 2 です」

「みろ、私の予測した通りだ」

「で、では連邦軍も M S を？」

「開発に成功したとみるのが正しいな」

遙か遠くに見えるサイド7を眺める少佐。予想を的中させる少佐に半ば呆れている少尉。孤高の戦艦ファルメルはサイド7とルナツーの間で戦士の帰還を待っていた。

## 第7話 ジーン（転生）とV作戦「後編」

前回のあらすじ

ガンダム第1話が始まりました、終わり。

「曹長、ここからなら、かなり近くで偵察が出来ます」

「いやはや、ここまで近づいて気付かないとは……」

「連邦軍は呑気な連中が多いようで」

「ありがたい事に変わりは無いがな」

上司とお喋りしながら偵察中です。いやー偵察つて敵に気づかれなきやホントに楽な仕事やねー。まあ、見つかった時やどつかの誰かさんが暴走した時が修羅場に化けるんですけどね。

しかし本当にガンダムが見当たらない。おつかしいなあ……最優先で運び出してもおかしくないのになあ……。にしても連邦はのんびりし過ぎである。最初にタンクとキヤノンが出て来てから、まだ他のMSが出てこない。仮にも敵であるジオンの船に付けられているのだからもう少し警戒とかしてみたらどうだろうか？そのおかげで易々

と基地近くの岩場まで来れたので、こちらとしては物凄くやりやすいのでいいのだが。

「うむ、三台目もMSか……まだあの中にあるかもしねん」

三台目もキャノン先輩でした。

死角はさほど無いから、もうそろそろ出て来てもおかしくないんだけどなあ……

「叩くなら今しかありません」

「我々は偵察が任務だ」

「しかし、敵のMSがあの戦艦に載つたら――

「……」で我に帰る。今、自分は何を言つていたのだ？まさかこのまま連邦の基地を襲撃しようとしてたのか？危ねえ！無意識に命令違反する所だつたぜ――このままだと原作通りに死ぬところだつたよアブネエ……

「手柄の無い事を焦るでない」

「……もどかしいですね」

「何度も言うが、これは任務だからな」

( ^ ^ ) :

( □□ )

（（（））セフセフ!!

危ないところだつた。いや、本当に。今でも手柄をあげて昇進したい欲望を押さえている所だ。このまま偵察任務が終わればアムロはガンダムに乗らないし、ララアも死なずに済むはずだし、何よりあのロリコン野郎が暴走しなくて済む。ガルマの謀殺も防げるので一石五鳥である。

しかし、ホワイトベースがこのまま無傷でジャブローに行つたらどうなるんだ？ジオン大勝利説もあるけど、もうこの時点でのジムの量産つてほぼ始まつてるんだよね？つて事はやつぱりジオンは負ける運命なのか？となると下級尉官にすらなつてない俺はやつぱりMSを駆使してこの一年戦争を生き延びなきやいけないのかあ……

おーガンダムか。しかし、偵察が終わった後の部隊編成はどうなるのだろうか？やはりキヤメルパトロールに所属になるのかな？それとも……

が、ガンダムう  
?!?!

双眼鏡をヤツに向ける。間違いない、あのオモチャみたいな白×赤×青×黄色のカラーラーは間違いなくRX-78-2ガンダムだ！トレーラーに横たわっているので二号機に間違いない！あれを……あれを破壊出来れば……ジオン十字勲章も夢では……いや駄目だ、壊したいのは山々だがそれでは飛び出しを我慢した意味がない。仕方ない、ここはジャブローに送られるのを見送る他ない。ぐぬぬ。

時刻は8時を過ぎて25分。実戦だと8時にはもうジーンが暴れまわってるらしい。そんでもって9時にアムロがガンダムに乗るらしい。え？一時間も対処出来ずにザク野放しにしてたの連邦軍？そりや、ホワイトベースの正規クルーの半分失う訳だよ。

「ジーン、そろそろ少佐に報告しよう」

「了解しました」

とりあえ経過報告をして指示を仰ぐ。このまま偵察続行か、撤退か。少佐なら「もう少し粘つてこい」って言いそうだなあ。やだなあ、の人大気圏で戦わせる人だからなあ。人使いが荒いと人がどんどん居なくなるよ……物理的に。（99%天パのせいだが）報告するその前にガンダムをパシヤリ。いやあ、軍事機密って感じのベストショッツ

トが撮れましたなあ。

通信装置に手を掛け、指定されたチャンネルでファルメールに連絡をする。幸い、コロニー内のミノフスキーパーティーは無いに等しいので連絡は取れる。そして待つこと十数秒でつながった。

偵察部隊からの定時連絡を待つシャア少佐。もうそろそろ来てもいい頃合いなのだ  
がと思ったその時、通信が入る。ちゃんと偵察が出来ている事に思わずほっとした。

「通信です」

「やつとか」

「……チャンネル5630。偵察部隊からです」

「よし、繋げろ」

手際よく通信を繋げる少尉。少しするとあの男の声が聞こえてきた。

『少佐、聞こえますか少佐』

『ジーンか、聞こえている。そちらはどうだ?』

『V作戦のMSと思わしき三種類の機体が出てきました』

「三種類か……どんな感じだ？」

『はい、一つは青色ベースのタンクです。下半身がキヤタピラで両肩に長い砲身があり、マニピュレータも砲身になつておりミサイルが打てそうな見た目をしています』  
『MSのタンクだと？連邦も甘いようだ。上層部をなだめる為に一機目はタンク型にしたのだと思うと涙が出てくる。』

『続けてよろしいでしようか？』

『大丈夫だ、続ける』

『はい、もう一つは全身が赤色のキヤノンです。両肩にキヤノン砲を備えており、頭部に二門のバルカン砲が確認出来ます近接武装は無いようです』

『ふむ、二機目はキヤノンか。一機目は長距離支援として二機目は中距離支援といつた所か。悪くはなさそうだ。』

『では最後に。三機目のMSは白色ベースのMSでキヤノンと同じく頭部に二門のバルカン砲があります近接武装は見当たりません』  
『他の武装は見当たらないのか？』

『はい、今の所それらしき物は見当たりません』  
『もう少し探つてみろ、ザクで言うところのザクマシンガンが無いのは流石におかしい』  
『少々お待ち下さい少佐。武器らしき物が見えてきました！』

「本当か？よし、それを撮影した後、報告をしろ」  
『了解です！』

そうしてしばらく通信が途切れた。ふむ、どうやら運という風は我々に吹いているらしい。あとは連邦がどのぐらいのMSを運ぶかが問題だ。少なくとも一個小隊はあるのが判つた。ここで通信が戻る。

『少佐、少佐、MSの武器なのですが……』

『どうしたのだ？言つてみろ』

『はい。見た目はライフルなのですが、パレットや薬莢の排出の穴が無さそうなんです』  
「ふむ、そうなると考えられるのは」

『ビーム兵器……ですかね？』

『そう考えるのが一番自然だな。』

画像を見てみない事には確証出来ないが、連邦には力ネと物資はあるので、可能性は大いにある。厄介だな、ジオンではようやつと次期主力MSのプロトタイプが生産が開始された所だ。しかも手持ち武器はビーム兵器なのだが、本体の生産が決まつたにも関わらず、まだ開発中なのだ。この偵察で開発が進むといいのだが。

『少佐、連邦のMSなのですが』  
「なんだ？」

『たつた今、三機目のキャノン型が確認されました。もしかすると、他の二機も同じ数だけある可能性が……』

「ふむ、そうすると単純計算でMS一個中隊はあると？」

『かもしません』

『……厄介だな』

「一個中隊だと？冗談ではない！あの新型戦艦にそれほどの積載能力があるというのか！ジャブローに行く予定なら大気圏突入能力もあるはずだ。そんな物をノコノコと持ち帰らせる訳にはいかんな。よし。

『ジーン、聞こえているか？』

『はい、聞こえます少佐』

「連邦のMSが一個中隊ある可能性が高い。我々はこれを脅威とし、今から連邦の基地を叩く。出来るだけの破壊活動をして戻つてこい。」

しばらく沈黙が続く。その後に帰ってきた言葉には分かりやすい程の焦りが伝わってきた。

『しょ、正氣ですか少佐?!我々の任務は偵察では——』

「古来より、偵察任務が威力任務に変わる事は多々ある事だ。それに連邦のMSの一機でも持ち帰つたらジオン十字勲章ものなのは確実だ。二階級特進も夢ではないぞ?」

## 第8話 ジーン（転生）の死亡フラグ

おい、コイツ今なんて言いやがった???

『我々はこれを脅威とし、連邦の基地を叩く』

だとおおおおおお!!!?

ふざけるな！

今までの!!

俺の努力は!!!

一体!!!

何だつたんだよお

!!!!!

『聞こえているのが、ジーン伍長』

「……はい、聞こえています」

『デニム曹長も大丈夫か?』

「はい、大丈夫です」

『スレンダー軍曹は?』

「聞こえています」

どうしよう、上官命令じや断る訳にはいかない。ランバ・ラルみたいに上官の命令を突つぱねる度胸は無い。しかし、せっかく回避した死亡フラグをマザコン野郎に修正されでは困る。修正するのは8年後のニュータイプ少年にお願いします。

『ジーン伍長とデニム曹長はそのまま敵基地を破壊。スレンダー軍曹は退路の確保、及びできる限りの撮影を頼む』

「はっ」「了解」

時間が無い。どうすれば死亡フラグをへし折る事が出来るのか、どうやら戦闘せずに済むのか……

『ジーン伍長、聞こえているのか!』

「……」

「おいジーン、返事をしろ！」

待てよ、へし折るのが無理なら……

「少佐、一つ提案があるのでですが……」

『なんだ？ 言つてみろ』

生か死か。一か八かの博打に出る

「少佐、連邦のMSを奪いませんか？」

一瞬、場の空気が凍る。

MSのパーティが盗めたら御の字だが、逆に言えばそれが関の山である。ましてやMSごと盗むのはいくら無能な連邦軍とはいえ許してはくれないだろう。でも電撃戦ならもしやすると……

「じ、ジーン！ ふざけた事を言うんじや——」

『ほう、どうやつて盗むというのかね？』

「しょ、少佐？」

ここで一気に攻勢に出る

「少佐もこちらに来て連邦の基地を叩くのですよ。その間に我々がMSを運搬します」

「正気かジーン！そんな作戦少佐が許す訳が」

『話を続けてくれ、やるかどうかは後で決める』

「少佐あ……」

情けない声を出す曹長を無視して話を続ける

「少佐がこちらへ来るまで我々は基地を叩きます。少佐が来たら赤い彗星として存分に暴れまわってる間に我々がMSの強奪をして撤退します。ファルメルにもベイブリッジ付近を攻撃して攪乱して貰えるとありがたいです」

『この私をオトリとして使うとはな……』

「じ、ジーン、貴様……」

曹長は怒りというより焦っている。少佐の作戦に伍長が喰つて掛かつてゐるんだからそりやそうだ。

『…………』

少しの間沈黙が続く。私は最後の一押しをする。

「少佐、先ほど言つたじゃないですか。『連邦のMSの一機でも持ち帰つたらジオン十字勲章ものなのは確実だ。二階級特進も夢ではないぞ？』と」

『あれは景気づけで……』

「それに少佐、連邦のMSに乗つてみませんか？歯獲すればソロモンに着くまで存分に楽しめますよ？」

『……まさか君がここまでたらし屋だとは思わなかつた。負けたよ。実は君たちが帰

還したら私もそちらへ偵察に行く所だつたから、その手間が省けたと思えばいい。』

「提案の採用、ありがとうございます！」

「……」

曹長とスレンダーの返事がない。まるでしかばねのようだ……生きているのか？

『よし、善は急げだ。ドレン、ここからMSで全速力でサイド7まで行つたら何分掛かる  
？』

『少佐のMSなら三十分あれば』

『よし、各員時間合わせ』

時計を見る。時刻は午前8時43分だ。

『時刻は0843で合っているか？』

「「合つてます」」

『グリニッジ標準時間0850にて敵基地襲撃、及び敵MSの鹹獲作戦を開始する。襲撃は先の通り、ジーンとデニムにやつて貰う。スレンダーも侵入口の確保を頼む。私が来たら、二人はMSの鹹獲を頼む。この作戦はもしかすると、歴史の1ページに刻まれる戦いになるかもしけん。作戦の成功を祈る。ジークジオン。』

「「ジークジオン！」」

さて、ここで一人会議。

まず、あの鬼畜天パでお馴染みのアムロ君の所在だけど、フラウと一緒にエレカートに乗つて避難していたからあの家には居ない。細かな違いはあれど、基本的にはアニメ版基準で進んでいるから多分、ガンダムの研究データとか沢山あるはずだけど基地から居住区まで意外と距離があるので、

「あーやつベーキよじゅうくにまちがえてきちゃつたーってへ♥？」なんて事は出来ない。次に盗むMSだが、これはもう”アレ”しかない。モチのロン、ガンダムだ。しかし結局ガンダムの二号機は盗まれる運命なのね……

しかし本当にどうしよう。俺達が暴れまわつたらアムロ含むコロニーの住民達がホワイトベースに向けて走り出すけど、そいつらを見境なくザクマシンガンをぶっぱなすつてのは心苦しい。だつて、記憶が正しいのなら前世は普通の会社員だつたはず。戦闘経験は勿論、”人殺し”なぞやつた事なんて無い。論理的に、進んで非人道的行為はしたくない。でも基地襲撃も沢山の連邦兵士を殺す事になるはずなので結局変わりはないのだが……

うん、こういう時は深く考えない。もうどうしようも無い所まで来ちゃつたのだから。かの超A級スナイパーも「人を殺すと考へるのでは無く、事を済ませると考えろ」つて感じの事を言つていたはず。俺はもう、明日へ向かつて生きるしかないのだ。悲しいけどコレ、戦争なのよね……

「ジーン聞こえるか？」

「はい、何でしよう？」

「これから作戦の役割を決める」

「はい」

「ジーンはMSがある倉庫を攻撃してくれ。私はベイブリッジ付近を攻撃して攪乱させる。そして少佐のMSが来たらめぼしいMSを二人で奪取してスレンダーの元まで行

き、我々は撤退する。いいな?」

「はい曹長」

よし、これならガンダムの元へ楽に行けそうだ。

「弾はあるか?」

「はい、1パレット分キッチリあります」  
「MSの状態は?」

「オールグリーンであります」

「よしあと一分だ、気を引き締めろ」

「了解!」

作戦時間まで1分を切る

二人に緊張がはしる

3  
.....  
2  
.....  
1  
.....

M Sを連邦の基地へ照準を向ける

1  
5  
.....  
1  
0  
.....

安全装置を解除し、攻撃準備をする

5  
0  
.....  
4  
0  
.....  
3  
0  
.....

バシュン！

ドカーン！ バーン！ チュドーン！

ガンキヤノンの上半身が横たわる。ガンタンクの上半身が勢い良く転げ落ちる。爆発と共に燃え上がる。♪燃えあがれーなんだこれ？結構……” カイカン”

じやないか。よつしや、ぶつ壊し回ろう。

「おお、近いぞ」「隕石じゃないの？」

シェルターに避難していた人達がどよめく。そこに一人の少年が居た。その少年は勘づく。

「こ、この振動の伝わり方は、爆発だ」

「じ、ジオンだ。ジオンの攻撃だ」

ここは危ない。このままではそのうち爆発に巻き込まれて自分たちは死ぬ。ふと自分の父親が軍人なのを思いだし、もしかしたらと考えて立ち上がる。

「き、君。勝手にここを出ては皆の迷惑に……」

「父が軍属です。こんな待避カプセルじゃ持ちませんから今日入港した戦艦に乗せてもらうようには、頼んで来ます」

中年の男はやめるよう言つたが、その少年は扉を閉めてくれと言い残し待避カプセルを後に入した。

作戦開始から10分経過

シヤア少佐到着まであと20分

作戦開始から10分が経過した。え？ 10分？ まだ10分しか経つてないの？ 結構

ボコボコにしたよ？ 有線誘導ミサイルさえ当たらなければ、守備隊の装甲車なんてへのカツパだから存分に暴れまわつたけど、まだそんなもんなのか。

「よし、そろそろベイブリッジに行く。何かあつたら直ぐ連絡をしろ」

「了解であります」

曹長のザクがベイブリッジ付近まで飛んでいった。よし、俺も基地破壊に精を出しますか。しかし避難カプセルってどこにあるんだろうか？機動戦士ガンダム一年戦争をもう少しプレイしておくべきだつたな。

少年が待避カプセルを出ると、すぐ左にザクが居た。ジオンのMSだ、と騒ぎだす避難民たち。

「こ、これがジオンのザクか……」

テレビでは観たことがあつたけど、まさか生で見るのは思わなかつた。思つたよりも大きくて少しふっクリした。いや、そうじやない。親父を探さないと。乗つてきたエレカーデ探しに行く。出発して直ぐに軍のエレカーとすれ違つたので乗つっていた軍人に親父の居場所を聞き出す。

「貴様、民間人は待避カプセルに入つてろ！」

「技術士官のテム・レイを探しているんです。どこに居るんですか？」

「船じやないのか？」

「どうか船か、どう言う軍人の言うとおり戦艦に行こうとしたが、その矢先に有線ミサ

イルが飛んで来る。咄嗟に地面に突つ伏し顔を伏せる。物凄い爆発音と熱風が伝わってきた。そしてそれがおさまり、ゆっくりと軍人が居た場所に目を向けると、そこは廃墟と化していた。し、死んでる……さつき質問に答えてくれた軍人の姿はそこには居なかつた。まずい、早く親父の居る戦艦に行かない。立ち上がり、逃げようとした時にふと、足元に落ちていた本に気づいた。それを手に取り読んでみる。これは……ガンダムの極秘資料だ。間違いない、親父の部屋で見たものとほぼ同じだ。やっぱり親父は連邦のMSを作っていたんだ。少年はしばらく父親を探すのを忘れてその場で極秘資料を読み漁つていた。

作戦開始から20分経過

シャア少佐到着まであと10分

いやあ、かなりボコボコにしましたよ？ チヨロチヨロ出てくる守備隊を殲滅しながらタンクやキヤノンをこれでもか、つてダメージ喰らわせましたが、一体ガンダムのパーツが入つてる倉庫つてどこなんだ？ とにかく、しらみ潰しに倉庫をぶつ壊しているけど、何か感触がイマイチなんだよなあ。ガンダム二号機は無傷で持つて帰るので何も

していなけれど、早く少佐が来ないとあの鬼畜天パが乗り込んでしまう。その可能性だつてまだ大きいにある。早く来てくれないかなあ。そんな事を思いながら有線ミサイルを撃つてくる装甲車に鉛弾をお返しする。釣りは要らない、取つときな。

「早く武器を！ ホワイトベース、コアファイター発進出来ませんか！」

「出来る訳無いだろ！ サイド側の壁はザクの攻撃でこれ以上開かないんだ！ 民間人が通るので精一杯だ！」

ホワイトベースの艦長、パオロ・カシアスは内心焦っていたが、それを表立っては出さずに淡々と現状確認をする。

「戦闘員は全員出たのか？」

「はっ！ パイロットもガンダム収用に下ろさせました」

「……サイドの中から攻撃とはな」

ジオンの船に付けられていたのは分かつていたが、まさかコロニー内で戦闘を行ふとは。頭を痛める老兵だが、休んでる暇は無い。ここで指示を出して腰を据えなければ、艦長失格だ。今はパイロットやガンダムが無事なのを祈るしかない。

作戦開始から30分

シャア少佐到着予定時刻

『よし、もう少しで着く。スレンダー、準備をしてくれ』

「了解」

『デニムとジーンも警戒を怠るなよ』

「了解です」「大丈夫です」

やつと来てくれた。思わず安堵の息をつく。ガンダムが無傷でてに入る。ジオン十字勲章は確定。あのガルマ・ザビでさえ、大部隊を率いても手に入れられなかつたあの、ガンダムが、ついに、我々の手に入るのだ！曹長もベイブリッジの攻撃を終えてこちらに合流した。

「よし、少佐はもうすぐでこっちに来る。それまで気を抜くんぢやないぞ」

「分かつてますつて。でも守備隊はもう殲滅したといつても――」

ズガガガガガガガガガ

へあつ?!まだ守備隊が居たのか?!にしても攻撃が装甲車のマシンガンとは少し違う。  
あの方角はガンダムしか居ないはず……

ガンダムしか……

ガンダム……

ガンダム……しか……

ガンダムう?  
!!

## 第9話 ガンダム大地に立つちやつた

「で、デニム曹長！て、敵のMSが動きました！」

「な、なに!?みんな部品ばかりだと思ったが……」

ま、間違いない。あの攻撃はガンダムのバルカンだ。あの打ち方はド素人。しかし、その

”ド素人”

の中身が大問題だ。あれは絶対にあの鬼畜天パことアムロ・レイが乗り込んでいる。

が凍つてきた。ジオニックフロントや戦士達の軌跡のやり過ぎかな？

ガンダムの左足が地面に着く。あつヤベエ、なんかガンダムの足音聞いただけで背筋  
が凍つってきた。ジオニックフロントや戦士達の軌跡のやり過ぎかな？  
ガンダムの上半身がのそつと上がつてきたところでマシンガンを放つ。うん、効かないね。カンカンカン！でガンダム爆発したら万歳三唱なんだけどなあ。まあ、攻撃が効かなくとも、モノアイカメラで録画撮影をして記録を残しているので、これはこれでいいのだ。とりあえず、あのセリフを……

「な、なんてMSだ。ライフルを全く受け付けません！」

「見てろよザクめ！」

あのザクが、無関係なコロニーの住民や、フラウの家族まで奪つていったんだ！  
くそつ、ザクのマシンガンを耐えられる程の装甲があるのはいいけど、どうやって攻撃すればいいんだ？と、とにかく立ち上がらないとこのままじゃ、やられる。右レバーのボタンを押せばバルカンが出るから今はそれでやつつけるしかない。何とかしないと……

守つたら負ける!!攻めろ!!!銃身が焼きつくまで打ち続けるんだ!!といったところでデニム曹長の抑止に入る。

「少佐が来るまでに殺られては意味が無いぞ！ここは一旦退くだジーン！」  
なに言つてるんだコイツ！ガンダムの恐ろしさを知らないからそんな呑気な事が言えるんだ！

「何言つてるんです！ここで倒さなければ、ジオンは滅亡します!!」

「な、何を言つているんだ?!ジーン、とにかく落ち着け！……うわっ、立つた！」  
あつ、聞こえる。あのBGMが聴こえてくる。あのガンダムが立ち上がつて希望の光が見えてくるあの音楽が。俺達にとつては絶望のどん底に突き落とされる音楽だが。

おつと、そろそろまた撃つてくるはずだ。よつと

ズガガガガガガガガ

相手の武装が分かつていれば結構、弾筋つて見えるもんだね。にしてもこつちはマシンガンで頭部とか狙つてているけど全つ然効いてる様子がない。お、弾切れだ！よつしや！こつちもマガジンが空になつたから白兵戦に持ち込むぞ！弾が尽きたザクマシンガンをガンダムに投げつける。ガンダムはろくに避けれずに当たつて怯む。

「遅い！」

ザクのタックルがガンダムにヒットする。するとガンダムがバランスを崩してその場で倒れる。俺は、この時を待つていたんだ！すぐさまヒートホークを持ち、ガンダムに振り掛かる。1発、2発と確実にダメージを与える。へへつ、いくら装甲が厚くたつて……これ、効いてる？何となく当てた所焦げて傷が付いているけど、これ本当にダメージ通つているの？でも振り続けるしかない。だつてアムロが乗つてているんだもん。ガンダムを持つて帰る前にアムロ君に宇宙世紀から退場してもらわないと、私の第2の人生がここで潰れてしまう。私はヒートホークが使える限り振り続ける。

「うわああああああ！！！」

なんなんだあのザクは！いきなりマシンガンを投げつけてきたと思つたらタツクルしてきて、今度は斧で攻撃してくる！このままじゃガンダムが持たない！どうする？何か武器があるはずだ。武器は……ん？ビームサーベル？これか！よし！

おらつ！おらつ！はあ、はあ、はあ……

おうらつ！死ねえ！はあ、はあ、……

なんなんだ！もう！本当に本当にっ！

おかしいだろ！ガンダムの装甲厚すぎ！

化けもんどころの話じやねえよ！

くそつ！何がいけないんだ！

もう、訳がわからんねえよ！！

落ち着け……

戦場で落ち着きを失った奴が先にやられる……

よし、見えてきたぞ。

ガンダムが倒れて、ヒートホークを振り下ろして攻撃していたけど、上手く当てられていなかつたみたいだ。だからかすり傷みたいな跡しかないんだ。まあ、対MS戦用の格闘モーションが無いのは仕方ないよね。そんでもつてガンダムが今バルカンを切らしていく残っている武器は……

ピィキュイーン

そうそう、ビームサーベル……

つて、へあああつつつつつつ!!!!

咄嗟にザクを後退させる。おもいつきりスラスターを噴き、回避を試みる。そして轟音と共に地面に倒れこんだ。ぎ、ギリギリセーフか？ん？なんだ？何でザクの右腕があんな所に……

え？斬られた？もしかして斬られたんですか？やばない？あの態勢から上体起こして斬られるって、もう無理ゲやん。勝ち目ないやん。どないせえつちゅうねん。と、とにかく立ち上がってから考えよ。後は何とかなるやろ。知らんけど。

「ジーン、スレンダーダーが待っている所までジャンプ出来るか？」  
「バランサーは正常なので行けます。ジャンプします！」

「逃がすものかあつ！」

斬りつけたザクが逃げようとしている。かなり高くまで飛び上がったけど、絶対に逃がしはしない！知らず内に上昇ペダルを踏みつけて逃げるザクを追いかける。これでトドメだ！

うわあああああああああああああ  
!!!!!!

あああああああ  
!!!!!!

終わつた……俺の第2の人生はたつた3日で終わつた……もう逃げられない。もう、  
逃げられ……ハツ

ピイキイン  
ジリジリ  
バシュイン

ダダン！

チュドーーーン!!!

「うわあああああつ……」

「じ、ジーン!! 応答しろ! ジーーーン!」

『ちいっ、遅かったか!』

「しょ、少佐あ! 何故遅れたんですか!! 今頃来たって遅いんですよ!!!」

『すまない、サイド7のパトロール隊に出くわして対処した為に少し遅れてしまつた』  
「畜生! 俺がちゃんとマシンガンを当てていたらジーんは……」

『よせ、過ぎた事はもう戻らない。』

「しかし……」

『気持ちは分かるが、今はあの白い奴を何とかして倒さねばならない。気持ちを切り替えろ』

『はい……』

『よし、これはジーンの弔い戦だ。ジーンの為にもあのMSを倒すぞ！』

『はい！』

「生きてるよー」

『!!!!!!』

# 第10話 宿命の対決 赤V S 白

「じ、ジーン!! 生きていたのか!!!」

『おかげさまでね……』

『……もしかして、脱出が間に合つたのか?』

「本つ本当にギリギリでしたよ。あと1秒遅れていたらオダブツつて所でしたよ」

そう、ザクIIには脱出装置がある。これは旧ザクに脱出装置を设けなかつた事により試験中に多大な死者が出て「やつぱ、脱出装置つているよな?」って感じで作られた。戦闘機にすら設けられているのに、どうしてザクIにはついてないんだろうね?まあ、ザクIIを设计する時に思い付いてなかつたら、私はここに居ないけどね。感謝、感謝。

「少佐、もしかしたら見ていたかも知れませんが、あの白い奴の強さは侮れませんよ。あのビームサーベルでザクの右腕が無くなりましたから」

『にわかには信じられんな……』

少しは部下を信じろよマザコン野郎。

「私はパラシユートで降下しています。地上に降りたらMSを奪いに行くのであの白い奴の気を引かせて下さい」

「正気か!?あまり無茶をするんじゃないぞ!」

「どうせこのままじゃ、スレンダーの元へも行けませんよ。だったらMSを奪う方が効率がいいですから」

『分かった。何とかこちらで奴を対処する。デニム曹長もジーンを援護してやつてくれ』

「はっ！」

ザクの破片と斬られた右腕が辺りに散らばっている。どうやらジーンの言っていた事は嘘じやないらしい。ふむ、ビームサーベルか。たしかドムの近接武器はヒートサーベルがあつたが、まさか近接武器もビームとは……恐ろしいな。

な、何なんだあの赤いザクは！新型か!?でも他のザクと姿は同じだ……という事はもしかしたら指揮官機なのか？ぼ、僕で太刀打ち出来るのか？……そうだ、僕にはガンダムがあるじゃないか！これがあればあんなザクなんて！

さて、ジーンの脱出が無駄にならない内にあのMSを料理するとしよう。ジーンもい

い線まではいったが、やはり実戦経験がものを言う世界だ。よし、やるか。

ジリジリと距離を詰める。奴もこちらに気づいたようだ。ツ！ いきなり走ってきた！ 中々速い。そしてあのビームサーベルは……なるほど、確かに威力がありそうだ。私の後ろにあつた10メートル程のビルが斜めに斬られている。悔れん。また来た。甘い！ ……何なんだ？ 連邦のパイロットにしては、いやそれ以前に戦い方が素人ではないか。どれ、一つ試してみるか。

シャアザクのお得意芸のキックをお見舞いする。無論、ガンダムは避けられず、もうに攻撃を受けて吹っ飛ばされる。続けざまにマシンガンを当てる。流石にここまですれば動けまい。

「どうだ！ ……バカな、直撃のはずだ！」

何というMSだ！ コックピットに直撃したマシンガンを跳ね返しただと!? 冗談ではない！ こうなればヒートホークで奴の急所を狙うしかない。奴が立ち上がるのを待つてから討つ！ よし、そうだ、そのまま立ち上がって……死ねえ！

ガンダムが立ち上がるのと同時にシャアザクが追い討ちをかける。当然、アムロは対応出来る訳もなく、攻撃を許してしまう。首元から僅か30センチ離れた肩にヒート

ホークを受けてまたもや倒れこむ。ちいつ、ずれたか。

……奴が動かない。やつたのか？いや、油断はするな。そんなヤワな代物ではないのはさつきの攻撃で分かつた。基地守備隊は沈黙しているようだから戦いに集中出来る。あの二人には感謝しないとな。……遅いな。

はあ……はあ……はあ……

い、生きているのか？

あんな攻撃を受けてまだ壊れないのか……

それは助かっているけど……

ただ、赤いだけのザクなのに、どうしてあんなに強いんだ？ザクがあんなキックをするのか？

勝てるのか……？

このままじや……

……勝てる、のか？

.....

.....このままじゃ、負ける。

早く脱出しないと.....

僕は死ぬ.....

ごめんよ、フラウ.....

仇を討てなかつた……

こんな僕を許してくれ…………

アムロは泣く泣くハッチを開けて外に出る。シャアもそれに気づいて降伏勧告をしようとしたが、それが出来なかつた。アムロは軍人ではなく、民間人だからだ。そしてパツと見で歳は15、6に見えたので更に驚いた。こんな少年がジーンのザクを撃破したのか、と。それに気づいたシャアは知らず内に手が震えていた。呆気に取られていたが、やることをしなければならない。無線をスピーカーモードに切り替える。

「貴様、軍属か？」

「ち、違います……」

やはりか……

「ほ、捕虜になるんですか？」

「いや、君は軍人じやないから南極条約は通用されない。このような場合、民間人はその

「国の法律が適用される」

「と、いうと……？」

「君は連邦軍のMSを勝手に乗つて基地内で派手に暴れ回っていた。連邦軍の兵士にも死者が出ているはずだ。ただでは済まないだろう」

「例えば、どんな……？」

「はつきり言おう。君は人を殺した。警察に捕らえられたら死刑は確実だ。しかも君は連邦軍の最重要機密であるMSに無断で乗つた。いや、盗んだのだ。連邦軍に捕まつたとしても死刑は免れないだろう」

「ひ、人殺、し……？」

「そうだ。君は人を殺したんだ」

アムロは酷く混乱していた。自分が人殺し？あの二機のザクと同じ事をしていたのか？僕が？どうして？何で？何で同じになつたのか？

考えれば考える程、頭が締め付けられるような痛みに襲われる。一気に色んな情報と感情がごちゃ混ぜになつて訳が解らなくなつてくる。僕は……僕は、あいつらと僕は、僕は僕だ。僕は人殺しじや無い、でも僕は、僕は僕は僕は……。

「うわあああああ!!!!」

「お、おい！何処行く！」

……行つてしまつた。頭を抱えながらそのまま走り去つてしまつた。MSから走り出したので地面に落つこちたが、態勢も何も気にせず何処かへと消えていつた。ちと、やり過ぎたか？いやしかし、私にどうしろというのだ？流石に民間人を射殺するのはマズイからな。

『少佐！聞こえますか！』

「じ、ジーンか？聞こえるぞ」

『今から私はあのMSを奪います。無事に動かせたら私はビーム兵器を奪つてから撤退します。少佐は援護して下さい』

「あ、ああ。分かった」

いつから居たんだ？守備隊が壊滅したとはい、そこら辺にはまだ連邦兵士だつて居るだろうに……

しかしこの男も悪運が強いな。

# 第11話 ガンダム破壊命令

やつたぜえ!!!!

少佐のおかげであの鬼畜天パが居なくなつたぞ！これでガンダムを奪えば二階級特進、十字勲章でイイ感じい～！つて奴だね！ガンダムを奪つた後はビームライフルの場所を探しだして、とんずらすればいい。やつと、やつと恵まれたぜ……感無量だねえ……

よつこらせ、つとガンダムに乗り込む。おつ、V作戦の極秘資料もあるじやないか！きっとアムロがこれ持つてガンダムを動かしていたんだな。資料に目を通し、資料の通りにハツチを閉めて起き上がる。おお、見事に立つたよ。感慨深いね。

「大丈夫か？」

「はい、動かせます」

「ならない。連邦も黙つちやいないだろうから、早いとこ撤退するぞ」

「了解！」

えーと、ビームライフルはどこにあるんだ？ちらほらと残っている倉庫をしらみ潰しに探す。うーん、これか？……えい。倉庫の屋根を左手で払いのける。ビンゴ、どうや

らこの倉庫はガンダムの武器庫らしい。ビームライフルと、ついでにガンダムシールドも貰つて行く。よつしや！ガンダムフル装備だぜえ！（バルカンは空だけど）

「少佐！ずらかりましよう！」

「分かった、殿は任せろ。デニムは先に行つて退路を確保してくれ

「了解です！」

よつしや、後はスレンダーの元へ行くだけだ！

ジーン（転生）、行きま——

『自爆コードが入力されました。この機体はあと60秒で爆発します。搭乗者は脱出して下さい』

……

「どうした？何か問題でもあつたのか？」

「うわああああああああああああ!!!!」

「どうした!?何があつたんだ！」

アイエエエエエ！ ジバク!? ジバクナンデ!?

「し、少佐あ！ヤバいですよ！この機体あと50秒で自爆します!!」「なんだつて!?!」

「間に合つたか？」

「はい、何とか……」

良かつた。万が一に備えて作つた自爆コードが無事に作動したようだ。私の理想の

M Sであるガンダムを自爆させるのは心苦しいが、ジオンの手に渡るぐらいなら自爆させた方がマシだ。

「他のガンダムは無事か？」

「この基地の状況だと保証は出来ません……」

「そうか……ザクは撤退していくようだ。今のうちに確認しに行こう」

「大尉、あまり無茶をしないで下さい！まだジオンのM Sはコロニーの中に居るんですよ！」

「基地がこんな状況だぞ？ゆつくりしている暇は無い。他のR Xシリーズも出来るだけホワイトベースに積み込め」

「……はつ！」

ガンダム一号機がある倉庫に行く。すると倉庫の屋根が半分ほど剥がれていた。あのジオンの仕業か。曲がつて開かないドアを蹴つ飛ばして中に入る。ビームライフルが一丁失くなっている。ついでにガンダムシールドも一つ持つてかれたようだ。しかし奇跡的に一号機は無事なようだ。

「レイ大尉、テム・レイ大尉！」

「どうした？」

「ガンダム三号機の倉庫はメチャクチャにやられていて動かせそうにありません……」

「そうか……」

一応ホワイトベースからガンダム回収の為に来たパイロットが来る予定だつたが、ジオンが暴れ回つていたせいでガンダムが一つも運び出せていなかつた。幸い、と言つていいのか分からぬが、ギリギリ二号機の武装一色は積み込みが間に合つたので、ガンダムは戦闘が出来る。外で待ち伏せているジオンの船をはね除けるかは保証出来ないが。

通信がきた、他のガンダムは大丈夫だろうか……

「大尉！ご報告が！」

「今度は何だね？」

「その……大尉のご子息が連邦の兵士に保護されていると……」

「なに!? それは本当なのか！」

「ええ、基地の外にある森に居たようだ……」

「…………」

「大尉？ 大丈夫ですか大尉！ もしもし、大尉！」

どうしてそんな所に……

私はホワイトベースに行けと言つたはず……  
何で森の中に……

そういえばガンダムは誰が乗つていたんだ?  
あの動きは素人そのものだつたが……

まさか……

まさか……

あああああああ！もうこうなりややけつぱちでい!!とにかく脱出じや!!!脱出?どう  
やつて?あと30秒しかないよ???とりあえず工事用のハツチまで来たけどスレンダー  
がどんくさいせいで中々外に出れない。

「俺言つたよな?!脱出するから工事用のハツチを両方開けておけって!!!」

「そんな事したらコロニーの空気が抜けて大変な事になりますよ!!」  
 「知つとるわ!!ドアホ!!!!お前は俺と一緒に地獄に落ちたいのかあ!!!!」  
 「ヒエツ」

ちなみに先に行つてたデニム曹長はガンダムのスピードに追い付けなくて抜かしちゃいました。そろそろ追い付くはずだけど。

やつとこさハツチが開く。と、同時にコロニーの空気が抜けてくる。物凄い勢いで出てくるので俺とスレンダーが外へ吹つ飛ばされる。とにかくその勢いで外に出ると早速ガンダムからの脱出を試みる。えーと、これかあ!ガシャンコ

パシュン!

ガンダムのAパートとBパートが離れた。

違う!そつちじやない!!

チラツとタイムリミットを見る。

自爆まで

あと8秒

げえつ!!

あと8！えーとえーとえーと……これがあ！！

チュドー——ン!!

「「「……………」」」

本日二度目の爆発を見る。何か言葉が出ない。

あんな爆発に巻き込まれたら流石に死んだだろう、という諦めと悲しみの感情と  
あいつの事だからもしかしたら生きてんじゃね？という半ば呆れた感情がごちゃ混  
ぜになつて、もう訳が解らなくなつてしているのである。

ちなみにガンダムの核融合炉（タキム重工製）はガンダムのランドセルに2つとコアファイターに2つ、腰部にサブジエネレータ1つの計5つが搭載されている。だからそれが爆発するとなると、それはそれは見事なピンク色の花火になる。玉屋、

そんなもんを見せられたら普通、「あ、これ死んだわ」ってなるのが”普通”なのだ。普通なのだが……

三人は仕方なくジーンを探しに行く。

まさか、強奪した連邦のMSが自爆するとは……私とした事がその可能性を忘れていた。肝心のMSは爆発してしまったが、私のザクは白い奴のビームライフルとシールドを持つている。ジーンが脱出する際に渡した、というか押し付けてきたって感じだったが。一応ジーンの行動は理解できる。一緒に爆発したら折角盗んだ意味が無くなるからだ。焦つてた割には意外とそういう知恵が回った事に少し驚いてる。これを持つて帰れば一階級特進かな？ジーンは二階級特進になりそうだが。

捜索開始から10分が経つた。サイド7から結構離れて来た。連邦軍が追つてこないかを警戒しながら探す。今の所救難信号はキヤツチ出来ない。一応ファルメルを探して貰っているが、向こうの反応も同じだった。

捜索開始から20分が経過した。やはり死んだか。あの爆発じや、やはり生きてる訳  
が――

「少佐！連邦の救難信号が出ています！」

「何っ?! 本当かスレンダ――!」

とにかく信号が出ている場所へ行つてみる。生きてるのか？あんな爆発に巻き込まれてか？そりや、生きていてくれるのはありがたいが、流石にちと怖いぞ？幽霊で出てくる方がマシなんじやないか？

白い光が点滅してるのが見えてきた。そこに奴は居るのか？スーツと近づくと何か聞こえてきた。

「ザツザ……ザツ……」

「ジーンか？ジーンなのか？」

「しザザツ…ザツザツきザツ……」

「ジーン伍長、応答を！」

「聞…え mザツ…かー」

「…」

やがて通信が鮮明に聞こえてくる。

「少佐あゝ遅いですよ～このままだつたら干からびてミイラになる所でしたよ～」

「」「……」「」

この男のしぶとさに三人一致で呆れていた。

## 第12話 ジーン（転生）の療病

ベッドの上からコンニチワ。ジーン（転生）です。

あの後、少佐達に救出されてガンダムのパーツらしき物を回収しながら帰つてまいりました。帰還したら即、軍医から色々な所を診察されてベッドに直送されました。軍医曰く「過度の疲労はあるがそれ以外は健康」と言われました。そんでもって1日点滴つけてベッドに横たわつて療病しています。久々の休みだヤツター

暇やなあ……

な／＼＼＼＼＼んにもする事がない。

今頃少佐はドズル中将にV作戦の報告でもしてるんかなあ？は／＼一度ドズル中将見てみたいわあ／＼メツチャ迫力あるんやろなあ／＼

……

今日は色々ありすぎた。もうどうしようもないぐらいイベントが起こり過ぎた。ジーンの死亡フラグをへし折るのにこんなにも死線を潜り抜ける必要があつたのか。だつて九死に一生を二回も体験したんだぜ？その二回はたつた30分にぎゅぎゅつと詰め込まれてるとした普通どう思うよ？もう俺、どうでも良くなつちやつて半ば放心しながら少佐達の迎えをまつっていたよ。パイロットスーツのエアーは持つて三時間だから、あのまま見つかなければ本当に干からびてミイラになる所だつたからなあ。感謝、感謝。

しかし転生したのが一昨日だとは思えない。静と動が激し過ぎてシートベルトで追骨折しそうな位である。昨日までのんびりと訓練していたのがまるで嘘のようだ。

ザクIIに脱出機能があつて良かつたなあ。あれが無かつたらここに居ないもんな。  
しかしガンダムのAパートとBパートが分離した時は流石に焦つた。確かに通常時ならそれでもいいんだけどね。

結局持ち帰れたのは

V作戦極秘資料

ビームライフル

ガンダムシールド

ガンダムらしき装甲の一部

コアファイターのブラックボックス

だけ。

奇跡的にコアファイターのブラックボックスを回収出来たけど、その中身がコンピューターウィルスでしつちやかめつちやだつたからなあ。躍起になつて解析班の人

が何とかしようとしていたけど、努力虚しく排除出来なかつたうえに過労で泡吹いて倒れたもんな。その彼は今、私のベッドの隣で寝ています。

あの自爆はもしかしたらテムさんお手製のプログラムなんだろうな。搭乗者と学習データを生還させる目的で作られたコアファイターを木つ端微塵に爆発させたもんな

自爆が起動したのはテムさんがプログラムでも送信して送ったのかなあ？　イマイチ  
く解らん。少佐との無線を傍聴していたのかな？　うーん……

作者「クシュン！」

• • • • •

V作戦の極秘資料は流石と言つていい程の代物だつたな。ガンダムの詳しいスペックは勿論、ガンキヤノンやガンタンクのスペックもある。しかもコアプロックシステムの詳細、学習コンピューターの設計やそれに基づく量産型MSの概要まで。解析班達は物凄い雄叫びや発狂を繰り返し、中には鼻血を噴き出して貧血でぶつ倒れた者も居る。ソイツが今、俺のベッドの向かい側であへあへ言いながら寝ている。

……ジオンの技術者は変態しかいないのだろうか。

いや、”ヘンタイ”しか居ない（確信）

だつて極秘資料の設計図を頼りにして無理矢理ザクに持たせて、エネルギー供給をファルメルから持つてきて（作れんのかい！）近くに中破して漂流してたサラミスに試射をしたら（撃てんのかい！）ピンポイントで推進部を狙えて爆発四散して、あまりの凄さに失神してぶつ倒れた奴が居る。

ちなみにだが、この病室には4つのベッドがある。もう分かるな？

.....

それにしても暇やなあ

「さて、この成果で中将殿はお喜びになるかな？」

「大丈夫ですよ。きっと閣下も喜びますよ。」

シャアとドレンがモニターの前で喋る。ソロモンに居るドズル中将にV作戦偵察任務の報告をするためである。

「しかしよかつたんですね？”ホワイトベース”とやらがそろそろサイド7を出港しますけど

「まあ、ドレンの言いたい事は分かる。だが、これだけ成果があれば先に報告するのも悪くないと思ってな」

「その心は？」

「ザクの補給を貰つて大気圏で勝負を仕掛ける」

「正気ですか？あんな所で戦うなんて、いくらなんでも無茶じゃないですか？」

「無茶なのは百も承知だ。大気圏突入となると隙が出来る。だから叩くのだよ」

「はははっ、やはり少佐は少佐でしたな」

「言つてくれる、ドレンには敵わんna」

「待たせたな」

二人は姿勢を正してモニターに映つたドズル中将に敬礼をする。中将も敬礼をして報告に移る。

「データはご覧になられましたか？」

「ああ、全く連邦軍はとんでもないMSを開発してくれたな。しかもMS一個中隊を運用する前提の戦艦を作つてると来たもんだ。シャアに偵察に行かせて正解だつたな。ただ、MSも奪えてたらもつと良かつたんだがな」

「はっ、申し訳ありません。自爆となると流石にこちらも手が出せません……パイロットが生き残つてたのが不幸中の幸いと致しましよう」

「過ぎてしまつた事は責めても仕方ないからな。MSの損失は1機だけでこれだけの成果があれば、少なくとも一階級特進は間違いないだろう」

「そう言つて頂けると有難いです」

「それでこれからはどうするのか？戻つてくるか、それとも——」

「勿論、追いかけます」

「はははっ！ そう言うと思つたわ！」

「偵察は十分にやりましたが、このままではジャブローに逃げられます。補給を受けた後は大気圏突入のタイミングで奇襲をかけます」

「大気圏だと？ かなり無茶をするな」

「百も承知です。運が良ければ撃沈。出来なくとも突入進路は変えられるでしょう」「突入した後は地球に降りるのか？」

「コムサイで北米に降りた後、ガルマ大佐と連携を取つて追いかけます」

「流石、赤い彗星のシャアといった所だな」

「ここまで來たなら、やつてみせます」

「ガルマによろしくと伝えてくれ」

「はっ」

「それで、補給はザク1機だけでいいのか？」

「はっ、後は冷却材や食糧等の物資補給で十分であります」

「分かった、補給はパプアが向かう」

「パプア？あんな老朽艦で物資は足りるのですか？」

「それぐらいなら足りるだろう。すまんな、本当は新品のザクを送つてやりたいのだが  
な」

「仕方ありません、このような現状では補給を受けられるだけで有難いです」

「では補給隊には連絡をしておく。作戦の成功を祈る」

「はっ！」

……何しよう。いや、本当にする事がない。

病室のドアが開く。

「ジーン、大丈夫か？」

デニム曹長が見舞いに来てくれた。良かつた、寝るに疲れなかつたのでいい暇潰しになる。

「この通りですよ」

「元気そうで何よりだな」

「こう見えて一日安静つて軍医に言われましてね」

他愛もない会話が続く

「そうだジーン、伝えておく事があるんだ」

「何でしよう？」

「明日はパプアが補給に来る。その後は木馬を追いかけて大気圏で戦闘するらしい」

あんにやろ、やつぱやるのか大気圏戦闘

「大気圏？また少佐は無茶させますね」

「いくらなんでも大気圏での戦闘は皆反対したけどな。上官命令だ、仕方ない」

前世の世界では無能な上司のせいで苦労する部下はごまんと居る。でも有能な上司のせいで苦労するつて結構レアパターンじやないのか？宇宙世紀の謎である。でもよく考えるとアレは自分の技量を他の人に求めすぎだと思う。だからバンバン部下が死ぬのよ（実際殺してるのは天バだが）

しかし明日補給かー新しい献立とか入らないか：

ん？明日？明日補給なのか？

もしかしてこれ……

補給艦叩かれない？

# 第13話 僕達の補給艦を守れ! [前編]

補給だと? それはまずいな。確かに原作だと、かろうじてザク2機を受け取ったが、その他補給物資は運搬直後にホワイトベースの支援攻撃やらガンタンクの射撃でやられて受け取れてないはず。そうなると永遠にディストピア飯を食う羽目になる。あのコツクの親父さんに睨まれ続けなければならなくなるな……

違う、そうじゃない。

そもそも下手すれば僕達が出撃して殺られる可能性だつてある。明日まで身動きが取れないが、今の所出撃するかしないかは五分五分だ。うーん、ガデムさん死んじやうのかなあ? 今のジオンは兵が居ないからなるべく生き残つて欲しいよな……

……

考え事してたら眠くなつてきいた……

……いい時間だし、そろそろ寝るか。

Z Z Z  
.....

「ジーン伍長おはようございます」

軍医のモーニングコールで目が覚める。

時刻は丁度8時を指していた。

「お、おはようございます」

「早速ですが血圧を計りますね。腕、失礼します」

腕を捲つて一分ほどジツと待つ。122の75でほぼ正常だ。

「元気そうで何よりです。点滴を外したら自室に戻つて大丈夫ですよ」

「ああ、ありがとうございます」

点滴が外されて絆創膏を貼つてもらう。固定ベルトを外して軍服に着替える。何気に初めて軍服を着たが、まあ、何と言うか、意外と普通な感じだ。いや、めっちゃ嬉しいのよ? 憧れのジオン軍服を、モノホンのジオン軍服を着れるのはジオニストとして感無量なのだが、もうね、過労とはいえ病み上がりで着るのはテンションが……ね?

とりあえずビシツと軍服を着て上司に報告をしに行く。どの世界でも報連相は大事よ?

「よお病み上がり、調子はどうだい?」

「おかげさまで」

「よつ、英雄の復活だね」

「ははは、ありがとう」

廊下でのすれ違いの挨拶をする。

「よおフェニックス」

「あ、ああどうも」

「おつ、死神が帰つてきたぞ」

「はあつ!?し、しに……」

「おーい死に損ない、何か奢れよ」

「……」

「こいつら……

仲間に色々と言われながら艦橋に着く。シャア少佐はモニターの前に居た。

「少佐、只今戻りました」

「そうか、元気そうで何よりだ」

「ありがとうございます……ん?」

「何で外にパプアが居るんだ?え?嘘でしょ!?

「しょ、少佐? あれは……?」

「ああ、あのオンボロ戦艦が補給に来たんだ。ジオンも台所事情が悪いようだな」  
会話の直後にモニターに立派な髭を生やした老人(?)が写し出された。こいつはガ  
デムに違いない。

「まさかあの赤い彗星が補給を欲しがるとはな」

「ガデム、敵の戦艦が目の前だ! 一刻を争う!」

「解つて いるよ、わしがそんなにノロマかね? 歳の割には素早いはずだ」

「ハツチ開け! コンベアパイプ、ドッキング急がせ!」

「おお、有名なガデムスルーだ。……違うよ! 急がなきや! ああ! 何でまたこうなる  
のつ!!」

俺は急いで補給搬入口に行く

「お、おい! ジーン何処へ行く!」

「え!? あ、アレですよ、私のMSも補給されるんでしょ? だ、だからいち早く受けとりた  
いんですよ! キズ一つでも付けられたら堪つたもんじやないですかね!!」

「あいつはお前の部下か? 失礼にも程があるぞ」  
「申し訳ない、後で叱つておきます」

時は少し戻つて午前7時40分

ホワイトベース 艦内

コンコン

弱気なノックが聞こえてきた。

「ん……入つていいぞ」

入つて来たのはアムロ・レイだつた。

「と、父さん！」

「おお、アムロか、思つたより元気そうで何よりだ」

「と、父さん。それよりも……」

「ああ、そうだつたな」

アムロは近くの椅子に座り二人は話を始める。

「アムロ、話とはな单刀直入に言うとガンダムのパイロットになつて欲しい」

「え? が、ガンダム……?」

アムロは“ガンダム”という言葉に苦い顔をする。

「気持ちは解るさ、でもな、お前には乗らなきやいけない理由があるんだ。せめて聞いてくれないか?」

「わ、わかった……」

「ありがとう、では……」

「こんな事を息子に言うのは躊躇いがあるが、仕方ない。あのブライトという臨時艦長にはまだ荷が重いからな。」

「アムロ、お前は私の部屋に入つてガンダムのデータを見ていただろ?」

「え? あ、いや、その……」

「今更それを責める気はない。お前はもう年頃だからな、そういう事をしても仕方ない。だが、ガンダムに乗つたのは不味かつた」

「……」

「もしかしたら解つてるかもしれないが、あれは連邦軍の最重要機密だ。関係者以外がガンダムを見ただけでも下手したら軍法会議で銃殺刑が下される可能性だつてある」

「え? ……じゆ、銃殺?」

「しまつた、銃殺という言葉を使うべきではなかつた。しかし……それが本当の事だか

らな……

「落ち着けアムロ、話はこれからだ。このままだとお前の身が危ない。このまま息子が銃殺刑にでもなつたら母さんに何て言つたらいいか解らない。それに、私もアムロを見捨てたくない」

「何で……ガンダムに……？」

「アムロ、このホワイトベースはジオンの攻撃によつて正規クルーの半分以上が失われてしまつた。パオロ艦長は重症を負つて、本来ガンダムに乗るはずだつたMSパイロットも死んでしまつた。その他、整備や看護なども今は避難民に手伝つて貰つてホワイトベースはルナツーに向かつてゐる」

「でも……だつたら僕は、整備を手伝うよ」

「そうしたいのも山々なんだがなアムロ、ガンダムを上手く操縦出来るのはアムロ、お前しか居ないんだ」

「えつ……？」

ホワイトベースにはまだ、正規パイロットが居る。リュウ・ホセイ曹長とジョブ・ジョン曹長だ。どちらも予備パイロットではあるが、一応MSは動かせる。だが……  
「予備ではあるが正規パイロットはまだ居る。それに他の避難民達も一応シミュレー  
ションをやらせてみたんだが、アムロを越えるスコアが出なかつたんだ」

「えつ……?」

「ああ、スコアっていうのはアムロが実際に戦ったデータをスコアにしてそれを評価にしたのだが、そのスコアを皆越えられないんだ」

実際、アムロはザクの右腕を切り落とした後に本体を真っ二つにしたのだが、その右腕を切り落とした時のカウンターを繰り出せないのである。正規パイロットの二人でさえも。あのカウンターのスコアが一番高く、リュウはザクを撃破したのだが、そのカウンターが無かつた故にアムロのスコアを越えられなかつた。

「で、でもそれだけでパイロットになれつて言われても……」

「アムロ。今はお前と私は家族で接しているが、一度戦闘が始まれば軍人と戦闘員の関係になる。お前はまだ正規軍人ではないが、状況がそれを許さない。」

「……」

「頼むアムロ、この通りだ。頼む!」

頭を深々と下げる親父に軽いショックを受ける。何故そこまでしてガンダムに乗せたいのかがアムロには解らない。

「……こんな父親を笑つてもいい。怒つてもいい。何なら殴つても構わない。私はアムロみたいな子供を戦場に送り出さないようにこのガンダムを作りあげた。だが、そのガンダムによもや自分の息子を乗せる羽目になるとは、とんだ皮肉だろう?」

「……」

「……でも、それしか方法が無いんだ」

「……」

しばらく沈黙が部屋を包んだ。

「コンベアパイプ接続終了！弾薬搬入開始！」

「ちよよつと待つたあああああ!!!!」

「?!」

廊下をおもいっきり蹴つ飛ばしてコンベアパイプからパパアに行く。やつた！ギリギリセーフ！よつしや、後はパパアのカタパルトがぶつ壊れる前にザクを射出して敵を追つ払うだけだ！

「お、おい！お前どこへ……」

「それよりも搬入が先だ！急げ！」

「は、はい！」

パプアのカタパルトへ行くと、補給班がノロノロと作業をしていた。この状況を判つてないな……

「おい早くしろ! 敵は目の前だぞ!」

「なんだ貴様!?」

「ジーン伍長だ。ザクを受け取りに来た」

「ザクの搬入はあと5分掛かる」

「ええい! このノロマドモめ!」

「それじや遅すぎる!」

「こつちにだつて順序があるんだよ! たかがMS乗りが調子にのつてるんじやねえーぞ

!!

「敵が直ぐ近くまで来ているんだ! 起動はこつちでやるから早く射出してくれ!」

「ふざけた事を言うんじや——」

ドカーン!

始まつちまつた。これはもしかしたらガンダムのハイパー・バズーカの攻撃だ。

「それみたことか! 射出が出来なくなる前に出してくれ! 急げよ!」

「わかつたよ! やりやあいいんだろ!」

ザクに飛び乗り電源を入れる。大丈夫だ、ちゃんと動く。そしてファルメールに連絡を

入れる。

「少佐、少佐！ 一体どうなつて いるんですか？」

「ジーンか、奴らが攻撃を仕掛けてきた。私はザクで出る。伍長はどうする？」

「私はパプアのザクに乗つてます。出撃なら可能です」

「なら話は早い、一緒に出てくれ。パプアの護衛を頼む」

「了解！」

「デニム、スレンダー出れるか？」

「今から支度します」

「M Sの立ち上げにちと時間が掛かるぞ」

「構わん、貴様達はムサイの護衛を頼む」

「「了解」」

とりあえず外に出たが、ヒドいなこりや。コンベアパイプがフルボツコだぜ……  
さて、問題はガンダムの中身だが……  
アイツじやない事を期待したい

## 第14話 僕達の補給艦を守れ! 「後編」

皆さんこんにちは、ジーン（転生）です。

今回は原作で言う「敵の補給艦を叩け!」の戦闘シーンにあたります。さて、アムロ君には宇宙世紀の歴史から退場して貰つたはずだが……  
ガンダムが見えてきた、問題は中身だ。俺は中身を確認するために無線をオープンにしてガンダムのパイロットに問い合わせる。

「よお! 久しぶりだな黒いMSのパイロット! サイド7 ぶりだな!」

ガグガクブルブル

めつちや動搖してんだけど。ガンダムってあんなガクブルするもんなの? あからざま過ぎて笑つちまいそうだ。

つてちよつと待て! あんな動搖しているつて事はアムロ! もしかしてアムロなの!?ええ! ちよつと冗談きついすよ! アツバズーカカルズガーン

甘いな坊や。バズーカは弾速が遅いのだよ。と、言いたいがザクバズーカより弾速が高い気がする。流石ハイパー。というかもう戦闘始まつてゐるのか。こりや考え事している場合じやないな。

とにかく、ガンダムとコアファイターを引き付けて何とか補給を進ませる。終わりさえすれば、後は撤退すれば良いだけだからな。

とりあえずザクマシンガンで牽制をする。全弾命中だ、まだ勝ち目はある！でもダメージは通らない。悲しいなあ。バズーカを軽くかわしてもう一度牽制をする。確かにバズーカの弾は無くなつたはず。よつしや！今度はヒートホークで滅多切りじゃ！近づくと確かバズーカ本体を投げてくるはず。これをかわして一撃を当てる！

ここでヒートホークが見事に決まつてガンダムは退けぞり、少しダメージが入つた。いや、あれで少しかよ！連邦軍のMSは化物か！ザクなら今頃爆発してゐぞ！何なんだよもう！！

ん？もしかするとサーベル抜こうとしている？させるかあ!!お前が”それ”を抜くとコツチ（全ジオン兵士）の死亡フラグが発生するんだよお!!!必死にブーストを掛けて近づきタックルを仕掛けれる。ガンダムのバルカンよりも先に体当たりが決まる。そして流れるようにヒートホークが炸裂する。俺も大分操作がデキるようになつたなあ。

……やっぱ効いてないよな、コレ。HPを可視化するとしたらガンダムのHPが50

0と仮定したら多分今のHPは486ぐらいじゃないかなあ。連邦ジオンDXのミッショントードを思い出す。

「大丈夫かジーン!」

やつとこ少佐が来たよ。

「大丈夫です。ガンダムは少佐に任せます、私はパプアの護衛に回ります」「了解した、航空機はとにかく追い払うだけでいい。深追いはするな」「了解!」

パプアの護衛に今北産業

コアファイター

バルカン

めつちやつおい(・・の・)

ええ……

パプアめつちや煙吹いてるんですけど。もしかしてガンダムとの戦闘に夢中で疎かになっちゃつたのか。とにもかくにもコアファイターを追つ払う。適当にマシンガンで弾幕を張る。中身リュウさんだろうなあ。ある意味、今の内に殺しといて損はない人物もある。今だつたらホワイトベースクルーのまとめ役が居なくなつて、クルーの成

長を阻害出来るのでアムロの次に宇宙世紀から退場してもらいたい人物ナンバー2だつたりする。まあ、深追いはしないけどね。この後に来るガンタンクや木馬の砲撃で死にたくないし。

コアファイターを追つ払つた後、木馬とガンタンクの砲撃がパプアを包む。やつぱりこの世界でも沈む運命にあるパプア。ガデム大尉が不憫でならない。ちなみにファルメルはとつくに離れていた。そういうえばガンタンクの砲撃つて100キロ先まで届くんだつけ？強すぎひん？下手するとガンダムより強いよね？でもガンダムのビームライフル8キロも大概やけど。

さて、そろそろ補給の手伝いでも……

「ええい、連邦軍のMSは化け物か！」

……少佐も大変やなあ。さて、そろそろ

「ザクもミサイルも食糧もシャアに渡してやる、補給部隊のメンツにかけてな！」

……大尉の死亡フラグ入りましたー

どうしよう。どう立ち回ればいいのかしら。お、ピーンとしたザクを投げ飛ばして。俺はキヤツチしてザクを受け止める。しかしあの人、見た目通りの頑固者だから戦闘に介入したつてなあ。少佐も止めたけど『わしの船がやられたんだぞ！』って言つて

お星さまになつちまつたもんなんあ……

「辞めるガデム! 貴様のザクでは無理だ!」  
「ワシの船がやられたんだぞ!」

そうそうこんな感じ……

／( ^ o ^ )＼

すまないガデム、お前のザクではガンダムに勝てない。気の毒だが。しかしガデム、無駄死にだぞ。いい加減にしろ。

旧ザクの眩い光が宇宙を照らす。こうして、一人の命が星となつて消えて行く。ガンダムアニメ世界初の戦死者はガデム大尉、いやガデム中佐になつてしまつた。何だがトントン拍子で戦闘が進んでいくので手出しが出来なかつた。実際、戦場の絆ではグフで出撃して30秒で殺られた事があるので、自分ではこの戦闘スピードは納得いつてる。殺られる時は殺られるのだ。しかし、納得したところでルウムの戦士は帰つてこない。ガ

ンダム初の戦死者に左手敬礼をする。そこにはもうガンダムは居らず、静かなる時間が宇宙を包んだ。

……死んじやつたか、ガデム大尉。いくら素人のアムロでも、ガンダムの性能には勝てなかつた。MSの性能差が戦力の決定的な差ではないにしろ、局地戦だと決定的だな。だつて素人が乗つてるのに勝てないもん。

「少佐、MSの準備が完了しました。追いかけますか？」

「……散らばつた補給物資の積込を手伝え」

「はっ」

二人とも遅すぎる。いくらMSの立ち上げに時間が掛かるからつて、この時間はないだろ。いやホントに。しかし、それだけ戦闘時間が短かつたという事か。仕方ないけど、なんだかなあ……

散らばった補給物資をザクを使って集める。その光景は連邦にわざと情報を流したモビルワーカーの写真みたいな光景だつた。結局はこのザクというMSはただの口ボットだという事を実感させられた。なんでこんなもので僕達は命を掛けて戦つていいのだろうか?そもそもジオンはコロニーを落とした挙げ句、地球を支配した後はどうするつもりなのだろうか?よくよく考えるとジオンのした事は絶対に許されない事であり、なんでこんな狂言者に皆は踊り狂わされているのだろうか?

……結局のところ解らない。私はジオニストではあるが、それはジオンのMSが好きなだけである。ギレンのアンチクショウは下衆の極みで、あんな奴が国のトップに立てはいけない。それは分かる。……でも実際は連邦と戦つてる。流れに身を任せているが、それは死なない為である。そうではあるが……

……私は一体何を考えているのだろうか。

「ジーン、ジーン! 大丈夫か?」

「あ、ああ大丈夫です……」

「疲れているな?」

「ええ、まあ……」

「……お前はもう休め。病み上がりで出撃したのが堪えたのだろう。あとはデニムとスレンダーに任せておけ」「……了解しました」

疲れたなあ。明日はルナツーか……

## 第15話 ジーン（転生）の迷い

.....

人って簡単に死ぬんだなあ……

ああ、どうも。ジーン（転生）です……

ガデムさん、死んじやつたね。あんまり関わりがないからそこまで感情的にはならないけど、目の前であんな爆発を見せられたら、ねえ？皆さん、目の前で人が死んだら、どんな感情を抱きますか？

……なんかスミマセンね。そんな事聞かれても普通、分かりませんよね？メンドクサイ奴ですみません。でもね、私はこの転生がどれだけハードモードなのかを今、たつた今思い知つたんですよ。

そう、この転生は

## 普通に戦争

している事である。

皆さんお気づきかもしだれないが、これは一年戦争という地球連邦政府とジオン公国という国家間の戦争なのである。実際に私は死線を潜り抜けてきている。連続出撃でヘトヘトになつてゐるし、MSが爆発したときに入る爆風はかなり大きくて、サイド7やガンドムから脱出した時に結構煽られた。（そしてノーマルスース越しでも感じるぐらい熱い）そう、これは一歩間違えば死ぬ。オワタ式の戦争である。いや、普通戦争つてそんなもんだろ

しかし、もしかすると死んだら9月16日の転生の日まで巻き戻しになる可能性もある。そして一年戦争でジオンが勝つまで巻き戻しされる可能性だつてある。まあ、だからといって、わざと死に行きたくはないよね。普通。

…

気分が晴れないなあ。多目的室にでも行つて星でも眺めてくるか……

多目的室には誰も居なかつた。補給物資の受け入れなんかで皆忙しいのかな？とりあえず外が見える席に着く。ルナツー付近の小惑星帯なので岩みたいなのがゴロゴロしている。しかし、星が中々見えないので少しがつかりした。まあ、連邦のパトロール隊が見えてくるよりマシだが。

……

どうしようかなあ……

この後はルナツーを爆発工作して、大気圏で戦うのは想定内だ。しかし、”その後”が問題なのだ。それは地球に降りれるか否かである。むざむざとガルマを見殺しには出来ないが、そもそも阻止出来るのは大気圏突入して地球に降り立たなきやいけない。ファルメルで待機していたら絶対にシャアはガルマを殺しに行く。かといって「地球に

降りたいです！」なんて言つたら下手をすれば……

どないせえつちゅうねん……

「こんな所に居たんですね」

誰かと思えばスレンダーである。

なんか、久しぶりに見た感じがする。たつた1、2日の事であるが、なんか、こう、久しぶりな感じがする（語彙力）

「どうした？」

「少佐から伝言です。『手が空いたらハンガーに来い』と」

「ハンガーか、分かつた。」

ゆつくりしたい所だが、上官がお待ちとなれば直ぐにでも行かなければならぬ。私は水分補給してから多目的室を後にした。

「お呼びでしようか少佐」

「ああ、丁度良いところに来ててくれた」

何か話でもするのかな？ハンガーツて事はMS関連だろうけど……  
「早速だがあれを見て貰いたい」

少佐が指を指した先にあつたのは……ビームライフルとバツクパツク？

「少佐、あれは……？」

「君が持つて帰つたビームライフルを、ザクでも撃てるよう改修した試作機だよ」

「へ？」

ちょっと待て。あの変態共、ついに自らの手で歴史をぶつ壊しやがったぞ！？

「驚くのも無理はないな。今作つてる次世代MSの武装がビームライフルなのだが……  
鹵獲品とはいえ、それよりも先に作つてしまつたからな」

そういうえば戦場の絆のザクIスナイパーもそんな感じだつたな。あれよりかは若干、  
コンパクトに納められている。あれをザクにくつづけて稼働となると、ムサイ級だとギ  
リギリ引っ掛からずに運用出来そうなサイズになりそうだ。

「少佐、あのバツクパツクつてもしかすると、ザクのヤツじや……」

「ああ、そうだ。ガデムがどうせ墜ちるならと、もう一機のザクを渡してくれたから、そ  
こから取つている」

ああ、ここでは原作通りに二機渡すのか。まあ、「全部くれてやる！」って言つてたもんな。しかし、折角のザクを試作機用にバラすとはな……

「ザクをバラしたのですか？そんな事して大丈夫なのですか？」  
「心配はいらないさ、ドズル中将も承認してくれた」

「ちよつ、何してんすか中将殿！」

「……待てよ、この流れは……まさか……」

「……私に使えと？」

「察しがいいな。次の出撃から使つて貰う」

B I N G O ☆

び、貧乏くじは引きたくない。よし、おべつかを使おう。

「しょ、少佐の方が使いこなせそうですが……」

「はつきり言おう、あれは重い」

「重い……？」

「ああ。宇宙ならまだマシだが、地上となると厄介だな」  
そんな厄介なもんを部下に押し付けるのかコイツ。……てか、さつきサラリと”地上  
”つて言わなかつたか？

「少佐？ 地上つて……」

「木馬はこの後にルナツーに寄港して、その後にジャブローへ向けて大気圏突入をする  
だろう。私はそれを追いかける。だから地上戦も今のうちに慣れておかなければなら  
ん」

「はあ……」

「しかし、この試作機をくつづけるとなると今まで通りの力が出せん。火力はいいのだ  
がな、いかんせん重い。しかしな……」

「……しかし？」

「ドズル中将の命令で実地試験をしてデータを送らなくてはならない。だから誰かに運  
用して貰わないと許可を得た意味がなくなる。折角貰ったザクをバラして『やつぱり使  
いません』じや示しがつかん」

「……で、私に？」

「そうだ」

そうだ、じゃねーだろ!!

畜生！何でうちの上官は……

いや、待てよ……

地上に行ける……？

「地上にも行くのですか？」

「そうなるな。地上のデータも取つて報告せねばならん」

うーん……これしか道は無さそうだな。

「……分かりました、他に適任者が居なけ」

「よし！整備班はジーンのザクに試作機を取り付けろ！ちゃんと動作テストはしておけ

！」

「「はっ！」

……人権つてなんだっけ？

# 第16話 ルナツー工作作戦 [前編]

おはようございます、ジーン（転生）です。

只今の時間は0079／9／20／8：30といった所です。

昨日は試作機を着けたザクのシミュレーションをみつかりとやつてきました。あと6時間は寝てたい。ちなみに昨日少佐が言つてた重さだが……ぶっちゃけると「気にする程か?」って感じの変化だが、少佐レベルのクラスになると少しの変化が命取りになるのだろう。機体が重いと加速が鈍くなり、制動距離が延びて長くなる。まあ、重くなると言つてもたかが200か300kgだが、俺みたいな精銳〇レベルだと違いが解る。

しかしあの試作機、取り外し可能かと思つたら俺のザクに溶接してそのまんま試作機として作り上げちまつたなあ……：

ジーン（転生）の唐突にMS解説ぐ！

このコーナーは、唐突にMSの解説を行うタイトルそのまんまのコーナーだ！今日は記念すべき第1回目だ！皆心して掛かれ！

### YMS06-FB

ジーン（転生）専用ビームライフル試験型ザク

全長 17.5m

本体重量 56.5t

出力 1750kw

推力 43800kg

武装

ガンダム用ビームライフル

ザクマシンガン

ザクバズーカ

クラッカー

ヒートホーク

ジーン（転生）の乗っていたMS-06F型ザクにビームライフル試作機をそのまんまくつつけた、やつつけ仕事のザクだ！ビームライフルは連邦軍のガンダム用を作った

ビームライフルを盗んできた物を流用。しかし、そのままでは使用出来ない。何故ならビームライフルを撃つには出力と冷却が必要なのだが、ザクのジエネレータだと容量不足で撃てないからだ。

しかしジオンの変態共は『ジエネレータの容量が足りないなら増やせばいいじゃない』と言うアントワネット的思想で、ガデムの補給隊から余分に受け取ったザクでジエネレータを強化。バックパック部分に取り付けてランドセルと一緒に化した。更に右手のマニピュレーターもビームライフルを持てるよう改修した。

ちなみにだが、ガンダムのマニピュレーターにはビームライフルにエネルギーを供給、冷却をする為のドッキングする箇所があり、そこからエネルギーのやり取りをしている。無論、ザクにはそんなの無いので無理やり作りました。ジオン脅威のメカニズムである。

武装は上記の通りで、腰の右部にはビームライフル専用のマウントがある。そして右手の改造の影響でマシンガン等を持つと不安定になるので、ビームライフル以外の武器は全部、左手で持つことになった。慣れる為に訓練を増やすべきや……

出力はジエネレータを二つ付けてるので約二倍。でも推力はさほど上がっていない。何故かと言えばF型は索敵を回避するために熱量を下げる、姿勢制御用ロケットを必要最低限しか装備していないので、推力の底上げはほぼ出来ない。なので(ビームライフ

ルを使用する為とはいえるが、出力を上げるのはF型の利点を殺すことになる。敵に見つか  
りやすくなるのかあ……。

オマケにショルダーアーマーは試験機カラーラーの朱色に染められているので余計に目  
立つてしまう。お願いだから元に戻してくれえええ……。

### 総評

ビームライフルを運用する為にザクIIを無理やり現地改修したMS。現地改修らしい、やつつけ仕事感満載だが意外な事にスラスターも攻撃モーションの調整もしてあり、現地改修したMSとしては出来が良い。制約はあるにせよ、ビームライフルで火力が段違いにアップしたのが一番の特徴と言えよう。

あれ？たしかシヤアザクはS型だから、F型よりスラスターが底上げされているから  
推力がそこそこ上がつて重さが相殺されるんじゃ……。

( 、 ) あの野郎……押し付けやがったな……

ま、まあルナツー工作作戦がそろそろ始まるし、その時にでもぼちぼち慣らし運転で  
もしますか……

「ええっ!! 私はファルメルに待機ですか??」

「ああ、そうだ」

まさかのまさかである。デニムやスレンダーは出撃するのに私は置いてけぼりであ  
る。いや、死ぬ確率が少なくなるのは大歓迎なんだけどね。

「ルナツーの工作作戦はジーン伍長を抜いて編成するが、万が一の事も考えてMSの  
出撃準備はしてもらう。それまでは休んでいい」

「ああ、そつちの出撃はあるのね。チツ

「はつ。……しかし少佐、何故ルナツーへ?」

「あれだけの装備を持っている基地ならば、並の軍略家ならムサイ一隻ごときが仕掛け  
てくるとはよもやおもうまい」

「だから攻める、と」

「貴様も言うようになつたな」

(質問に答えてねーじやねえかクソツタレ……)

ぶつちやけあの極秘資料だけで多分、一階級特進だからそのままソロモンへ帰つてもいいんだけどなあ……まさか、この時点でのガルマ暗殺を?いやいや、それは深読みが過ぎるな。

「作戦はグリニッジ標準時刻11:00に行う。あと二時間といった所か。作戦時間まではゆっくりしていていいが、食事は早めに済ませておけ」

「了解しました。少佐、ご無事で」

「ああ」

そういうや昨日やつたザクのシミュレーションと今日動かすザクは結構拳動が違うから少し慣らし運転しておくか……あゝ後10時間は寝てたい。

「拘束する訳を! 訳を聞かせて下さい!!」

「士官候補生と民間人がみだりに軍のAAAの機密、すなわちホワイトベースとガンダ

ムを使用した事による。全員軍事裁判に掛けられる事を覚悟しておくんだな」  
ようやくたどり着いたルナツー基地だが、待っていたのはホワイトベースの没収とク  
ルーの拘束であつた。サイド7の襲撃があり仕方のない事とはいえ、ワッケイン少佐の  
出した命令は正しいものであつた。納得するかは別だが。

「ワッケイン司令、いささかやりすぎではありますんか？この際、何も無かつたという事  
にして我々はそのままジャブローに向かわせて貰えないでしようか？」

「それは出来んなレイ大尉、貴方も私の言つている事は解るだろう」

「しかし……」

「貴方はガンダムの開発者であろうにも関わらず、よもや自分の息子を乗せているのは  
何故かね？」

「そ、それは……」

この若造は痛い所を突いてくるな。流石はルナツー基地の司令になつてゐるだけは  
ある。確かに、パオロ艦長の教え子だつた気がするが……

「……よし、民間人の一時収容は済んだ。後は先程言つた隔離者を連れていけ」

「はっ！」

「おい離せ！止める！」

「ブライト君、止めた方が身のためだよ……」

「くつ……」

銃を向けられては、どうしようもないな。素直に従うしかない。しかし、どれぐらい監禁されるんだ？本当に軍事裁判に掛けるまで閉じ込めておくつもりか？

「おい開けろ！」

見事な腕のしなりだが、開けられる訳がない。狭苦しい箱部屋の中に居る我々全員が手伝つても、この扉を開ける事は出来ないだろう。

「無理だよブライト君。とりあえず落ち着こう」

「何故です！？我々は命からがらここまで来たというのに、何故こんな仕打ちを受けなければならぬのですか！」

「言いたい事は分かるが、一度落ち着こう。無駄に暴れても疲れるだけだ」「しかし……」

「ブライト君、何か忘れてないかね？」  
「えつ……」

「もしかして、シャアの事？」

「そうだアムロ、シャアもルナツー付近に居るだろう」

「それは、どういう……」

アムロは何となく分かつたが、怒り心頭だつたブライト君はまだ分からぬようだな。

「考えてもみたまえ、シャアがここで退くと思うか？ 少なくとも私はそう思はない。何かしら仕掛けてくると思われる」

「……まさか、ここを攻めると？」

「可能性の話だがな。しかし未だに追つかけて来るという事は、ホワイトベースを狙つてると考えていいな」

「普通の士官ならしないが、シャアなら……」

「そうだろう？」

「ようやく理解したブライトであつた。

「しかし、追いかけられていた相手に脱出を赌けるとはな」

「そういう事になるなりユウ曹長。全く、連邦じやなくジオンに命乞いするとは滑稽なものだな」

「よし、各員配置に着け。これよりルナツー工作作戦を開始する」

「はっ！」

「第一目標、ホワイトベース！これを奪取し本国に持つて帰れば三階級特進だ！第二目標、敵MS！もし、ホワイトベースの奪取に失敗したら速やかに撤退、そしてルナツー基地の爆発工作をする！虎穴入らずんば、虎子を得ず。皆、心して掛かれ！」

「おおーっ！」

とりあえずブリーフィングに参加したけど、思いの他士気が高いね。敵基地にノーマルスースで行くつて普通死にに行くようなもんだぞ、普通。確か原作だとシャアがノーマルスースで出るつて言つた時にドレンでさえ、驚いていたもんな。やつぱり初期メンバーは士氣が高いのかなあ？それともV作戦の機密情報を盗めたから自信が付いてきたのか？どちらにせよ、士気が高い事に悪いことはない。後は工作隊に任せて、そろそろハンガーの待機室にでも行きますか……

あれから随分時間が経つたが、今は何時になるだろう……？確かルナツー入港は午前

10時過ぎだつたから、今は11時位か？  
と、いきなりドアが開いた。どうやら食事のようだ。

「食事だ」

「守衛さん、今何時だね？」

「今は11時半ぐらいだな」

「ありがとう」

直ぐにドアが閉まる。まだ基地は静かだ。  
……仕掛けて来るなら、そろそろか？

## 第17話 ルナツー工作作戦 「後編」

ルナツー基地に潜入するシャアの工作部隊。本人を含めて11人が爆弾を持ち、工作をする。メンバーはシャアにデニム、スレンダーと……後は忘れた。誰なんだろうね、あの人達。

確かホワイトベースを盗む目標立てていたけど、たかが11人でどうやつて盗みだそ  
うとしてるんだ? 原作だとMSを盗むって言つたにもかかわらず、結局爆破工作だけし  
てガンダムと戦っているからなあ。言うことやることコロコロ変わりすぎだろ。

そろそろ何かしら動きがあつても良さそうだけど……おつ、ルナツーが一時的に光源  
か落ちた。それと同時にあちらこちらで爆発が見えた。さて、そろそろMSのスタンバ  
イでもしておきますかね……あくかつたるいなあ

「監視レーダーを潜られたというのか」

「はつ司令。敵は恐らくノーマルスースによる特殊工作隊と思われます」

監視室から冷静に睨み続けるワッケイン司令。この攻撃はホワイトベースを追つかけてきたシャアの仕業だと確信した。であれば、直ぐそこにムサイがいることになる。迎撃しなくては。乗艦のマゼランで出れば、相手も怖じけづいて攻撃を止めるだろう。

「マゼランを出撃させる」

♪♪シユウ！

(アイキヤツチは脳内再生でお願いします)

「ここを開けるんだ！」

やはり見事な腕のしなりだが扉は開かない。

「僕たちのことなんか忘れられたんじやないですか？」

「しかしこのままでは……」

「ブライト君、電源が落ちたなら電子ロックが外れているかもしだれん。

横にスライドさ

せてみてくれ」

ガチャ

「開きました！」

「さすが父さん！」

「よし、手分けしてクルーを救出しよう」

「はい！」

「マゼラン急速発進。ドッキングロック解除急げ！」

「マゼラン艦が出ていきます」

「行くぞ」

シャアと工作員がルナツーを後にする。

「ジーン、聞こえるか？ ポイントαまで移動してくれ

『了解』

フフフ、こうも簡単に引っ掛かつてくれるとは、連邦も何も学んじやいないな。

「ドレン、私のザクとデニムスレンダーのザクを射出してくれ」

『了解少佐！ 派手にやつて下さい』

「そのつもりさ」

例のイベントが終わり、ランチで脱出したワッケイン少佐はホワイトベースの起動に気付き、直ぐにランチを横付けしてホワイトベースのハンガーに駆け寄った。そこではガンダムの拘束金具の取り外しが行われていた。

「貴様らそこで何をしとるんだ！ ホワイトベースは立ち入り禁止と厳命したはずだ！」  
「シャアと戦えるのは、ガンダムしかないんです！」

「直ぐに退去したまえ！」

あのワッケインという人、こんな状況なのにまだ軍規で締め付けるつもりなのか？

ここでガンダムヘッド付近に居たブライトが降りてくる。何気に黄色いノーマルスースを着てているのはかなりレアだ。（最終話の宇宙服みたいなヤツが印象深いため、覚えている人が少なさそう）

「反逆罪は覚悟の上ですワッケイン司令。貴方の敵はジオン軍なのですか？ それとも私達なんですか？」

「き、貴様……」

クルーが作業を再開する

「今君に、何故軍規が必要かは説明したくはないが、定められた命令は厳守だ！」

「軍規軍規、それがなんだというんですか！軍人が軍規に乗つ取つて死ぬのは勝手です。でも他の民間人がその巻き添えになるのは理不尽ではないでしょうかワッケイン司令！」

「な、なに！」

「ご令嬢にたじろぐワッケインにトドメが刺される

「わ、ワッケイン君」

「ば、パオロ艦長！」

「ど、どうだろうワッケイン君。ホワイトベースの使用、ガンダムガンキヤノン……ガンタンクは今まで機密事項だつた……」

「はい！」

「だからなのだ。こうして、我々より彼らの方が上手く使つてくれるのだ……既に二度の実戦がある彼らに」

「しかし艦長！」

「……そう、しかし彼らは所詮素人だ。司令たる君が、戦いやすいように助けてやつてくれたまえ。わしが責任を持つ……！」

「……はい、解りました。艦長の命令に従います」

ワッケインはパオロの命令に応じた。それはただ単にパオロの方が階級が一つ上がったからか、それとも軍人学校時代の恩師だったからなのだろうか。それは本人しか知り得ない。

「デニムスレンダーいいな、港に潜入。一気にホワイトベースとMSを叩く！ジーンも準備をしておけ」

「了解」「了解！」

「了解です」

さて……新しいザクでの初実戦だ。ギリギリまでシミュレーションしてきたので丈夫なはず。多分。とりあえず前線には出さずに、後方から援護射撃をする形で出撃している。データ収集も兼ねているから下手に前線は出せないよね。

ルナツーに近づいた所でガンダムとシャアザクの戦闘が始まった。一進一退の攻防で、中々に上達してきている。滅茶苦茶マズイな。他の二人もコアファイターに苦戦し

ている。

ガンダムに隙が出来た。シャアザクとのつばぜり合いで後ろががら空きだ。そこにデニムのザクが斬りかかる。

そうそう、この後ガンダムが二刀流に目覚めて後ろから来たザクにグサアアツと刺すのよね～

つてそれマズイじやん！

慌てて照準を合わせてビームライフルを放つた。

急いで合わせたのでガンダムには当たらなかつたが、気を引く事はできた。その隙にデニムのザクはガンダムの後ろから斬りかかる。見事にヒットしたが、盾が真つ二つに割れただけだつた。何やつとんねん。

……何か忘れているような気がする。

なんだつけ？えーと、確か……：

そうだ！マゼランを排除するためにホワイトベースの主砲を撃つてマゼランを壊すんだつた！このままじやバツクファイアでスレンダーのザクが危ない！

つてコアファイターがこつちに来やがつた！ええい！小賢しい！……そうか！その手があつた！

「スレンダー！こつちに来て戦闘機を追つ払つてくれ！」

「分かりました、向かいます」

これで大丈夫なはず……

その数秒後、マゼランのバツクフアイアが来る。スレンダーの元居た場所に爆風が貫く。間一髪であった。ガンダムとの戦闘もここで終わりにしてシャアザクのヒートトマホークで締めくくつた。

……やつぱりこの世界でもホワイトベースやガンダムを奪わずにルナツー基地の工事だけで終わつた。本当に何がしたかったんだよこの少佐。

次の戦闘は、いよいよ大気圏か。嫌やなあ……

確か3日後の23日だつたはず。22日にホワイトベースが出港するけど2日も準備が掛かつたのか。ジャブローと連絡でもしていたのだろうか？それは置いておくにしても明日はオフになりそうだ。もう明日は寝る一択だな。

それでは皆様、よい睡眠を！

## 第18話 ジーン（転生）のオフ

おふあようございまふ。ジーンでふ。

寝みいよ……今何時だと思います？

午前3時だよ!!! 3時!!!

スクランブルだよ！ふざけんな!!!

重いまぶたを擦り、ガンガンする脳ミソを何とか我慢しながらハンガーへと向かう。はい到着しました。え？早すぎるつて？

実は、ルナツー付近は敵の勢力圏内だからMSパイロットはハンガー横の待機室で三交代制で番をしていた所だったのだ（昨日からだけ）。だから直ぐにハンガーへ行けたんだ。しかし丁度熟睡していた所に敵さんが突っ込んで来たからもうね、もう一度言いたい。ふざけんな!!!

サツとザクに乗り込み、MSの起動を待つ間に状況を確認する。

「少佐、敵さんはどんな感じで？」

『サラミスが二隻、恐らくパトロール隊だろう。艦隊戦じゃこちらは不利だ。一刻も早く排除して貰いたい。頼めるな？』

「了解！ジーン出ます！」

三機のザクがファルメルから飛び出す。メンバーはいつもの三人だ。

『デニム、スレンダー、ジーン聞こえるか？有効射撃まで後一分を切つた。それまでになるべく敵戦艦を落として欲しい』

「「了解！」」

「曹長、軍曹、サラミスにビームライフルを撃ちますので射角に入らないようにお願ひします」

「分かった」「了解」

さて、睡眠を妨害された恨み、晴らせてもらうぞ！サラミスまでの距離は約6キロ。宇宙空間なのでビームの減衰もさほど無く、最大射撃距離の8キロまで遺憾なく能力を発揮出来る。にしても目標が小さい。最大望遠でも親指ぐらいのサイズにしか拡大出来ない。しかしこれ以上近づくと対空砲の餌食になるし、時間切れでメガ粒子砲の有効射程内になるのでファルメルが撃ち合いで負ける可能性もある。ここからの射撃に命を掛ける。

撃ち合いで後20秒。どうして何時もいつも時間が無いのかなあ？相手の速度と進行方向を頭に入れ、偏差射撃をする。ステンバーイステンバーイ……ゴッ!!

「メガ粒子砲用意！有効射程まであと30秒！射程内に入つたら打ち落とせ！」  
メガ粒子砲三門がサラミスに照準を合わせる。

「交戦まであと10秒！9、8……」

「か、艦長！サラミス艦二隻が撃沈しました！」

「な、なんだつてえ!? 射撃中止！射撃中止い！」

ドレンは予想外な報告に目をひん剥いだ。外を見ると、確かにサラミスが居た場所に爆発が起こっている。

「い、一体どうなつているんだ!?」

「あれはジーンのビームライフルだな」

「しょ、少佐！」

赤いヤツは腕を組ながら冷静に解説した。

「サラミス艦一隻に対して3発のビームライフルが放たれた。計6発が命中、撃沈に至つた訳だな」

「少佐、まさかあのビームライフル、戦艦並みの火力を……？」

「そういう事になるな。全く、連邦も恐ろしい物を開発したもんだな」

「っしゃあ!!! 見たか! 連邦のバカ共め!!! 人の睡眠を妨害するところいう目に合うつて事を思い知つたかあ!!! ヒヤツハー!!!

『おい貴様! よくもやつてくれたなあ!』

へ? どなたですか?

『俺達の帰る場所を木つ端微塵にしやがつてえ!!!』

『許さんぞ! 宇宙人共お!!!』

あー、あれか。さつき撃ち落としたサラミス艦のMS小隊かな? えーと、何処だ?  
……居た。あれは、ジム改? いや、時期的にジムの初期型だな。確かテリー・サンダー  
S J r. が乗つっていた奴だ。しかし、何でまたMS I G L O Oみたいなヤクザ口調な  
のか? 寢てる間に世界線変わつちやつた? 兎も角、迎撃迎撃。

こつちに来るジム初期型の小隊は多分真ん中のヤツが隊長だな。怒り心頭なのか、随  
分直線的な軌道でこちらに来ている。戦場ではなあ、そういう奴から消えていくんだ  
よお!

バキューン バキューン バキューン

1発目と2発目は何とか避けたものの、運悪く3発目が胴体を貫き爆発してしまつた。

「なつ！」

『た、隊長おお!!!』

よそ見しちやあ、アカンぜ？

『きつ、貴様あ!! よくもくあ wせ d r f』

「ぐ、軍曹お!!」

ほら、よそ見してつから3発とも当たつたじやないか。バカやなあ。

『う、う、うわああああああああああつづ!!!』

おつと特攻かい、どうやら根性はあるようだ。そーら、ビームライフルのお見舞いし

てやる！

バキューン カチツ カチツ

あ、え？ 嘘！ 弾切れだと？ えつと、確か15発だったよな？ えーと……

サラミスに6発使つて

シム初期型に7発

あれ？まだ13発だよなあ？

ああああああつっ  
!!!

昨日撃った1発とその前に解析班が試射した1発を足したら15発ピツタリじゃないか!!!そ、そういうえば解析班が言つてたな……

『ビームライフルの弾数は15発あります。エネルギーCAP式なので弾切れしてもエネルギー充電すればまた使えますが、半ば無理やり充電しているので暴発の可能性を考慮して全部撃ち終わつてからでないと充電が出来ません。そこは頭に入れておいて下さい』

……

ひと昔前のガラゲーかよおおお!!!!

『うわああああああああつっ!!!!』（凸）エエエ  
「あああああああああああ!!!」（□○□）

ヽ（□○□）ノ「LΣ（ノ）凸」ノガシャーン

素直にローキック。こういう時こそ、焦っちゃいけないのよね。ビームサーベルを振りかぶったジム初期型は足元を取られてダイナミックに前転をする。そして四回転目をした所で爆発してしまった。あーあ、不良品掘まされたか。南無南無（一人）

……にしてもアイツら、オープン回線で話していたけど、これじゃあジョンのプロパガンダに使われるだろうなあ。広報部が大喜びで制作しそうだ。

「ジーン、大丈夫か？」

「私は大丈夫ですデニム曹長」

「すまないな、何がなんだか分からずに戦闘が終わってしまって上手く立ち回れなかつた」

「ビームライフルの破壊力は末恐ろしいですね」

「早く寝たい……（ええ、そうですね）」

「……」「

とにかく、三人はファルメルに帰投する。全くスクランブルなんてふざけやがつて、ようやく眠れるよ……あと2時間と45分は仮眠出来るな……ファー

この全滅したパトロール隊は再編成され、その後にMSパイロットとしてテリー・サンダースJr.が編入されるが、それはまた別の話である。

## 第19話 ジーン（転生）の一人会議

おはようございます。昨日はよく眠れました（睡眠時間約二時間）畜生、まだ頭が重い。宇宙には昼夜の概念がないから忘れがちだが、人間やつぱりちゃんと寝なきゃ駄目だな。

時刻は6時32分。俺は食堂で食事を取る。今朝はサンドイッチだ。なんか久々にディストピア飯以外を食つた気がする。シンプルに旨いし、寝ぼけた頭にはこれぐらいの味付けの方が丁度いいな。コツクの親父さん、良い腕をしているな。

食べ終えた所でデニム曹長の分を持って行き準備室へ戻る。三交代制は仮眠八時間、準待機四時間、待機八時間、準待機四時間、仮眠八時間……といった感じで取つてゐる。……もうちょっとシンプルに出来そうな気がするが、気にしない。八時間の仮眠は仮眠と言えないだろうが、気にしない。非効率な気がするが、気にしない。気にしないったら気にしないのである。

「おお、ジーン悪いな」

「いえいえ、これぐらい」

待機室に戻つた俺はデニム曹長に朝食を渡す。それを手に取り食べる。満足げな表

情をしながらこちらに顔を向ける。

「お前、もう少し寝てろ」

「えつ？ よろしいのですか？」

「少佐を除けば今んところウチのエースだからな。まだ潰れてもらつちやあ困るからな」

「……では少し仮眠させて頂きます」

「ああ、ゆっくりしてろ」

「こりや、ラツキーだな。準待機時間は寝る事とノーマルスースを脱ぐ事以外は特に禁止されてないが、逆を言えばその二つは出来ないのである。本当に面倒臭い仕様である。まあ、上官命令としてありがたく寝床に入ろう。

……

……

さて、どうしたもんか。

人間というのはこういう時に限つて寝れない。

そうだな……丁度いいし、これからのですべき事を考えてみようかな。

まず始めに、明日は大気圏での戦闘がある。下手したら死にかねない一大イベントだ。俺がクラウンの代わりにならないように行動しなければいけない。燃え尽きてそのまま火葬されるのなんてまつぱら後免だからね。何とか這いつくばつてもコムサイまで行つて地球に降り立たなければ。

そうして何とか地球に降下したらガルマのガウに着艦するはず。コテンパンにやられて撤退したあとはガルマが態勢を整えてドップで、そしてシャアがザクで出撃するはずだから……。

うーん、それよりもビームライフルがあればホワイトベースも墜ちると思うけど、果たして大気圏でやつつけるべきか、否か。

やつつけられれば少なくともジオンのエース達は生還する事になるだろうけど、あのマザコン野郎シアア・アズナブルの事であるがどう行動するか解んねえからなあ……下手したら原作にはない方法でガルマの暗殺がされたら対応に困るからなあ……

ホワイトベースは生かさず殺さずにしておいた方が無難かなあ……

そんでもつて一番重要なのは、歴史の分岐点であるシアトルでのガルマ暗殺を阻止すべきか。

ぶつちやけ、俺が生き残つてたらガルマは死のうが死はないが関係ない。何だつたらククルス・ドアンの島にわざと漂流して受け入れて貰い、一緒に自給自足の生活をしてもそれはそれでいいのだ。ただ、このままでは原作通りに進むとジオンは必ず不利になるので、所謂ハードモードで生き延びねばならなくなる。だつたら少しでも楽になる選択肢を選ばねばいけないし……

やつぱりガルマ大佐には生き延びて貰わねば……

どうやつて助けようか……

あの口リコン野郎勿論、シアア・アズナブルの事であるの事だから二手三手考えているんだろうなあ……もうあのシスコン野郎やつぱり、シアア・アズナブルの事であるを消した方が早い気もする。でもキシリシアはシアアの素性を知つての上で泳がしている

可能性も考慮しないとホントに消されかねない。ジーン？ そんな奴ジオン軍に居ないな……って感じで。

ふあ～良い感じに眠くなってきた……

折角の仮眠時間だ、寝なきや損だよな。

明日は明日の風が吹く。なんくるないさー

それでは、お休みなさい……

z z z……

地球連邦軍 ルナツー基地

「パトロール部隊は帰つて来なかつたか」

「はい、ムサイと戦闘を行つたようで……」

「シャアか？」

「その可能性が高いです」

「……」

大きなため息をつくワッケイン司令。やつと出来たジム三機をぶつ壊され、擧げ句の果てにサラミスも二隻沈められた。もうため息以外のしようがない。

「パトロール部隊が帰つて来たら、ホワイトベースの護衛に付けてやりたかったのだがな」

「それは残念です」

「……」

「彼らは上手くやつてくれるのでしょうか？」

「……未熟な彼らをジャブローへ送り届けるのにサラミス一隻しか護衛に付けてやれなかつた。我々はもう、彼らが無事ジャブローに着く事を祈るしかない。彼らは必死になつて働いているのに、我々は何もする事が出来ない。寒い時代になつた物だな」  
ホワイトベースとサラミスが地球へ向かう。ワッケインはそれをモニターで観ていた。ただ、それしか出来なかつた。

戦いの火蓋がもうまもなく、切られる。

## 第20話 大気圏突入「出撃編」

やつてきちゃいましたよ大気圏突入。アニメだとまだ第5話なのよね。V作戦偵察からまだ数日しか経っていないけど遠い過去のように思えてくる。しかし、まだまだ先是長い。

にしても無茶苦茶だよなあこの作戦。戦術的には単純な奇襲戦法なのだが、場所がとてつもなく悪条件なのである。高度を間違えたら待つてているのは死。タイムリミットを越えても死。無論、ガンダムの攻撃を食らっても死。ホワイトベースの対空砲にも気を付けなければならない。あまりにもシビア過ぎるな……

まあ、後方からビームライフルを撃つだけの簡単なお仕事だし? 適度に動いてれば文句は言われない……はず。あ、コムサイには行かなきやな。

……そろそろ来るはずだが。おつ、来た来た。

「諸君、集まっているようだな」

シャア少佐がブリッジへと向かって来る。その場に居た全員が敬礼をして、シャアも敬礼で返す。そして、すぐさまと作戦説明に入る。

「新たに二機のザクが間に合つたのは幸いである。二十分後には大気圏に突入する。このタイミングで戦闘を仕掛けたという事実は古今、例が無い。地球の引力に引かれ大気圏に突入すれば、ザクとて一瞬の内に燃え尽きてしまうからだ。しかし、敵が大気圏突入の為に全神経を集中している今だからこそ、ザクで攻撃するチャンスだ。第一目標、木馬。第二目標、敵のM.S. 戦闘時間は二分と無いはずだが、諸君らであればこの作戦を成し遂げられるだろう。期待する！」

再度敬礼をして解散をする。

さて、少佐の適当な作戦説明を、俺がより詳しく説明するとしよう。

今回の作戦は皆さん知つての通り「大気圏突入」の戦闘でホワイトベースを奇襲する。しかし、原作通りなのはここまでで、ガンダムはプロトタイプで我々のザクは少佐含めて六機もいる。少佐と俺が地球に向かうので、その穴埋めとして二機のザクが補給された。今回の作戦は、そのザクも使ってホワイトベースを攻撃する。一見するとこちらが有利に思えてくるが、ホワイトベースはえげつないぐらい堅い。ザクが二機増えた所で墜ちるような代物ではない。それに俺もビームライフルを使ってでもぶつ壊す気はない。何度も言うが、原作通りじゃないと少佐の行動が読めないからガルマ暗殺を阻止出来ないからである。本当に世話のかかる奴だ！ もう！

ところで少佐と俺以外のメンバーは誰だと思う？

コムとジェイキューとクラウン、あとはスレンダーだぜ？ 最初に顔を合わせた時は  
ビックリしたよ……

まさかデニム曹長が予備に回るとは。そもそも例の三人が予備パイロットとして最初からファルメルに居るとは思わなかつた。一度も顔を合わせた事ないし。まあでも、MSの補給は出来てもパイロットだと直ぐには出来ないもんなんア。言われてみれば当たり前なのが……

「ブリッジから各員へ。出撃十五分前、パイロットはMSに待機し、整備班は各MSとコムサイの最終メンテナンスを行う事。繰り返す……」  
さて、そろそろスタンバつておくか……

ハンガーに着くとデニム曹長が待つていた。

「ジーン、待つていたぞ」

「曹長、わざわざありがとうございます」

「これから暫く会えなくなるんだからな」

「次合う時は本国ですかね？」

「そうだといいな」

他愛もない会話だが、これで暫くのお別れとなると少し寂しく感じるな……MSに乗

り込もうとすると曹長が何かを手にする。

「おうジーン、これもってけ」

ピンつと飛ばされたカードをキヤッチする。これは……購買部で使える特別配給カードか。基本的に購買部で売ってる品物は無料で貰える。だが、流石に買える商品の限度というものがある。これを使うと特別な嗜好品を貰えるので自分で使えたリするが、だいたいの人は自分の部下のお祝いにあげたりする事が多い。要するにギフトカタログみたいなもんだな。ちなみにどんなにものが貰えるのかというと……

高級な酒のボトル1ダース

オーダーメイドの服

国内産高級腕時計

ラジコンやプラモ

通常の検閲では引っ掛かるエッチな本

等が貰えたりする。まあこれはほんの一部だが。

さてさて、額面を見てみよう。えーと、一、十、百、千、万、十万……

ひや、百万  
!!?!!??!

いや、絶対におかしい。百万なんて普通あり得ない。上記にある嗜好品は大体一万クラスで、曹長クラスなら精々その一万が関の山だ。ええ、何して貰ったのぉ???

「驚いたか？ 実はこれは少佐から貰つたもんだ」

「しょ、少佐からですか！」

余りにも思い切りが良すぎないか？ 普通人から貰つた物を他の人にあげるのはマナーとしてあまりよろしくは無い。でもそれをプレゼントするって事は、それほどまで俺の事を信頼してくれてるって事なのかな……

「ほ、本当にいいんでしようか？」

「男に二言はない。好きに使え」

「あ、ありがとうございます！」

……百万あつたら最高級スポーツカー やサイド3に別荘が建てられるぐらいの事なら出来る代物だ。多分二等兵とかがこれを見たら卒倒すると思う。

「ジーン伍長、そろそろMSに乗つて下さい」

整備兵が声を掛ける。

「それじゃ頑張ってくれよ、未来のエース」

「曹長も死なないで下さいね」

ハツチが閉まりシートベルトを締める。MSの起動を手際よく確認する。ある程度

操作を終えた所で先程貰ったカードを見てみる。いや～初めて見たな。百万のカー  
ドって赤いんだな。しかも文字と縁が金色だ。裏面はどうなつて……

ルウム戦役での功績を称え

このカードを寄贈する

……これ、使つたらマズイやつやん。

## 第21話 大気圏突入「戦闘編」

「ホワイトベース各員へ。本艦は八分後に大気圏に突入します。立っている人は座つて下さい。船が揺れるような事があつても騒がないように。各戦闘員メカニックマンは各自の部署で待機のこと。ガンダムも発進する可能性もある、メカニックマンはそのつもりで」

「敵だ！」

手際よくガンダムを起動させる。内心、シャアが来る事は何となく分かつていた。が、どれぐらいの戦力で来るのか、そして何分戦えるのかまでは判らなかつた。そして正面のハッチが開き、オペレーターのセイラが声を掛ける。

「アムロ、発進後四分でホワイトベースに戻つて。必ずよ」

「了解。セイラさん、僕だつて丸焼けにはなりたくありませんから」

「後方R3度、ザクは六機よ」

「六機も!?」この前まで四機で来ていたのに、いつ補給を受けたんだ?

「シャアは手持ちのザクは四機のはずじゃ……そうじやないセイラさん?」

「事実は事実よ」

「ホワイトベースの援護は?」

「後方のミサイルと機関砲で、リュウとカイが援護するけど……高度には気をつけて」「戦つてゐる最中に気をつけられると思うんですか」

「貴方なら出来るわ」

「おだてないで下さい」

全く、セイラさんは口が上手くて敵わないや。

さーて始まりました。攻撃を受けたら地獄、地球に落ちても地獄の大気圏チキチキレース。実況は私、ジーン（転生）がお送りします。

「敵もMSを発進させたようだ。ドレン、援護しろ。我々は二手に別れて攻撃する。ジーンは後方で良い感じに援護を頼むぞ」

「ええ! 良い感じってどんな感じですか?」

「自分で考えろ、いいな?」

「……分かりましたよお」

いきなりこれである。前線に出てガンダムと対峙するよりかは幾分マシだが……

何となくガンダムが遠くに見える。後方からのファルメルのミサイルに当たらないよう避けながらホワイトベースへと近づく。アムロは多分、シャアに集中しているのでここがチャンスか……緊張するぜ。

ザクの移動を止めて慣性でホワイトベースに近づきながらガンダムに狙いを定める。シャアの放ったバズーカがガンダムシールドを貫通してよろけたらぶちこむ。

ステンバーイステンバーイ…………ゴツ!!

ちいっ！外した！やはり慣性とはいえ移動しながらだと狙いが狂うな。そろそろホワイトベースに攻撃を仕掛けないとな……墜ちない程度に。おおつとここでコムがバズーカで右腕をやられたぞ。原作通りなのは嬉しいようで嬉しくないぞ。さて、そろそろビッククリドッキリ武器が登場するはず。

「し、しまったー！バズーカのスペア弾が……」

撃ち過ぎた。余りにも当たらないのでむきになつてしまつた結果がこれだ。

「セイラさん！ビームライフルをくれませんか！」

「無理よ、ライフルを発射することは出来ないわ。メカニックマンに聞いてみるけど

……」

「セイラさん、ライフルはまだ修理中だよ」「と、父さん!?」

「アムロ、出撃中はせめて大尉と呼べと言つたはずだが」  
戦つてゐる最中にそんな事考えて言える訳ないだろ!

「そんなことより他に武器はないの……ですか?」

「今出せるのはガンダムハンマーだけだな」

「それでいいから早く出して下さい!」

「分かった、60秒後には射出する」

「前よアムロ!」

さあ、見事にジエイキューがガンダムバルカンで蜂の巣にされて爆発してしまいました。こちらのザクは残り五機、そのうち一機は小破しています。とりあえずホワイトベースに攻撃は出来てゐるけど、全くダメージを受けてゐる様子はない。お前らちやんと仕事しろ!!!

(→人の事いえねえだろ)

「クラウン何をやつてる！敵の銃撃の来る所は判つたはずだ、接近して叩け。それではザクの性能は発揮できん！」

「はつ、しかし銃撃が激しくて……」

「これで激しいものか！よく相手を見て下から攻めてみろ」

やーい、言われてやんの

「ジーン！お前もライフルが当たらないならもつと接近しろ！」

ええ……後方援護なんだからこつからでいいじやん  
つてかお前が適当に指示を出すからだろ!!

仕方ないのでホワイトベースに近づく。対空砲なんて、こつちから当たりにいかないと当たらないので動いてさえいればそこまで気にしなくていい。けどやつぱり弾幕が張られている中に行くのは怖いよね。さて、そろそろホワイトベースの下らへんに来た。仕方ないから右エンジン周辺を軽く当てますか。

バキューーン

よし、とりあえず当てれた。あれぐらいなら大気圏突入には問題ないだろう。お、白と赤い奴は良い感じですね。ここにコムがやつてきて……

はい消えたら。（バン！）

おっとここでタイムオーバーだ。さて、ここいらでお暇するか……

「ジーン、ドレンのカプセルに戻れ。クラウンはファルメルに戻るんだ。おいクラウン！クラウン聞こえないのか！」

あーこれはいけませんねえ。クラウンはここでも宇宙世紀式即席火葬の犠牲者になつてしまふのか……

俺も燃え尽きない内にカプセルに戻ろう。そういうえばドレンの横に居るアホ面したやつの名前つてなんだろうな？あいつ氣絶でもしてるんじや……

あれ？何で画面が真っ赤っかな？

答えは簡単。大気圏突入の真っ最中なのだ☆

いやああああああああああああああああ

!!!!

## 第22話 大気圏突入「突入編」

ええ!! いつの間に大気圏突入していたのおお!! ホワイトベースの下に潜りすぎだのか?!? いや、慌てるな。ここで状況を確認しよう。モニターをチラッ よし、まだアムロとクラウンは戦つてゐるな。今ならコムサイに急行すれば間に合う……はず。

とにもかくにも全速前進、バーニアをフルスロットルで飛ばす。コムサイまで……あと2km? どんだけ流されてんねん。いやあ、どつかの誰かさんが「前に出ろ」なんて言わなけりやあ、今頃合流出来てるはずなんだけどねえ……戦場の絆でもスナイパーイープを前線に送り出して勝つた試しがない。バトオペ2では芋スナイパーは嫌われる。何ならたつた一分半芋スナしただけで味方に殴られたらし。でも後ろに居たつていいじやん、格闘3枚いるのに突撃つて地獄だよ……

……あれ? コムサイまでの距離が600mを切らない。もしかしてだけどこれ、引力に引かれてる?

ああああああああやつべえ!!!!

よく見たらアムロ達も何か戦闘どころじゃなくなつて いるし！ こうなりや、（何度も  
か判らない）一か八かの特攻じゃあ！！

身体がリミッター解除のコマンドを憶えてくれていた。アラートが鳴るのと同時に  
機体がぐぐぐーんと加速する。じわじわと距離が縮まつていくが間に合うかどうかわ  
から……：

あー

意識があー

段々……

遠……退いて……

る場合じゃない!! ガバッ

……あれ? そういえばコムサイってどんな感じにMSの収容をするんだつけ? 確か  
シヤアは背中合わせから入つていったよな? という事は……

①間に合うようにコムサイへ突っ込む

②180度ターンをする

③ぶつからないようにバーニアを吹かせ、入庫

……仕方ない、一発で車庫入れを決めねばならないようだ。皆さんはテレビなんかで  
よく見る、カースタントマンが車の幅ギリギリの駐車スペースにドリフトしながら駐車  
するパフォーマンスをイメージしてもらいたい。え? 失敗したら? ……死なば諸共よ。

段々と目に見えて近づいてくる。チラチラと距離表示を見ながら己の勘でターンを  
決める。

300……250……

200.....160.....120

ここじゃあ!!!

ブーストを一瞬止め、180度ター「ミ。ツ」ンをし終わり、二つブーストをかます。

間に合つ.....

.....

た.....

一瞬、意識が三途の川を渡りそうになつた。

減速出来ない！落下速度がこんなに速いなんて……

くそつ、あんなザク、ビームライフルがあれば一撃なのに……どうしよう、このまま  
じやガンダムが燃え尽きちゃう！

「アムロ……ザツ聴こえるか！アムロ！」

「どつ、父さん！」

「一度しかザツ言わんぞ、ザツザツダムは大気圏ザツ突入能力ザツ持つていザツ」  
「ホントに!?」

「まずザツザーツ姿勢制御、冷却シフザーツ全回路ザツ接続をザツろ」

「姿勢制御、えーと、冷却シフト、あとは……これが、全回路への接続……よし！機体の  
温度が下がつく！」

「上ザツ来ザツザツロザツ後ザーツ耐ザツつ f ザ—————」

「父さん！耐熱がなんだつて!? ねえ父さん!!」

「ザ—————」

終わつた……命綱の通信が途絶えてしまつた。多分、耐熱用の何かがガンダムに備

わっているはずだが、肝心な部分が聴こえなかつた。どうしよう……適当にボタンを押すわけにもいかないし……こうしている間にも徐々に機体の温度が上がつてゐる。落ち着けアムロ！落ち着くんだ！何か、何か方法はあるはず……！

「ジーン！俺達を殺す氣か!!」

ドレンに怒られる。だつてしゃーないもん。

「あと十秒遅かつたらコムサイに激突していただぞ！もつと余裕をもつて行動してくれ。これでは命がいくつ有つてもたらん」

元々はテメエのせいだろアズナブル!!!

とにもかくにも何とか間に合いました。……ホントに命がいくつ有つても足りない。あと残機10個ぐらい下さい。あ、そういえばあいつらは……

「ドレン、クラウンは？」

「駄目です、もう間に合いません」

あー、結局死ぬのか……

「シャア少ザツ！助けてザツさい！シャーノア!!」

いつ聴いても虚しいなあ。悲しいけどこれ、運命なのよね。さて、シャアは原作通りに話掛けるのかな？

「……ドレン、通信を切れ」

「はっ」

……酷い。ヒドいなあ。まあ、ガンダムには大気圏突入能力があるから励ましなんて出来ないもんなあ。致し方なし。燃えながら崩れ行くザクに対して敬礼をする。もちろん左手で。さて、ガンダムは……

「ガンダムの反応はどうだ？」

「まだ消えてません」

「やはりこのまま大気圏突入する気か……」

「少佐、そろそろ突入しますので席に」

「分かった、後は天に運を任せよう」

「おー、地球に行k

ぐひやつ!!!!

ぐ、グラビティが……

もとい、重力が結構キツイ！今まで無重力空間で生きていた身にはかなりキツイ……でもこれまで体を鍛えてきたから何とか堪えられる。

ありがとう、自分。

蒼い、青いこの地球

ファルメルからも見たがやはり美しい、しかし  
この地球に我々サイド3はコロニーを落とした  
母親に構つて貰えない腹いせに

身近にあつた玩具を投げつける子供のように……

そんな地球が次のリングだあ～～～～～

それでは行きましょう、

次の舞台へ！

ガ  
ン  
ダ  
ム  
フ  
ア  
イ  
ト  
オ  
レ  
デ  
イ  
ヽ  
ヽ  
G  
O  
!!!!

## 第23話 一時の休息

大気圏に突入り、ガルマ大佐との通信も終えてガウ攻撃空母にやつてまいりました。どうも皆さん、ジーン（転生）です。何とか地球に来れました。いやあ、ジーン自体は地球に行つた事がないのですが、前世の記憶で埃っぽい空氣や地球の重力に、なんとか懐かしさを感じます。

あ、すっかり言い忘れていたけどガンダムはホワイトベースを盾にして大気圏突入を成功させました。畜生！あいつ、オリジナルートを自力で切り開きやがった！！……こりや不味いな。シアトルで決着をつけなきや、このままの勢いだとジオン滅亡待つた無しだな。

現状説明をするとホワイトベースは原作通りキヤルフォルニアの予定進路よりましてグレートキヤニオンに突っ込んだ。ジオンはガウ一個中隊を率いてホワイトベース撃破に向かってる。そして俺と少佐はガルマ大佐の元へ歩いています。さて、シャアはともかく俺も行けるのか？

……と思ってたら普通に通され、杞憂に過ぎた。

「いようシャア、君らしくもないな。連邦軍の艦一隻に手こずつて」 クルクル

「言うなよガルマ。いや、地球方面軍司令官ガルマ・ザビ大佐とお呼びすべきかな?」「士官学校時代と同じガルマでいい」

……美男子どうしの会話というものは優雅な物だな。俺の友達との会話は「土曜日俺ん家でパワープ〇しよーぜ」みたいな品のかけらも無い物だったからな。なんか雰囲気に飲まれそうだ。

「シャア、横にいるのは君の部下かい?」クルクル

「ああ、巡洋艦二隻と新型MS三機を撃破した大エースさ」

「ジーン伍長であります」

「伍長……? ああ、君だつたのか。活躍は聞いてるよ、これからもジオンの為に頑張つてくれたまえ」クルクル

「ありがとうございます」

「君の武勇伝でも聴きたい所だが、まずは目の前の敵を倒す事が先決だな」クルクル

「そ、そうした方がいいですね」

「武勇伝つていつてもなあ……」

「それじゃあ、ガルマのお言葉に甘えよう。ジーンもゆつくりしてろ」  
「い」クルクル

「それじゃあ、ガルマのお言葉に甘えよう。ジーンもゆつくりしてろ」

「はっ」

にしても髪の毛弄りすぎだろ。

さてさて、俺が必死で盗つてきたV作戦の極秘資料のおかげで内部データは分かつて  
いるはずだ。にも関わらず、戦力は原作同様のガウ一個中隊で来やがつた。余程の自信  
があるようだ。多分、地上にも部隊を配備しているはず。しかし、あえて言うとすれば

「ガル：

「ガルマは相手を見くびつてる。とでも言いたげだなジーン」

赤いヤツが割り込んできやがつた。

「まあ、言いたい事は解る。皆まで言う必要はない。我々はここでお手並み拝見といこ  
うじやないか」

「そ、そうですね」

ガウも徐々に降下してきて地上での戦いになってきた。今頃リード中尉は「引け！後退だ！いや、転進しろ！」って感じで慌てふためいているんだろうなあ。

しばらくの沈黙の後、ドレンが口を出す。

「中々苦戦していますな」

「ガルマが苦戦して当然さ。我々が二度ならず機密取りに失敗した理由を彼が証明してくれる。しかも我々以上の戦力でな。これで私の力不足ではないと他の将校達も納得してくれるだろう」

「なるほど……」

ぶつちやけ機密取りには成功してはいる。しかし、この少佐は次の目標をガンダム奪取(ついでにホワイトベースも)にして地上に降りてきた。だが、赤い彗星の異名を持つシヤアが手こずつているとなると、やはり悪評が出始めてくる。風の噂によると、一部の将校は「ルウムで一発当たった天狗」と下馬評を下している。あながち間違いではない

「ドレン、そういうえばガルマはMSで出たのか？」

「いいえ」

「そうか……」

(彼がガンダムと戦つて死ぬもよし、危うい所を私が救つてもよしと思つてたが……)

「そういえば少佐、聞きたい事があるのですが」

「なんだ?」

「これですよ」

件の真っ赤なカードを差し出す。

「どういうつもりなんですか?」

「ほお……」

顎に手を置くな。

「どういうつもりと言われても……私はデニムにあげたからな。デニムに聞いてくれ

「いやいやいやいや!!こんなもん貰つたつて困りますよ!!お返しますよ!!」

「返すならデニムに返してくれ、私に返されても困る」

「いやしかし!」

「クドいぞジーン。先輩から貰つた恩を易々と捨てるのは、私は好かんぞ」  
くつ……このままじや千日手だな。もつと言いたい事があるがここは止めておこう。

にしてもコイツ、確信犯か？全く人をおちよくるのもいい加減にしてほしい。

ガンタンクやホワイトベースが受けている。あ、ガンタンクが後退した。そして戦況は……原作通りだな、こりや。ホワイトベースにあまりダメージを与えられてない。地上のザクとマゼラアタックはそれぞれ一個中隊で来ている。

……え？ もしかしてドップと合わせると一個大隊でホワイトベースを攻撃してやられたの？？それ指揮官として不味くない？？本当に戦力分析したのかよ！？

「どうだジーン、ガルマは勝てそうか？」

シャアは後ろで手を組ながら質問してきた。

「うーん、戦力的にはこっちが圧倒しているんですけどね。何故か知らないんですけど負けそうな気がします」

「具体的には？」

「大気圏で戦つた時に私のビームライフルが当たったはずなのですが、そのダメージをてんで受けてない気がします。なのでドップやマゼラアタック程度の攻撃じや落とせないと思うんですよ」

「なるほど、確かにそんな気もしてきたな」

お互に窓の外を見る。ガンダムがやけっぱちになつてビームサーベルを振り回してるのが見えた。ああ、こりや負け確だな。と、ここでドレンが近づく。

「少佐、ガルマ大佐が退くようです」

「ジーンの言つた通りだな」

戦力の半分程を失つての撤退か……

やはりちゃんと戦力分析してないようだ。外交は出来るとはいえ所詮、坊っちゃんは坊っちゃんつて訳だな。

「ジーン、大佐を出迎えに行くぞ」

「はい少佐」

## 第24話 コアファイター撃墜せよ！

「やあおはよう、二人とも」

「おはようござります」

「ザビ家の坊っちゃんに呼び出された24日の朝です。皆さまおはようございます。

「早速だが昇格の話をしよう。ドズル中将に代わり、私が読み上げる」

「おお、ついに来たか昇格の話が！ MSパイロットは最低でも伍長になれるけど、逆に言うと伍長が最底辺なのだ。お給料も増えるし、年金の額も上がるから上がつておいて損はないわな。」

「まずはシャア・アズナブル少佐から。貴殿は特別部隊を率いて、連邦軍最重要機密であるV作戦資料の奪取に成功した功績を称え、一階級特進とし中佐に昇格とする」

「ありがとうございます」

「ビシッと敬礼を決めるなあ、この後殺すのに。」

「次にジーン伍長」

「は、はい！」

「……あれ？ そういえばジーンって名前なのか？ それとも名字なのか？ 死にゆくはず

のモブキヤラだから、分からぬのも仕方ないけど。

「ジーン伍長、貴殿は連邦軍最重要機密であるV作戦資料を奪取に成功し、更に作戦途中で連邦艦二隻、M S三機を撃破した功績を称え二階級特進とし、曹長に昇格とする」

……え？ 二階級もいいんすか？

「おめでとうジーン伍長、いやジーン曹長」

「ちらを見ながら軽く拍手をするシャア少佐、いやシャア中佐。

「君ならもつと上を目指せるはずだ。これからも精進してくれたまえ」

ガルマ大佐が握手を求めて來たので、それに答えた。

「ああそうだ、これは私からの昇進祝いだ。受け取つてくれ、改めて昇進おめでとう」

ピットと渡したのは十万の特殊購買カードだつた。流石坊っちゃん、気前がいい。

ちなみに十万だとオーダーメイドの軍服が作れるらしい。成る程、ジオン軍人の改造軍服の多さはこれが原因か？

しかし、あの赤い奴からデニム曹長経由で贈られたあの”赤いカード”的衝撃が凄まじく、いまいち感動に欠けてしまう。いや、十万のカードなんて下級兵士には縁のないカードだから貰つて嬉しいのよ？それはお分かりになつて？でも、あの、ねえ？分かるでしょ？俺の言いたい事？

……あれ？ そういえばドレンさんが居ない気がする。

「少佐、いや中佐。ドレン少尉はどこに？」

「ああ、ドレンならドズル中将に近況報告しているからそちらを優先させた」  
「はーん、中間管理職も大変ねえ。こんな朝から近況報告なんて。普通、上官のシャア  
がやる仕事じゃないの？……いや、やらせてるのか、これ？」

それに対して話し合いがあるから昇格の話はガルマに任せているのか、それとも花を持たせてる？ やはり、多分その両方かもな。ドズルさん、結構ガルマにゾツコンだし。

ガルマが咳払いをして話を戻す。

「最後に、ここには居ないがV作戦偵察部隊に参加した隊員達は一律に一階級特進だ。  
以上を持つて私の話は終わりとする。あとは好きに時間を過ごしたまえ」

「はっ！」

敬礼をしてその後、地球での優雅な朝食を頂こうとしたが、その夢はホワイトベースによつて打ち碎かれた。

「ガルマ大佐！ ホワイトベースに動きがありました！」

「なにい！それは本当か！」

「はい、今すぐ指令室へ」

「おっ、アムロが気絶するアレか？ということは……」

「よし、我々も行くぞ」

「やつぱりですか？」

「当たり前だろう、我々の仕事はホワイトベースとガンダムの撃破だ。行かないという選択肢は無いぞ？」

「デスヨネー」

まさか……自由落下中の戦闘を強いられるのか？

全く、これだからギレンの野望攻略本のオマケページで「上司にしたくない人物ランキング」で二位に選ばれるんだよ。ホント、ジーンに転生した事が運の尽きだよ。

セカセカとコムサイへ向かう。なんなら走つて向かつて。嫌だなあ、俺高いところ苦手なんだよ。あと飛行機というのも苦手で何度もブラットアウトしそうになるから、嫌なんだよ。と、愚痴を言つてもガンダムとの戦闘は避けられない。もう転属願書こ

うかしら。でも少佐……じゃなかつた、中佐がいる限りアフリカ戦線送りよりかはマシだからなあ、扱いも悪くないし。でも、ガルマ暗殺を阻止出来なかつたら、多分冷遇されるんだろうなあ……

「おい、ジーン。シートベルト閉めないとぶつ飛ばされるぞ」

赤い人から忠告を受けた。気がつくともう既にコムサイの室内にいた。あつれえ？ もうテイクオフですか？ いやあ、まだ心の準備g  
「コムサイ発進します！」

キ————ン！

「ちよつ、まつつくあwせd r f t g yふじこ1 p……

その後、戦闘直前まで起きませんでした。合掌。

「おい起きんかジーン！」 ゲシツ

「ふえっ!?」

蹴つ飛ばされた。シャアの履いてるあの靴、結構尖ってるのよね。素直に言うと痛てえよ！……頭ガンガンするけど、出なきや。

「システムチエック、オールグリーン……」

頭痛い……ボーッとする……

こんな状態で戦えるのか？俺？

「私が先に出る、ジーンは後に続け」

コムサイの下部ハツチが開く。と、同時に赤いザクが落つこちる。うわあ、リアルな落ち方やなあ……

次は俺か……アツ、ヤバいクラクラしてき……

ガパツ ヒュー……

地獄のテイクオフ☆

「うわあああああああ氣持ち悪いいいいい!!!!」

足裏ゾワゾワして集中出来んわ!!!

クソツタレ!死にたくねえから戦うけど!!!!

ちなみに気絶している間にコムサイ被弾して、コアファイターはガンダムに換装しました。時間にすると5~6分かな?一応、原作通り被弾しただけで済んだけど、もしエンジン直撃でやられてヒュードカン!ってなつてたらそのまま御陀仏になつていたのか……考えただけでゾツとする。

さあ、見えてきましたガンダムちゃん。

戦闘時間は……一分か?

とにかく今回も死なないように……

赤いザクと黒いガンダム（と魔改造ザク）の空中戦闘が繰り広げられる。基本的にシャアとアムロの一騎討ちであるが、たまに俺が横やりをいれる。でも空中戦闘なんてシミュレーションしてないし、あと30秒で地面にビターン！！だし、もう何発もビームライフルを撃つてのに当たらないので、もうそろそろ着地準備をします。

「地球での自由落下というものは、言葉で言う程自由ではないのだな」

はいはいその通りですね。

特に進展も無いまま地上に降り立つた。まあ、この回のキモはガンダムの新機能に焦るシャアだから、戦闘はサクッと終わるのよね。機密情報盗んだからそのイベントすらないけど。

この後どうするんだろ？ととりあえず聞いてみるか。

「中佐、この後はどうしますか？」

空を駆けるホワイトベースを見る中佐

「この戦力じゃ追撃は無理だな、基地に戻ろう」

「はっ」

流石に追撃はしないか。たった二機のザクでホワイトベース＆ガンダムに立ち向かうなんて、たかが知れてるしな。賢明な判断に感謝して基地に戻つたら素敵な朝食を食べて寝よう。もうあんなバンジージャンプは懲り懲りだよ……

## 第25話 ジーン（転生）の一人会議 「ガルマ編」

「えっ！休暇ですか!?」

思わず聞き返してしまった。だつてガンダム追っかけてる最中に休暇が貰えるとは思わなんだもん。

「ああ、シャアと君のMSをオーバーホールするついでに休暇もと思ったのだが、いかがだろうか？」

「とつ、取らせて頂きます！」

ヤツホオ！特別休暇の四文字はいつ聞いても心が踊るぜ！いやー、やつぱりガルマ様はお優しいなあ。とりあえず朝ごはんは食べたし、部屋に戻ろう。

途中でそれ違った兵士に白い目で見られてもスキップしながら自室に戻るジーン（転生）曹長であった。

さて休めるのはいいが、急に休めと言われても何をするか迷ってしまう。地上軍に

知り合い居ないし、基地もガルマの部屋以外普通の設備だし、ガルマに観光スポットはないかと尋ねたら「無い」とキッパリいわれたし……

自室の窓の外を見てみると、そこには地球の雄大な自然が広がつてゐる。灰色がかつた険しい山、緑の絨毯にグレートキャニオンから続いてる乾燥した岩場。トレッキングでもすれば普通に観光になるのだろうが、今は戦時中だ。外に出たら自分達の占領地とはいえ、連邦軍兵士に遭遇するかもしれないし、そもそも外に出るには面倒な書類作成と長つたらしい審査期間をクリアしなければならない。まあ、ガルマ様がいるから最悪の場合おねだりすれば特別に出して貰えると思う。外に出る予定はないけど。

現在の日時は9月25日午前10時19分

ガルマ暗殺まで残り9日だ。

一昨日の23日に大気圏突入して、昨日の24日に空中戦闘をした。結構濃密な2日間だな。原作では空中戦闘も23日にやつたらしいが、この世界では1日ずれたみたいだ。……してくれて良かつた。あんなの1日でこなしたら過労で死ぬよ。

そもそもガルマ暗殺までの残りイベントは

ガンペリーを使ってガンダム奇襲 9月？日

アムロ、ブライトにぶたれる 10月1日

ガルマとアムロが直接対決 10月1日

ガルマ死す 10月4日

思いの外、時間がある。

でも出来る事は決して多くはない。

とりあえず今日1日はゆつくり休めるが、明日はガンダムを追っかける為にこの基地を出発する。よくよく考えてみたら観光する暇なんてなかつたな。作戦会議して正解か。とにかく、明日明後日にはガンダム奇襲イベントがあるはず。出撃するかは当日になつてみると解らないけど、シャアは出撃しないからそれに習う感じかもなあ。

そして、アムロ覚醒イベントの一つ「親父にもぶたれた事無いのに！」が発生する。これはホワイトベースでの出来事だから干渉が出来ない。まあ、まだ覚醒してもこの頃はワンチャンあるし……多分。

そういうえばアムロとガルマの直接対決もこの日だけど、確かシャアが無線を弄つて味方が出撃しないように仕向けたんだよな。よくもまあ、そんな事出来るよなあ。下手したら自分達の所にはガンダムが来て落とされる可能性もあるつていうのに。本当にこの男はザビ家暗殺以外目がないんだな……こんな事されたのにガルマは疑わないし、ある

意味殺されて当然なんだろうな。いや、させねえけどな！

しかし、ここまでまだ序章に過ぎない。本番は10月4日、ガルマ暗殺の日が一番大事なのだ。下手したらこのイベントでの出来事が、ファーストガンダムにおける歴史の大きな分岐点なのだ。

……え？俺の生存自体が歴史の分岐点だろつて？

まあ、それもそうなんだけどね。ガンダム白から黒に変わっちゃつたし。資料も奪つてきたし。挙げ句の果てに俺のザクにビームライフル装備しちゃつたし……

まあ、それは置いておいて……：

ともかく、ガルマが生存すればオデッサ防衛戦に顔を出すだろうし、もしかしたら勝てる可能性もあるし、賭けるには十分なイベントだ。そしてガルマ生存にはシヤアの無線妨害が必須である。一見簡単そうに見えるが99%シヤアと一緒に出撃すると思われるるので、ホワイトベースを見つける為にはシヤアと離れて行動する羽目になる。んな事したら怪しまれる。かといって原作情報を使つて離れずに報告しても怪しまれるし……。

無線妨害するより、いつそのことシヤアを殺す方が早そうだが、その後”普通だつたら”待ち受けるのは上官殺しで銃殺刑だろうし……

これ、結構詰みじやね？

そんな事言つたらジオンの勝利だつてアムロがガンダムに乗つた時点で結構詰みの段階に来てるし、何度も言つてると思うが俺さえ生き延びれたらジオンが滅亡しようが復活しようが関係ないからな。ただ、ジオンが勝利したらその後の生活はかなり楽に過ごせると思うからなるべく原作ルートを回避したいだけであつて……

いや、待てよ？もし、ジオンが負けたらどうなるんだ？よくよく考えてみると自分さえ良ければジオンなんか負けてもいいと思つてたが、前世の敗戦国の末路を思い出してみると

- ・多額の賠償金を支払う
- ・領地をぶん取られる
- ・本国に経済的な制裁が加えられる
- ・敗軍の軍人は裁判に掛けられる

いやマズイじやん！特に最後の裁判。少なくともサイド7を襲撃してガンダム2号機を盗んで壊した挙げ句、連邦軍最大機密のV作戦の資料を盗んだ戦犯やん。こんな

の、終身刑で済めばオメデトウ、つてところじやねーか！ヤバい、もつと真剣にジオンを勝利へと向かわせねば。やはりガルマは絶対に生存させるべきだよな。さあどうやつて生き残らせるか……

## グウー

腹時計がお昼の時間をお知らせした。作戦会議していたらもう12時過ぎていたのだ。仕方ない、とりあえずお昼食べて、小休止したら基地内ランニングして汗でも流すか。これ以上考えても良案出なさそうだし、当日になつてみないと解らないもんね。さて、今日のお昼はなんじやろなあ

そして、見事に何も思い浮かばないまま次の日を迎えてしまつたのである。

# 第26話 YMS-06FB

ガルマ暗殺まで残り8日

ここにちは皆様。今朝の6時にガウで出発し、只今ホワイトベースを追つかけてる最中でございます。昨日のうちに部隊を展開させてホワイトベース包囲網を作つて、今日がそのフィナーレになります。でも原作だとガンダムにしてやられて、コテンパンにぶつ潰されるんだけどね。

今頃シャアはガルマと作戦会議中かな?とりあえず探してみるか。多分顔パスで入つても怪しまれる事ないだろうし。通路を適度に歩き、指令室にたどり着く。

「誰だ」

「ジーン曹長であります。シャア中佐に用事が」

「なんだ、シャアの部下か。なら構わん」

「ジーンどうした?」

「一応予定を確認しようと思いまして……」

「ああ、そうだな……ついでだ、お前も見ていけ」

映し出されているモニターには作戦の詳細が記されてた。たしか休戦の申し入れを

受けている間に、ミッド湖に部隊を展開させてホワイトベースを攻撃させるんだつけ？そんでもってガンダムに奇襲されて部隊をフルボッコのケチョンケチョンに（ry 「ふふふ……奴らの休戦を受けている間に部隊を展開させて、一気に討つ！我ながらいい作戦だ」

「バシッ！」と両手をキメてます。ああ、これは自分に酔つてますわ。これには私も一言。

（これで勝てねば、貴様は無能だ）

（これだからテメエは無能なんだよ）

「ういえ、オーバーホールした俺のザクはどうなつているんだろ？格納庫へ行つてみるか。しかしたつた1日でザクのオーバーホールなんて出来るのだろうか？整備兵さん達に睨まれなきやいいけど……」

「ああ、ジーン曹長。君のザクはもう整備が終わつてゐるはずだ。まだ君たちの出番はないだろから見に行くといい」

「はっ、ありがとうございます」

ビシッと敬礼を決め、部屋を後にする。

指令室を出てからものの2、3分で格納庫に着く。ガウのぽつこりとした胴体のほと

んどを占めているのがこの格納庫。ガウは攻撃空母と言われているが、このでつかい格納庫を見ると空飛ぶ格納庫って言つてもいいんじゃないかと思う。そういうえばファットアンクルもこんな感じの格納庫だけど、どうやらジオンはMSを立てて格納したいらしい。何のこだわりがあるのだろうか？MSが移動する時に船体が揺れて大変なんじやないか？不安定になれば墜落しかねないので……まあ、そこは宇宙人の技術で何とかしているのだろう。そうこう考えている内に赤い（朱色）ショルダーアーマーが目につく俺のザクが見えてきた。どうやら整備は終わつたみたいで整備兵の姿はまばらだ。

「アンタがジーン曹長かい？」

いきなり後ろから話しかけられた、ビックリするから止めてくれ。とりあえず後ろを振り替えると、渋めな感じの30代後半の整備長が睨んでた。うわあ、嫌な勘が当たつたよ。

「はい、そうですが……」

恐る恐る返事をする。そうしたら整備長が大きなため息をつきながら愚痴をこぼした。

「通常、付きつきりで作業して2日掛かるオーバーホールをたつた1日でやれと大佐に命令されるのは百歩譲つていいとして……あんな“現地改修”的度を越えた魔改造ザクを整備をしなきやならん我々の気持ちを理解してくれませんかね？」

あー、なるほど……確かにそりやそうだな。ジエネレータを二基に増やし、バツクパツクは溶接してデツカクした挙げ句、ビールライフルを撃つ為に色々と改良したら『ザクのようなにか』になってしまったMSだもんな。うん、気持ちは十分に分かるよ。でもね、これだけは言わせて欲しい。

俺だつて被害者だ!!!

とりあえず労りの言葉を伝える

「いやあ、付きつきりの整備ありがとうございます」

「全く、付きつきりでやつても整備は終わらないし、MSは滅茶苦茶だし、それでも給料は据え置きなもんで……二度とあんなMS整備したくないね」

言葉でボツコボコに殴られます。目に見えないけど結構痛いです。ハイ。とつとと退散してダメージを受けないようにしよう……」

「本当にありがとうございました。では私はこれで……」「おい、ちよつと待て。まだ話すことがある」

えええ！まだあるんすかあ……：

「お前、一回リミッター切つただろ」

ギクリ

「黙つてもザクのスラスターみりや分かるよ。無茶すると根元が変形するから一目瞭然だ。まつたく、普通のザクなら普通に直せるけど、お前さんは”特製”だからなあ。苦労したぜえ？」

冷や汗が滝のように出てる。と思う。

「……」

「……」

お互い何も言わず、少しの間沈黙が続く。

冷たく、重くのし掛かるこの空気。

これは……もう”アレ” しかないな。

両膝  
両手

頭

を地面に着け、相手に対し最大の誠意を見せる

「整備して頂き誠にありがとうございましたああ!!!!」

そう、これこそジャパニーズ土下座である。

恥じらいとプライドをかなぐり捨てた者のみが出来る会心の必殺技である。

……

少し間を置いた後、トントンと肩を軽く叩かれる。

「顔を上げな、それが出来れば一人前だよ。あとお前さん所の整備士にもよろしくと伝えてくれ」

顔を上げ整備長の方を向くと、俺に背を向けてながら格納庫を後にしていた。  
やだ、なんだか格好いい……トゥンク

♪テンテンテン テンテンテーーンテ テテテーーンテンテテテンテテン  
×2

アスファルトタイヤを切りつけながら  
アスファルトタイヤを切（ry  
いや、作品違うから。あと歌詞も違う。

怒涛の展開で物事が進んだが、とりあえず指示があるまで部屋で待機でもしようかと思つた。しかし、そういうやあのおっちゃんに「お前さん所の整備士にもよろしく」って言われた事を思い出す。コムサイで地球に降りたのは俺、シャア、ドレンとコムサイの補助パイロットと、おっちゃんが言つていた整備士。確かにその人が音頭をとつて俺のザクを魔改造した張本人だつたような……まあ、せつかくだし先にMSのチェックしてから会いにいつてみるか。

一通りMSのチェックを済ませ、改めて整備兵の方々にお礼言いながら格納庫を後にしてた。

こうしてガウ格納庫での出来事は終わったのであつた。

ちなみにガンダムの運びだしも同じ頃に終わつた。

## 第27話 技術士官セキヤ

ガンペリーからガンダムが運び出され、ジョンのルッグン「ビッグジョン」と一悶着が終わつた後らへんの時間。俺は、俺のザクを魔改造した整備士の元へと向かつていた。

確か、セキヤつて名前だつたよな。技術士官でサイド7での収穫品の解析をするために編入されたんだつけ？ぶつちやけジーンの記憶を辿つても詳しくは分からぬ。まあ、興味無かつたんだろうな。それに原作に出てこないキャラクターなので、いつさいがつさいの情報が無いのは少し怖い。名前からして日系人っぽいけど……

彼が居る部屋の前に着く。少し緊張しながらノックをして「どうぞ」と声を掛けられた。ドアが開き、部屋の中には中肉中背の日本人が腰掛けていた。

「あら、どうされました？ジーンさん」「いやあ、整備長からよろしくと伝えてくれと言われまして……私からもお礼をと思いまして……」

「わざわざありがとうございます」

うん、日本人だこの人。どつからどう見ても会社の係長クラスに居そうな日本人だ。

身長はだいたい俺と同じくらい。髪は黒で短髪。黒縁の眼鏡に鷺鼻で顔は四角い。中肉だがガタイはしつかりしており、太ってはいない。

うん、日本人だこの人。

「折角ですから、もし時間がよろしければ少しお話でもしませんか？」

彼からの提案を受け、部屋の中に入りもうひとつ椅子に腰掛けた。

「多分はじめまして、ですよね？私はシャア中佐の部隊に編入されたセキヤ・シモノと申します。階級は技術少佐です」

「へえ、技術少佐ねえ……しょ、少佐ア！？」

「どうされました？……ああ、階級のことなら気にしないで下さい。別に取つて食おうという訳じやありませんし」

あまりにも唐突すぎて顔に出てしまったらしい。失礼なこと言うようだけど、ホントに歳が一回り上の係長みたいな雰囲気なのよ。

「いやあ……でも少佐となると、階級がすべての軍人としては……」

「まあ言いたい事は分かりますけど、この部屋の中だけはラフで大丈夫ですよ。お願ひします」

「はあ、ではそうさせて頂きます……」

なんとも日本的な会話が続く。この後手後手に回る感じが少し懐かしい。

「整備したザクはどうでした?」

「完璧です。もしかして一緒に付きつきりで?」

「ええ。昨日は仮眠しながら指示を出していましたね。ガウに乗つてからようやつと、まとまつた睡眠が取れまして……さつき起きたばっかりですよ」

セキヤは右手で持つてるマグカップを口に持つていく。湯気と一緒にコーヒーの薫りが漂ってきた。

「いやホントに、ありがとうございました」

「いえいえ、これが仕事ですから」

少し照れながら軽く頭を搔く。やつぱり日本人だなあ、としみじみ思う。

「どうされました?」

「いやあ、セキヤさんって、やつぱり日本人だなあ」と思いまして……」

「えつ? もしかしてジーンさんも日本人なのですか?」

「ゲツ! 思わず呟いてしまつた! ヤバいぞ、ジーンの家族なんて知らんぞ!! えーと、うーんと……」

駄目だ! 設定されてないから両親の顔も名前も解らんぞ!! いやセキヤさん、そんなキラキラした目で見ないで下さい。心がとつても苦しいです。えーと、もう、こうなりややけだ!

「え、えーと……た、確かに私の祖父が日本人だつた記憶がありまして……」

「そうなんですね！いやあなんか、ジーンさんとは何となく波長が合うな」と思つていたんですよ！」

何とか誤魔化した……

「ちなみにご出身はどちらですか？」

オーバーキルはやめてくれえええええ!!!!!!

まずい。バンチの存在は知つてゐるけど、詳しくは知らん！ズム・シティとハツテしか知らんぞ！えーと、これも適當で……

「あっ、えー、あー、えーと、6バンチだつたかな？……です」

「ジーンさんも6バンチでしたか！いやあ、もしかしたら私達どこかですれ違つているかもしだせませんね！」

(, も;) あつ

ヤバい地雷を踏んだかもしだ。

この流れだと6バンチの何処でしたか？つて聞かれそうなので強制的に話を切り替えよう。それしか道はない。

「それでジーンさんはどこ地k」  
「いやア！セキヤさんも日系人とは奇遇ですねツ！もしかしてサイド3は日系人が多いんですかねツツ！」

「日系人……ああ、そういうえばこんな話を聞いた事があります」  
よし！切り替え成功！

「サイド3は重工業コロニーとして建設が進められたというのは知つてますか？」  
「はい、聞いたことはあります」

「それに伴つてですね、優秀な技術者を集めて移住させたみたいなんですよ」  
それは初耳だな。とりあえず適当に相づちを返す。

「へえーそんなんですか」

「サイド3の人口の割合としてヨーロッパ系白人が半数を占めていて、そのうちの3／4割がドイツからの移住らしいんですね」

「確かに白人多いですよね」

「そもそも北米移民が3割、日本からが1割。その他南米やアフリカ大陸などの色々な民族が1割で成り立っているみたいなんです」

「ほおー」

「なのでジーンさんの言っている通り他のコロニーに比べると日本人の移民がそこそこ多いんですね。私の祖父が町でベアリング工場の社長をやっていたのですが世界でも有数の真円に近いベアリングを作っていたみたいで地球連邦政府からも是非サイド3に移住してみませんかと聞かれたので新しい物好きの祖父はそれに応じて移民したんですよ。それでですね……」

「はえー、ふーん、凄いですねー」

やばい、この人オタク気質があるのか話に熱が加わると早口になる人だ。とりあえずこの後も適当に相づちをうつておこう。

にしてもサイド3の人種の割合なんて考えた事が無かつたなあ。原作だとアサクラぐらいしか出てきてないと思うけど、外伝作品やMSV、ゲームなんかだとそれなりにいるよな。そりや連邦軍にも日本人だろうなあうつて人は沢山居るけど、ほぼサイド3出身で構成されているジオン軍とスペースノイドとアースノイドごつちやになつている多国籍軍の連邦軍じや母数が違うもんな。

それと重工業コロニーに技術者を移住させるために人種の割合を考えた事がつてのも凄いよな。貧困層やらを優先して送つて自分達は地球に住む横着な奴らだと思つたけど、そこらへんはちゃんととしているのね。確か割合はヨーロッパ系白人の3~4割は

ドイツ人で、アメリカ系も3割居て、日系1割……ん？までよ、もしかしたらジオン脅威のメカニズムが少し解明されたかもしない。少なくともドイツ×日本は合わせちゃ駄目だろうな。これは素人でも分かる。

「……という経緯で私はシャア中佐が編成したA—12部隊に配属され職務を全うしている訳です」

「はえー」

大きな鼻息をして誇らしげにするセキヤさんに拍手を送った。

「おっと、もうこんな時間。そうだジーンさん、よかつたら食堂に行つて一緒にお茶でもしませんか？」

「いいんですか？お供します」

この後二人で食堂へ行き紅茶を飲みながら、セキヤがあらかじめ購買で買ってきたジャムクツキーを頬張りながら雑談をしたのであつた。まあ、どうせ原作的には「戦場は荒野」だから出撃は無さそうだからいいよな。

案の定、ガンダムの奇襲は成功してマゼラアタック隊は全滅。ガルマの木馬討伐部隊は約8割の戦力を落とされて撤退した。

## 第28話 ガルマの苦悩

「左翼後ろからMSだそうです！」

「なにつ!?」

「バツ、バカな……ッ!!」

9月27日 現地時間17時20分

ホワイトベース包囲網左翼後方、ミッド湖から進撃したガンダムはマゼラアタックの部隊を一掃。

同日 18時00分

ホワイトベースとガンダムが合流。ガンダムの活躍により、マゼラアタック隊全滅。討伐部隊撤退開始。

何故だ……なぜガンダムが出てきた。しかもホワイトベースの後ろから、どうやって  
?

まさか避難民を乗せて不時着した飛行船から出てきたというのか……？

位置からして、そう考えるのが筋だろう……

偵察機の通信が途絶えたのはガンダムに攻撃されたからと思われる……  
クソッ！あの時はホワイトベースを落とすのに気を取っていたから気付かなかつたが……連中、卑怯な事をしてきやがつて！

しかし、シャアもこの奇襲を察知出来なかつたとはな……これは、仕方のない事だな。  
私よりガンダムを追いかけていたシャアが気付かないなら、誰にだつて気がつきやしないさ。

それに戦力的にはこちらが上なんだ。奇襲さえ無ければ、こちらが勝つていたはずなんだ。

そうだ……ガンダムの奇襲さえ無ければ……

自分の精神をなだめる為に自己暗示を掛けていく。次第に落ち着きを取り戻し、ある程度元に戻っていた。

「ダロタ、戦況報告をしてくれ」

「はっ。マゼラアタック隊は全滅、残った部隊は……約3割です」

この報告を受けたガルマは膝から崩れ落ちた

「そう嘆くな、私だつて見抜けなかつたんだ」

「同情はよしてくれ……」

基地に戻り、ガルマの部屋で二人は軽く酒を飲み交わしていた。

「同情だつてするさ。まさか避難民を乗せた船にガンダムを乗せ、さらに氣をそらす為に偽装工作をして不時着をしたのだからな。連中は着々と成長している」

「…………」

シャアからの目線を反らし、うつむいたまま酒を飲む

「お説教は性分じやないがなガルマ、あまりメソメソするんじやないぞ。君は北米を束ねる指揮官なんだ、作戦の失敗だつて時にはある。その失敗を次に生かしてこそ、眞の軍人になれるのさ」

「しかし、私は2回も取り逃がしてゐる……」

「そんな事言つたら私は3回も取り逃がしてゐるぞ、気にするな」

「…………」

ウイスキーのロックを飲み干した。ガルマはグラスの中の氷をじつと見て、シャアの言つていた言葉を受け入れようとしていた。

「そろそろ私は寝ようとするとしよう。ガルマ、やけ酒だけはするんじやないぞ」

「分かつてゐる……おやすみ」

「ああ、おやすみ」

シャアは部屋を出て部屋がシーンとなつた。ガルマは暫くの間、グラスの氷を見続けてしんみりと感傷に浸つていた。

(しかし私もあそこまで予測出来なかつたとはいへ、あんなにもやられてしまうとは  
……やはりガルマは無能だつたな)

カツカツと廊下を歩き、自分の部屋へと戻る。すれ違う兵士は特に居ない。  
(……やはりこのままではジオンは腐るな。まずはガルマ、君から死んでもらう)

翌日28日の朝……

やけ酒はせず、あのウイスキー1杯だけにしたので二日酔いはしなかつた。目  
覚めもそれなりに良い。身支度を済ませ、朝食を食べている最中の事だつた。

「お食事中申し訳ありません、キシリシア少将から通信が……」

思わず食べていてエッグベネディクトを吹き出しそうになつたが、何とか吹き出さず  
に済んだ。そのかわりに気管に入り込んで嘔せてしまつた。

「だ、大丈夫ですかガルマ様！」

「ゲホッゲホッ……だ、大丈夫だ」

少し慌てながらナップキンで口元を拭き、髪型や服装、髪型等を整える。

「通信室だな？」

「はい」

「朝食は後で食べる、残しておけ。では行つてくる」

「はつ、御武運を」

!?  
ん？ 御武運をつて何を言つているんだアイツは！ 私がこれから死ぬとでも言うのか

……いや、タイミング的に考えて昨日の件での呼び出しだろう。しかし、あんな悲しげな目で「御武運を」つて言われても困る……

ぶつぶつ言いながら通信室に行き、通信兵にチャンネルを繋がせた。

「おはようございますキシリア姉様」

「おはようガルマ、わざわざ早朝にすまない」

「いえ、朝食は丁度食べ終えたので問題はないですよ」

「そうか、それなら良い」

画面にはヘルメットもマスクも外したキャストオフの紫BBAキシリシアが椅子に座つていた。

「なぜ呼び出したかは……分かるな？」

「昨日の木馬討伐の件でしようか……？」

「それもある」

「それも……？」

「まあそれは先に木馬討伐の件を話してからだ。してガルマ、何故あれだけの犠牲を払つても木馬を討伐出来んのだ？」

ズバリと痛い所を突かれ、思わず苦い顔をするガルマ。

「そつ、それは……ガンダムが奇襲をしてきたからで……」

「奇襲されてなければ勝てた、と」

「そ、そうです！」

「そうか……」

頸に手を添えて少し考え事をするキシリシアに、ほんのりと恐怖を感じていた。

「ガルマ、功を焦つて軍を疲弊させている暇は我が軍には無い。やるならもつと慎重に作戦を立ててくれ。分かつたな？」

「は、はい！」

「ふむ、お説教はこれぐらいにして本題に入るとする。ガルマ、キヤリフオルニアベースで生産しているゲルググの稼働はどのぐらい進んでおるのか?」

「ゲルググですか……現在はビームライフルの実証実験も終わり順次生産しています。ゲルググの量産型は先に生産し、1週間後には6機がロールアウトする予定です」

「そうか、予定より1ヶ月ほど早まつたのか?」

「はい、ジオニック社が懸命になつて作りましたから」

「ジオニックも大したものだな」

キヤリフオルニアベースに居たジオニック社の技術者達にV作戦の資料を渡して

「この資料を元に今すぐゲルググ用のビームライフルを一週間以内に作つてくれないか?」

つて頼んだら、その場に居た技術者全員が卒倒して倒れたぐらいだからな。私にもそれぐらい無茶な事は分かる。本当に良く頑張つてくれたものだ。

「ふむ、予測より早く完成して安心しておる。要件は以上だ、早朝にすまなかつたな」回線が切れ、緊張の糸が切れたのと同時に近くにあつた椅子にへたりこむ。いくら家族とはいえ、仕事では上官であるのでやはり緊張する。少しこのままの態勢でゆっくり

したいと思つたが、部屋に鳴り響くコール音が許してくれなかつた。

「ええい！こんな早朝から誰なんだ！……ど、ドズル兄さん！」

まさかドズルからの通信で思わず硬直してしまつたが、出ない訳にはいかない。すぐさま通信を開始する。

「ガルマ、こんな朝早くからすまんな。どうしても聞きたいためがあつて話にきたのだが……」

「構いませんよ」

「すまない。それでは单刀直入に聞くが、木馬の方はどうなつてゐる？」

ストレートを通り越してジャイロボールな質問を投げてくる兄貴に思わず眉毛をひくつかせるが、何とか堪えて質問に答える。

「ま、まだ落とせていません……」

「シャアはどうしたんだ？シャアとガルマがいれば……と思つたのだが」「し、シャアも出撃しているのですが、奴らかなりしぶとくて……」

嘘は言つてない。出撃はした。

まだ大隊と一緒に出てないと言おうもんなら「馬鹿者！！」とカミナリが落ちかねない。

「そうか……しかしガルマよ、悪戯に兵を減らす物ではない。アフリカや極東では、マゼ

ラアタツク1輛でさえ欲するような過酷な戦線を繰り広げているのだぞ。あまり無駄にするんじやない」

「申し訳ありません……」

「お前一人で戦っているのではない。MSパイロットから整備士、砲手に歩兵、衛生兵だつてそこらへんの畠から取れるものではない！ジオンは今、MSより人の方が大切なのだ！それを分かつての事か！」

「す、すみません！」

どつちにしろカミナリは落ちてきた……

「む……熱くなりすぎたな。しかしガルマよ、ジオンは現状維持ですら厳しい状況に立たされているのだ。それだけは分かつてほしい。お前にはもつと立派な指揮官になつて欲しいと思つての発言だ、勘弁してくれ……」

「ドズル兄さん……」

分かつてはいるさ……指揮官としてはあまり優秀ではないことぐらい。ドズル兄さんも僕が可愛くて仕方ないけど、あえて厳しくしている事も……。

でも、奴らはおかしいぐらい強くてとても敵わない……親の七光りと言われないよう

に反骨精神で頑張つているのが精一杯だ……。

シャアと協力してホワイトベースとガンダムを倒して欲しい。アイツは……かなりの実力者だ。頼む……」

巨体を前に倒し、頭を下げる。こんな事されたら、やらない訳にはいかないじゃないか……

「分かったよドズル兄さん……次はシャアと協力してガンダムを倒してみせる。約束するよ」

「本当かつ!!! ガルマなら理解してくれると思った! よし! ガンダムを倒したら祝賀会を開くぞ!!」

「気が早いって!」

「む? もうこんな時間か……時間を取らせて悪かつたな。次に会う時は良い報告を待つているぞ」

「分かったよドズル兄さん、必ず仕留めてみせる」

「それでこそ、ザビ家の人に間よ! 楽しみにしてるぞ! ではまたな」

回線が切れる。とてもとても疲れたが、僕の事を思ってくれる優しい兄さんだ。何だか心がほっこりしてきた。さて、冷めきった朝食を食べ終えたらシャアと一緒に作戦を立て直そう。今は親の七光りやプライドがどうこう言っている場合じゃない。よし、朝

食を――

プルルルルル　プルルルル

またコールか。今度は一体……

「お早う御座いますガルマ様」

画面に映っているのは茶髪に赤い総帥府の服を着た美女である。もうこの時点で鳥肌が立っている。

何を言おうがこの女性はギレン総帥の秘書、セシリア・アイリーンである。

「2分後の7時45分から10分間ギレン総帥との面談を行つて貰いますが、宜しいでしようか?」

「は、はい……」

答えはハイか yes の二択である。

「では宜しくお願ひいたします」

「久々だな、ガルマ」

「お久しぶりです、ギレン総帥」「フツフツフ……そう固くなるな」

この後原稿用紙2枚分の報告と40枚分のダメ出しを10分びつたしに言われ、残した朝食が食えなくなる位疲弊したガルマであつた。

## 第29話 再考の時

一昨日はコテンパンにやられ、昨日はドズルとキシリ亞更にはギレン総帥からジエツトストリーム呼び出しを食らつたせいで、ガルマの顔色が滅茶苦茶悪い感じが観て取れる29日の朝です。おはようございます、ジーン（転生）です。いよいよガルマの暗殺まで残り一週間を切りました。2日後には原作第9話「翔べ！ガンダム」でのアムロ第一覚醒イベントが控えています。しかし、一昨日の戦闘で部隊の戦力が8割も削られちゃつたら、立て直してホワイトベースを攻めるのに3日も掛かる訳ですね。

しかし、なんでなんであんなにもポンコツなんだろうなあ？ガルマつてギレンの野望だと前線に出てそれなりに戦えるし、なにより魅力が高いからユニットの攻撃力も上がるし、基本的に他の兵士達的好感度も高いから使い勝手がいい方なんだけどねえ。少なくともこの世界でのガルマは社交界に出来て外交政策は出来るし、前線に出れば兵士達の士気は上がるるのは変わらないけどね。でも戦術家としては絶望的に駄目で前線に出了ちやダメっていう矛盾した軍人なのよね。いや、前線に出なきやいい話なんだけど、ガルマの親の七光りを気にしている性格とガルマの暴走を止められる人が居ないせいで無理なのよね。アイツを手引き出来るのはシャアぐらいだろうなあ。殺そうとしてる

けど。まあ、所詮ゲームはゲームか。

さてと、そろそろトレーニングでもしますか。地球に降りてからのトレーニングは筋肉量が増加していい感じなのよね。やっぱり無重力だと維持するだけで精一杯だから環境つて大事なんだね。

右腕をぐるぐる回しながらトレーニングルームへと向かうジーンであつた。

一方その頃ガルマは……

「シャア頼む、この通りだ」

「頭を下げられても困る。指揮官は君だろう。私に作戦を一任するのはどうかと思うぞ」

シャアは困っていた。なぜならガルマに呼び出されていきなり「次の作戦を一任したい」と言つて頭を下げられたもんだから困つていた。

「私はあくまでも小隊の隊長だ。大隊を動かすノウハウはないし、務まるかどうかは分からんぞ」

「私が指揮したのでは、どうやつてもホワイトベースを倒せん……もうシャアに頼るしか無いんだ」

「困ったな……」

厄介な事になつた、とシャアは思つた。一昨日とはまるで目付きが違う。これは本気でホワイトベースを撃破しようと意気込んでいる。暗殺しようと近づいているのに、これでは下手なことは出来なくなる。かといって万が一ホワイトベースを撃破したらガルマとの接点がなくなり、暗殺の機会が失われるやもしれん：

「……」

「なあ何か打つ手は無いのか、シャア」

打つ手と言われても、いくらガルマの適当な指揮とはいえ大隊クラスの進撃を二回も跳ね返すバケモノじみた小隊の対処があるなら私も知りたい。

打つ手がない……か。

「ガルマ、あくまでもこれは私の独り言だが……」

「！」

物凄くキラキラした目でこちらを見てくるガルマに思わず吹きそうになつたが、話を続けた。

「ガルマ、決着はもう少し後にしないか？」

「それはどういう意味だ！」

うつて変わつてギラギラした目でこちらを見てくるガルマに思わず呆れそうになつ

たが、話を続けた。

「ホワイトベースはこのまま行くとシアトル方面に行くだろう。決着はそこで着けないか？」

「どういう事だ？なぜ待つ必要がある」

「ガルマ、君の力を持つてしてでも二回もはね除けられた。大隊クラスの部隊を当てるも、だ」

食い入るように聴いているガルマの頭はまるで鹿威しのように一定の周期でコクコクしている。

「ならば、だ。あえて全力で当たらず戦力を温存して、嫌がらせ程度にしておき、討つき所で討つ」

「なるほど……」

「奴らはグレートキャニオンから北上して谷合を縫うようにしながら移動している。これはホワイトベースがミノフスキュー・クラフト・システムを利用した大気圏内反重力航法を上手く活用している。ミノフスキュー粒子でホワイトベースを浮かせてているのだが、谷合の山で包んでレーダーを妨害し、遠距離から攻撃をされないようにしているためだ。だから攻撃を受けない谷合を進まなければならず、ある程度航路は決まっている。そこで待ち伏せして嫌がらせ程度の攻撃をして戦力を温存させる。そして行くであろ

うシアトルで大量の部隊で弱つたホワイトベースを撃破する。という作戦なのだが……理解できたか？」

「あ、ああ」

多分理解していないな。と思いながら最後の一押しをする。

「ガルマ、次から出撃させてもらう。そうすれば奴らはシアトルに着く頃には疲弊しているだろう。そこで君がシアトルでトドメを差せば、姉上も喜ぶだろう」

「お、おお……！」

頭を下げた時は弱々しい顔をしていたガルマだが、今では生き生きとしていた。「ありがとうシャア。君のお陰でホワイトベースが倒せそうだ。これから編成を考えねば……」

「では私はこれで」

「ありがとう！」

ガルマの部屋から出て廊下を歩く。たまにすれ違う兵士に敬礼されながら自分の部屋に戻る。ヘルメットとヘッドギアを取り外しソファーに沈む。そして、一言

「これで勝たねば、貴様は無能だ」

勝負は  
10/  
1に、  
切られる。

## 第30話 対決？ ジーン（転生）ＶＳアムロ

おはようございます、ジーン（転生）です。

一日飛ばしてやつて参りました10月1日のアムロ第一覚醒の日。もうあれは仕方ないとして、やられない程度に仕事をしなけりやならん。なんか決着はシアトルで決めるから、その道中で戦う今回の戦闘は軽くで良いらしい。自由落下中の戦闘からほぼ一週間程MS戦をしてないので少し不安な所がありますが……

### 今回の作戦概要

ホワイトベース（通称”木馬”）及びガンダム他MSに打撃を与える事。ただし戦力保持の為、余力を持つて撤退をする事。

……判断が若干遅い気がするが、まあ方向転換できただけマシと考えよう。しかし参

加する部隊編成が

ガウ 2機

ドップ

2個小隊

マゼラアタック

1個中隊

MS 1個特別小隊（シャアと俺のみ）

とまあ、こんな感じでMSを温存している。昨日も二回程待ち伏せして攻撃したみたいだけど、MSは参加させなかつたらしい。最初つからこうしていれば……まあ、愚痴つてもしようがないし、ウォーミングアップでもしてきますか。

一方その頃シャアは……

ガウ攻撃空母 指令室

「ガルマ、今日は顔色が良さそうだな」

「ああ、体調は完璧だ」クルクル

「数日前の時は血の気が引いていたからな。やはりギレン総帥のお説教が……」「その説教は止めてくれ！思い出しだけでも頭痛がしてくる……」

「はつはつは、大袈裟すぎやしないか？」

「君はギレン兄さんの説教を受けた事が無いから言えるんだ……ギレン兄さんの説教は

ドズル兄さんやキシリア姉さんと違つて精神は勿論、脳にまでダメージが行くんだ  
……」

「あの時は酷い頭痛で気分も最悪だつたんだ……」  
誇張が過ぎると思ったが、シャアは言葉にはしなかつた。

「そうか……」

シャアはあの時のガルマの顔を思い出し、あながち嘘ではないと思ったのでこれ以上追求はしなかつた。

「ではそろそろ行く」

「分かつた、くれぐれも気をつけてくれよ。何かあつたらガウで援護する」

「お気遣いありがとう」

笑顔で見送るガルマだが、指令室を出るシャアの腹の中には暗殺の二文字が残つていることをまだ彼は知らない。シャアはまだ諦めてはいない。

「敵2時と10時の方角からマゼラアタックです！」  
「さらに6時の方角からドップが近づいています」

「またこのパターンか！」

オスカーとマーカーの報告に苛立ちを覚えるブライト。そこにまた苛立ちを隠せていないリード中尉が話しかける。

「ブライト君、私は言つたはずだぞ。早く太平洋に脱出して本部に連絡した方がいいと」  
「燃料や弾薬、食糧まで底を尽きそうなのに太平洋なんかに出たら孤立してあつという間に墜ちてしまいます！今の状況を考えてから発言して貰いたい！」

「リード中尉、ブライト、二人とも落ち着いて下さい。ここはジオンの勢力圏内なのだから、ジオンの攻撃はあつて当たり前よ。昨日も二回攻撃が来ましたけど、何とかくぐり抜けたのだから、何とかなるわ」

ブライトとリードをなだめるミライ。二人は黙つてしまつた。名門ヤシマ家のご令嬢は伊達ではない。

「ブライト、指示を出してあげて。この艦の行く末は貴方にかかるつているのよ」「そうだな……よし、各砲撃手は迎撃体制を取れ。敵は多分昨日と同じだ。だが気を抜くなよ」

「正面12時の方角からMSが2機！これは……シャアです！シャアが来ました！」  
「シャアも来たのか……よし、カイはガンキヤノン、アムロはガンダムで出撃してくれ」「はいはい」

軽い返事で返すカイだが、肝心のアムロからの返答が無い。ブライトはもう一度呼び掛ける。

「おいアムロ、聞こえているのか？ガンダムで出撃してくれ」

「うるさいなあ……」

「おいアムロ！これは命令だぞ！おい！」

「出撃したら、ゆっくり寝れる保障はあるんですか？」

「なんだと……！」

アムロの返答に力がない。昨日も二回出撃したせいなのは分かつてはいるが、シャアを追い返すにはアムロが必要だ。

「アムロ、シャアが来ているんだ。出撃してくれ」

「そんなにガンダムを動かしたいなら、ブライトさんが出撃すればいいでしょ！」

「貴様ツ……！」

思わず返答に歯ぎしりをするブライト。

「どうしたんだブライト君！」

「……アムロが出撃を拒否しているんです」

「なんだと!? ジャアシャアはどうするんだ！」

「……代わりにガンタンクを出撃させます。リュウ、ハヤト、ガンタンクで出撃してくれ

ないか?」

「おうよ!」「分かりました」

苦肉の策でガンタンクを出す。しかしガンダムでないとシャアは追い返せない。何とかしてアムロをガンダムに乗せなければと考えるブライト。

「……よし」

受話器を取り、手際よくハンガーへと繋ぐ。

「ブライト君、出撃かい?」

「ええ、とりあえずガンタンクとガンキヤノンを」

「ガンダムは出撃しないのかい?」

「それが……」

アムロが出撃拒否した事を話す。

「出撃拒否か……」

「はい」

「解つた、私が説得してこよう」

「お願ひします」

通話を切り、ホツと一安心する。父親のレイ大尉なら何とかしてくれるだろうと。ブライトはホワイトベースの指揮に集中する。

「左舷機銃、弾幕薄いよ！なにやつてんの!!」

薄暗い部屋のドアが開く。そこには着崩した制服のままベッドに横たわる息子が居た。

「父さん……ブライトに言われて説得にでも来たんでしょ」

「アムロ……」

明らかに元気がない。でも何とかして出撃してもらわねば困る。

「昨日は二回も出撃してロクに寝れないんだ。休ませてくれよ」

「それを言うならリュウ曹長だつてコアファイターで二回出撃したぞ」

「父さんまでブライトの肩を持つつもりなのか！」

ベッドから起き上がり、こちらに近づいてくるアムロ。あまり表情を表さない息子の

眉間に、シワが寄るぐらいに怒っていた。

「アムロ、気持ちが分かるがこれは戦争なんだ。アムロが出なければシャアにやられて皆死ぬ事になる」

「……そんなにシャアを倒したいなら父さん、貴方が出ればいい。ガンダム作った技術者なんだから操作ぐらい出来るだろ？」

「なつ…………！」

息子からの発言に思わず仰け反ってしまった。怒りの顔から疲れた顔に戻ったアムロはよそよそとベッドに戻つてうずくまる。

「寝させてくれよ…………僕の気持ちが分かるんだろ？」

どうしようか。無理やり叩き起こしてガンダムのコックピットに詰め込もうか、必死になつて頭を下げ続けるか、それとも……修正を強行するか。

……いや、全部ダメだ。自分の息子は思いの外、頑固な事ぐらい知つていて。ましてや自分の息子を殴る事なんて今まで一度もした事がない。仮に殴つたとしても、その後に何を言えば良いかなんて解らない。とすれば答えは自ずと一つになる……

「分かった、私がガンダムに乗ろう」

「えつ…………？」

寝ていたアムロが思わずこちらを向く。が、直ぐに背を向けた。

「好きにしてくれっ…………僕は寝るから」

ふて寝する息子に哀しみを残しつつ、部屋に備え付けてあるテレビ電話でブリッジに

繋ぐ。

「レイ大尉！どうでしたか？」

「……ガンダムを出撃させるよ。指揮を取ってくれ」

「おお、それは良かった。では今すぐに出撃を！」

「……了解」

通信が切れ、自分の顔がぼんやりと映る。その顔は多少の迷いがあるものの、決意を決めた顔だった。部屋を出たテムは久しぶりに全速力で廊下を走った。

2機のザクがガウから降りてくる。着地をした2機はガンキヤノンとガンタンクがドップを追つ払つてるのを確認する。

「ガンダムが見当たらないな」

「そうみたいですね」

アムロは原作通りグレたか。

「どちらから行きます？」

「キヤノンから行く。ジーンはタンクを足止めしてくれ」

「了解！」

ガンタンクに照準を合わせ、キヤタピラを撃ち抜く。見事にヒットし、文字通り足止めをする。

「上出来だ、後は適当に援護してくれ」

「はいはい」

やつぱりガンダムは出なかつたか。こりや今頃ブライトに殴られているんだろうなあ。あーヤダヤダ、アムロ覚醒しちやう。そろそろ引きずり下ろさないと歯止めが効かなくなる。

シャアのザクがガンタンクの砲撃を華麗に避け、お得意のキックが炸裂する。ギャノンはオープン回線でないはずなのに、カイの悲鳴が聞こえてきた気がする。ふとガンタンクの方に目を向けると、まだ動きが止まつたままだつた。トドメを、と思つたその時アラートが鳴る。黒い奴のお出ました。

「中佐！ ガンダムが出てきました！」

「ようやつとか！」

着地したガンダムはシャアの方を向き、ビームライフルを乱発する。だが、掠りとも

「なんだ？ いつものガンダムとは動きが違うぞ」

しない。

「そうですか？」

「まあいい、私がガンダムを引き付けるからジーンは援護を！」「

「分かつてますつて！」

シャアが蝶のように舞いながらビームライフルを避ける。逃げる事に關しては一級品だな。向きは変えるが、一步もその場から動かないガンダムに狙いを合わせる。確かにこの頃のアムロなら普通に動き回っているはずだよなあ、と思いつつ照準を頭に合わせる。一回ヘッドショットやつてみたかったのよねえ

「狙い撃つぜ！」

ビーム一閃、ガンダムヘッドを貫き頭が無くなる。ガンダムは仰け反つて背中から倒れた。ヨツシャ！決まつたぜ！ヘッドショット、キモテイー！！久しぶりのMS戦に血を滾らせるジーン（転生）であった。

「ぐわっ！メインカメラが!!シャアに気を取られすぎたか……ッ！」

テムは身の程を思い知った。アムロの次にシミュレータで得点が良かつたのでシャ

アを追い払う位なら……と思ったが、いざ戦場に出てみるとシャアの速さに戸惑い、肝心の移動を忘れていた。

「しかし……ここでやられる訳には……」

歯を食い縛りながら補助カメラを作動させ、ガンダムを立ち上がらせる。父親もまた、頑固な男であつた。

「アムロ！ 貴様ア!!」

青筋を立てながら部屋に入り、アムロの首根っこを掴むブライト。

「なつ、何ですか！」

「お前……どういう神経しているんだ!!」

ブライトの顔を見たアムロは直ぐに目を背けた。その顔は余りにも凄みを帯びていて、多分誰が見ても目を背けると思う程だ。

「お前は父親を見殺しにするつもりなのか！」

「そんなの……親父の勝手だろう」

「ツ……！」

冷たい顔をするアムロの頬を思い切り叩く。

「ツ！殴つたね！」

「殴つてなぜ悪い！本当はレイ大尉だつてこうしたかつただろうさ！だけどお前が駄々をこねたせいで”上官命令”で出撃させる事になつたんだぞ!!」

例のポーズをするブライト。

「僕だつて……まさか、本当に出るなんて……」

二人の会話をコール音が遮る。

「ブライト大変よ！ガンダムがやられそうよ！」

「なにい！」「えつ！」

一瞬の沈黙が入り、二人に嫌な汗が流れる。

「……お前のせいでレイ大尉が死んだら、お前をホワイトベースから放り投げてやるからな！！」

「やれるもんなら……やつてみろ！」

「二人ともケンカは止めて！今はそれどころじゃないのよ！」

セイラが仲裁に入るが、とてもじやないが落ち着く様子はない。そこにオスカーからの報告が入る。

「M Sが後退！その他ジオンの部隊も撤退を始めました！」

「ハア……ハア……そうか……」

「……」

セイラは安堵の表情を、ブライトは少しだけ頬が弛んだ。アムロは安心しつつも浮かない顔をしている。

「……一人とも落ち着いたかしら？とりあえずこれで一安心ね。後でレイ大尉を迎えるよう」

セイラは上手くその場をまとめて通信を切った。ブライトは鼻を鳴らしながら部屋を出ていき、その後にアムロものそのそと出していくのであった。

ジオンはドップ3機、マゼラアタック1輛の損害で撤退をした。一方ホワイトベースは右エンジンのブローで出力が低下と後方ミサイルが無くなつた。M Sはガントンクの左キャタピラの破損とガンダムの頭部、左腕関節の破壊とかなりの痛手を被う事になつた。

お互に緊張感が高まりつつある中、三日後の決戦は刻一刻と迫つてゐるのであつた。

### 第31話 父親と息子

宇宙世紀0079年10月1日午後6時、ホワイトベースは、ガルマが身を引いた後にミデアからの補給を受けていた。リード中尉その他サラミス乗組員、避難民の病人35名を受け入れた。

「残りの避難民はまた後日の補給で受け入れをします」

「ありがとうございます、マチルダ中尉」

ブライトが敬礼をする相手は、赤毛で坊主頭のうら若き女性士官、マチルダ・アジャン中尉だ。敬礼を解き、マチルダが話を切り出す。

「よくもまあサイド7からここまで来れたものだと、レビル将軍も大層驚いていました。ブライト少尉もさぞ大変だったでしょう」

「ええ、何せ正規兵ほほとんど残つて居ませんでしたから……」

「ここでふと、マチルダ中尉の話に違和感を持つ。

「……ちよつと待つて下さい。マチルダ中尉は私の事をブライト少尉と呼びませんでし  
た？」

「ええ、そう呼びましたが」

「少尉つて、私はまだ軍歴6ヶ月の士官候補生のはずですが？」

「上層部は跳躍昇進の措置を採られて、今月からブライト候補生は少尉に昇進しました。また、ホワイトベースも、連邦軍の正式な部隊として認められました。補給が来たのも、正式な部隊として扱うという本部の考え方として受け取って下さい。”ジオンに兵なし”とレビル将軍が唱えましたが、連邦もまた、人手不足に直面しているのです……」自分の知らない所で話が進められて、いつの間にか少尉になっていた事をここで初めて知ったブライト。拳に力が入ったが、これも軍人の定めとして諦めるしかなかつた。

そこにテムがやつてきた。

「貴方がガンダムの開発者の？」

「ええ、テム・レイ技術大尉です。よろしく」

お互に握手をする。その光景に、ブライトは少し目を逸らした。

「ああ、そうだ。忘れないうちに……」

テムはそう言いながら、右手に持つていたオレンジ色の小さなボックスをマチルダに渡した。

「RX-78-1の戦闘データです。お願ひしますよ」

「ありがとうございます。この戦闘データは、責任をもつてジャブローまで持ち帰りま

す

「ああ、それと……」

テムはマチルダに耳打ちをした。ブライトもその内容が気になつたが、こちらまで聴こえる程の声ではなかつた。気にはなつたが詮索する程でもない、と思いつた目を逸らした。

「わかりました。レイ大尉の伝言は、レビル将軍にしつかりとお伝えします」

マチルダがテムのやり取りが終わつた後、ホワイトベースの方から視線を感じた。そこには白スースを着た少年、アムロがこちらを見ていた。

「あら、あなたがガンダムのパイロット？」

「は、はい！」

「話がしたいわ、こちらに来てもらえるかしら」

アムロが少し嬉しげにしながら小走りで来る。

「あなたの名前は？」

「あ、アムロ・レイです……」

「アムロ・レイ……レイつてことは、もしかして？」

「ええ、私の息子です」

少し照れ臭そうにするアムロにマチルダは質問をかけた。

「お父さんに頼まれてガンダムに乗ったのかしら？」

「い、いえ！ただ、その……サイド7にジオンが来て避難民としてホワイトベースに乗り込んで、そのあと成り行きで乗ることになつたんです……」

「成り行きで乗つて、シャアの追撃を3回も追い返したの？」

「いえ！あの、僕はただ、機械弄りが好きなだけで……MSの動かし方も最近になつて分かつてきただけなんです……」

「ふふつ。もしかしたらあなた、エスパーかもしれないわね」

「えつ……エスパー？」

二人に、つかの間の刻が流れる。アムロは初めて出会う大人の女性にときめき、マチルダはエスパーめいた活躍をする少年に興味を持つ。その光景を目の当たりにした父親はそつと、ホワイトベースに戻るのであつた。

そして補給が終わり、ホワイトベースは再び空へと戻つた。補給中に修理も行い、工ジンの調子も戻りつつある。心もとなかった弾薬や部品も補充され、食糧も整つた。

避難民を含めたホワイトベース乗務員の心を潤した一時であつた。

「マチルダさん、凄い人気だつたなあ」

「アムロ、写真は貰えたか？12枚しか印刷出来なかつたと聞いたが」

「うん……何とか貰えたよ」

マチルダの補給部隊が帰る前に、ホワイトベースクルーと一緒に記念撮影を行つた。来たのはマチルダの噂を聞き付けた男子ばかりだつたが。なんとなく嬉しそうな声で話す息子に、父親も少し嬉しかつた。

そして父親と息子が居る場所は独居房であつた。

「アムロ、貴様は出撃拒否の命令違反で禁固刑に処す。独居房で頭を冷やしてこい」

補給が終わり、空へと戻つた直後だつた。

アムロは若干、嫌な顔をしたが何も言わなかつた。

「けつ、自業自得だな」

カイが毒を吐く。すぐさまリュウが睨みを効かせ、カイはだんまりとする。他のク

ルーは自分の仕事をしてゐるか、声を掛けられず黙つてアムロを見ている。フラウだけは気に掛けている様子だった。

「ジョブ・ジョン！ アムロを独居房につれて行け」  
「はい」

ジョブに連れられて、とぼとぼと歩きかけたその時

「ブライト艦長、私も独居房に入れて貰えないだろうか？」  
「れ、レイ大尉？」

いきなりそんな事を言われたので、ブライトは面を食らつてしまつた。

「私は職権を濫用し、艦長の命令を上官命令としてはね除け、無断でガンダムに乗つて出撃。現場の兵士や指揮系統を混乱させ、ガンダムは危うく大破するところだつた。……理由としては、十分だと思うがね」

「レイ大尉……」

みんなの視線が二人に向く。ブライトは少し考えた上で

「ジョブ、レイ大尉も独居房へ」

「い、いいんですか？」

「本人が志願した事だ。何より、はね除ける理由が無い。よつて、テム・レイ大尉に独居房入りを命ず。罪状は職権濫用と無断出撃。……よろしいですね？」

「それでいい」

「こうして二人はジョブに連れられて独居房へと入つていったのだった。

「こうやつて、アムロと話すのは何年ぶりになるかな……」

「どうだろう……もう分かんないや」

ぎこちない会話が続く。外は暗くなり夜になつてゐたが、独居房には窓が無いので二人には分からなかつた。

「そういえば父さん、何で僕の代わりに出撃したの？」

息子からの質問は想定内だつたので、躊躇わざに答えた。

「成り行きでこうなつたとはい、アムロがガンダムに乗ることになつたのは私の責任だからな。親としても、開発者としても、何とか出来まいかと意気込んで乗つたはいいが……ダメダメだつたな」

「そんな事……ないよ。だつて、ちゃんとザクと戦つていたじゃないか」

「でもガンダムの頭を吹つ飛ばされたけどな」

父親の自虐にアムロは黙つてしまつた。

「……すまなかつた。父さん、少し意地悪だつたかな？」

「いいよ、別に……」

相変わらずのぎこちない会話だつたが、二人とも不満ではない。久々の親子の会話は意味があつたと思う父と、父親の行動力にビックリしたが、久々に話せて少し嬉しかつた息子。二人とも良い雰囲気で良かつたと、思いながら出てくるリュウ・ホセイが告げる。

「さあ二人とも飯の時間だ」

## 第32話 ニューヨークにて

U.C. 0079. 10月4日 午後1時30分  
ガルマ暗殺の日

こんにちは皆さん、私は今ニューヨーク行きのガウに乗り込んでいます。何故かは知らないです。シャアが「お前も一緒にこい」と言われたので乗つてるだけです。何かイベント合つたつけ……？

あつイセリナ・エツシエンバッハ、イセリナ・エツシエンバッハと会いに行くんだつけ？もうそんな時間が進んだのか……いや？まだここまでしか進んでないのか？？アニメ的にはまだ第10話の前半だもんな。

(作者) でもこの作品は一年経とうとしてるけどね(○)。

……つて、ちょっと待て!!!

今日戦闘ぞ？今日戦闘ぞ？パーティーに参加してるけど今日戦闘があるのにどんな余裕があつて……

あ、そつか。兵士に耳打ちされるまで、近づいて来てるの解らないんだつけ？そうだよな、それなら仕方ない。ましてや今日、自分が死ぬなんて思わないだろうしなあ。俺も前世でダンプカーが突つ込んで来るとは思わなかつたし。

ニューヨークの大半のビルは崩れており、瓦礫の山と化していた。しかし、パティー会場であるニューヨーク前市長エツシエンバツハ氏のお屋敷は、夕日が雲に隠れて薄暗い空の中きらびやかな雰囲気を持つていた。これが特権階級つてやつである。

滑走路付きのお屋敷に着陸して、ぞろぞろとガウから降りてくる人達。無論ガルマが一番に降り、待つっていた前市長に迎えられる。握手をしてから案内され、屋敷へと向かう。「我々もそろそろ」と、シャア中佐の合図でパーティー参列者が動き出す。

しかし、何で俺がパティーに参加出来たんだろう？他の参加者数名居るけど、最低でも階級大尉だぞ？とりあえず直属の上司にでも意見を聞いてみるか。

「中佐、どうして私みたいなばつと出の曹長がパーティーなんかに参加出来るんですかね？」

「そうか、ジーンには伝えてなかつたな。この前の戦闘でガンダムの頭を吹つ飛ばした

だろう。あれがえらく気に入られて、パーティーで君の事を紹介したいそうだ  
あーハイ、つまりパーティーに持つてかかる”お人形”ってな訳ですね。

「まあそう気を背負うな。ガルマに呼ばれたら挨拶しに行けばいいだけだ。後は楽し  
め」

20時に始まつたパーティーは賑やかに、そしてきらびやかに進んでいつた。美味しい食事に生演奏のクラシック音楽、そして特権階級人の談笑。一瞬、戦争中だということを忘れる程、明るい雰囲気に包まれた。人の輪から離れ、カウンターでゆっくりしていたらシアア中佐が横に来た。

「どうだジーン、地球でのパーティーは」

「サイド3と何ら変わりはありませんね」

「ははは、言うようになつたな」

サイド3でパーテイーした記憶は無いが、賑やかならどこでやつても同じだろ。と思う小市民のジーン（転生）であつた。そこに

「ジーン曹長、 ちょっといいかな」

ガルマからのお呼びだしだ。さて、お人形になつてくるとするか……  
ガルマに案内され、一際賑わっているテーブルに立ち寄る。そこには（多分）エツシエ  
ンバツハ前市長（と思われる人物）が居た。

「皆さんご紹介しましょう。我が軍期待のエース、ジーン曹長です」

どうも、と挨拶すると

「おお！」君があの！」「へえ！」

と良い反応が帰ってきた。しかし前市長だけはだんまりとしていた。

「彼は地球に降りる前に連邦の新型MSを3機、サラミス級を2隻を撃破し、更に2日前  
の戦闘では、あのガンダムの頭を吹つ飛ばした凄腕の持ち主だ！」

「おお！」「君があの！」「へえ！」

『凄腕の持ち主だ！』なんて大げさに言つてるけど、ガンダムには逃げられましたから  
ね。

良い感じにオモチャにされたところで司会からアナウンスが入る。

「皆さまご注目下さい、イセリナ・エツシエンバツハ様のお見えでございます」

原作通りの登場をしてきたイセリナは優雅に階段を降りてくる。ガルマはどんな顔

をしているのだろうと、ふと横を見たが姿はなく、いつの間にか階段下でイセリナの手を握っていた。仕方ない、あとは勝手にラブロマンスを始めるだろうから私はシャアの居るバー・カウンターに戻った。

「いやあ、戦場でラブロマンスとは、大層ヨユーッてものがおありで」

「……まああれでも外交政策の一つと考えれば、と言わせてくれ」

肩をすくませるシャア。多分ここにいるジオン兵士全員が「戦場でラブロマンスとは……」と思っているに違いない。と、そこに小走りでガルマの元へ向かう兵士を見かけた。そういうえばガルマがシャアに愚痴を言うシーンがないけど、俺を紹介するイベントに変わったのかな?しかし、ここでホワイトベースがS3ポイントに入ったとの報告がされるのか。ところでS3ポイントってどこらへんなんだろうね。

報告しに来た兵士は他の兵士にも伝え、そそくさと小走りしている。そののちにガルマがカウンターへやつてくる。

「ジャア、木馬が来るぞ。準備してくれ」

「ああ、そのつもりさ」

ガウヘ向かうと既に離陸準備がされていた。急いで乗り込むとシャアは通路に設置してある簡易的な補助席に座つていた。

「早くジーンも座れ!でないと吹っ飛ばされるぞ!」

いや、そんな事言われてもガウの補助席なんて使つた事（というか存在すら知ら）な  
いからどうやつて出せばいいのやら……

えーと、取手を手前に引き出して次にうわっ、ちょまでぎやあああああああ!!!  
補助席を取り出すのに戸惑つて、ガウの発進に間に合わなかつた。ジーン（転生）は  
強烈なGを受けてそのまま通路を転がり続け、曲がり角の壁に激突する。なんでこんな  
目にあうのよ……

かくして、決戦の舞台であるシアトルに向かう一行。ジーン（転生）はガルマを護る  
事が出来るのか。はたまたシャアに暗殺を許してしまうのか。

そこには意外な結末が待つてゐる事を二人はまだ知るよしも無かつた……

### 第33話 ガルマ散る「散らせない編」

U.C. 0079 10月4日 17時23分

ガルマ暗殺の日

アメリカ合衆国 ワシントン州 シアトル地区

いよいよだ。この二週間ちょっとがとても長かった。何故か一年近く掛かっている  
ような気がするが。作者「クシユン！」

それはともかく……

ガルマ暗殺をどう回避するかが問題だ。少なくとも、持ち前のビームライフルでホワ  
イトベースを撃破しなかつた以上、ガルマをぬくぬくと殺させてはたまらない。シャア  
の動きを予測しやすくするために、わざと野放し同然で戦闘で手を抜いたのだから。  
まあ手を抜いた結果、クラウンと一緒に燃え尽きそうになつたが。

ぶつちやけシャアが死ねば万事解決なのだが、まだガンダムに殺られるような腕前の  
差はないからねえ。かといって俺が天誅を下せば、ルウム戦役のヒーローを殺した殺人  
者で銃殺刑だ。ああ！シャアが死ねば宇宙世紀は安泰なのに！アムロはえげつない程

強いけど、シャアが絡まなきやそこまで厄介な相手にならないはず。うーむ、ガルマの暗殺回避の方が簡単そうだけど、妙案が浮かばない……

「ジーンもうすぐ出撃だ、MSの調子を見てこい」

パイロット待機室にシャアが入ってきた。おや、もうそんな時間か。考え方をしていると時間の経過があつという間に過ぎるな。

「了解です」

「もうじき夜になるから夜戦装備を整えろ。あと、予備武装でバズーカを持つていけるか?」

「夜戦装備とザクバズーカ、了解しました」

予備武装を要求するなんて珍しいな。一応ビームライフルは16発でバズーカよりも多いし、バズーカより取り回しが良いからあんまり必要が無いのよね。……まさか何か企んでいるとか?まあ上官命令だし、たまには他の武器を使わないと腕が鈍るから丁度いいと考えよう。

格納庫へ向かうと二機のMSが用意されていた。無論、俺たちのザクだ。武装ラックと護衛で飛んでいるドップを除けば格納庫には何もない。俺の目の前にある武装ラックにはザクマシンガンが備わっていた。

でけーなあ……生身の人間から見るとザクマシンガンでさえデカい。10メートル  
ぐらいはあるのか？ MS目線だとマシンガンサイズだけど、人間目線だとただの大砲や  
な。隣のラツクは確かバズーカだつたよな……

左隣の武装ラツクはジーン（転生）の思つた通り、ザクバズーカが備わつていた。し  
かし、そこに”微かな違和感”を感じていた。

「なんか……バズーカの形状が絶妙に違う気がするな……」

「ジーンさん、良く気がつきましたね」

後ろから声を掛けたのはセキヤ技術少佐だつた。

「せ、セキヤさん！……バズーカ、何か変わつたんですか？」

「あのバズーカは最近配備された改良後期型ザクバズーカですよ」

「か、改良後期型??」

「はい！ 説明しますね」（ニカツ）

セキヤ・シモノ技術少佐の教えて！ MS解説～！

セキヤ ジーンさんはザクバズーカには大きく分けて” 初期型”

” 改良型”

”

改良後期型” の三種類があるのはご存知ですか？

ジーン（転生） いえ、マツタク……（そんなにあるのかよ!）

セキヤ ではこの主要な3つのバズーカをご紹介しましよう！

初期型ザクバズーカ

セキヤ（以降セ） 開戦初期に使用されたザクバズーカです。一般人の「バズーカ」と言えばこんな感じ」 っていう想像通りの形状をしていますね。

ジーン（転生）（以降ジ）（外見は……いわゆる原作アニメやガンプラでよく観る”ノーマルなザクバズーカ” つてやつだね）

セ 装填数は1発の单発式です。

ジ え？ 1発しか入れられないんですか？

セ ええ。なにせ”核弾頭” を使用していますから……

ジ あつ：（察し）

セ その後、南極条約によつて核兵器等の使用が禁止されました。そのため、新たに280mmの通常弾頭を開発。装填数が4発に増えました。

ジ えつ、えつ。ちょっと待つて下さい。元々单発式なのに、何処に4発を入れるスペースがあるんですか？

セ バズーカの後ろにバックファイアを逃す4つのノズルみたいのがありますよ

ジ　　はい。

セ　　あのノズルに1発。計4発入っています。

ジ

?????????

セ　　ジーンさん、あのザクバズーカは元々核兵器を運用するための物だつた。そこまでいいですね？

(ジーンが頷く)

なので、なるべく大きいサイズでなければいけません。いくら核兵器とはいえ、小さく作つては広大な宇宙では効果がありません。なのでジオン軍は来るべき決戦に備えて、艦隊を面で殲滅するための680mm时限式核弾頭を開発、そして残存勢力を各個撃破するための680mm通常弾頭を同時に開発したのです。

ジ　　ということは、初期型ザクバズーカの内径は680mmもある、ってことですか？

セ　　そうなんです。なので例えばバズーカを2発同時に発射したとしても計算上は干渉はしないのです。もはやバズーカというより、ロケットランチャーフて言つた方が良いのかもしませんね。

ジ　　(そういうえば、MGのザクを組み立てた際にザクバズーカの内径を計つた事ある

けど……確か6・8mmだったような気がする。あの時「全然違うやんけ！」ってセルフツッコミをした記憶が……)

セ それじゃあ、次の解説に行きましょう。

### 改良型ザクバズーカ

セ この改良型ザクバズーカは主に陸戦用ザク、MS-06Jと同時に開発されたものです。地球侵攻作戦時に判明した初期型ザクバズーカの欠点を補う為に開発されました。

ジ どんな欠点があつたんですか？

セ 取り回しが不便という事です。元々宇宙空間での核兵器運用を想定して作られた物なので、地上での取り回しは想定外だつたのです。

ジ 元々地球への侵略は予定に無かつたですもんね。

セ 地球の重力に耐えられず、バズーカを持つザクの右腕の故障が多発したそうです。

ジ （重い荷物を持って筋肉痛になつたオカンみたいだな……）

セ そこで口径の縮小をして小型化し、軽量を計つたのです。これにより重量が約23%も削減出来たのです。

ジ　おお、それは凄い。

セ　更に「弾数をもつと多くしてくれ」という要望に応え、弾数を5発に増加。「整備性も良くしてくれ」という要望で、バナナ型弾装を使用することによりバズーカのメンテナンス性をアップすることに成功しました。

ジ　（バナナ型弾倉つて事は、俺が転生した後にシミュレータで使ったバズーカか）しかし弾数が増えたのは1発だけかあ……

セ　実はその増えた1発のせいでトンでもない不良を抱える事になつたのです。

ジ　へ？

セ　軽量化した話は覚えてますね？

（ジーンが頷く）

その軽量化と相まつて装填不良、いわゆるJAMが発生してしまつたのですよ。

ジ　それまたどうして？

セ　バズーカの軽量化による耐久性の低下、バナナ型弾倉による特殊な装填方法、バズーカ弾5発の重み……これらが運悪く重なつた結果が装填不良という訳です。あとついでにカウンターウエイトが後方に寄り過ぎているせいで、撃つた時にバランスが崩れて命中精度に難が出ています。

ジ　それじゃ結局ダメやんけ：（そういうやバズーカ使つたのつて宇宙空間だつたよな

：だからJAMらなかつたのか。というかシミュレータならそこまで配慮しないのかな…）

（ここでふと、気になつた事がある。

ちよつと待つて下さいセキヤさん。JAMるつて事は、もしかして…：

セ ……はい、暴発事故もあります。

（ヤツパリネー）

暴発事故が今までに32件、この内の4件はMSに誘爆しています。

ジ もはや不良品じやねーか!!!

セ ……という訳で改良後期型の説明に移りましょう。

改良後期型ザクバズーカ

セ これが今、ガウのバズーカラックに収納されているバズーカです。配備開始は10月からなので、出来立てホヤホヤの新品ですよ。

ジ ヘえ～そうなんだ。

セ 耐久性を向上するために砲身厚を少し増やしたので重量は改良型よりも約8%増加していますが、まだ初期型よりもだいぶ軽量化はされています。更にバナナ型弾倉を廃止し、装填不良が起こりにくい長方形の弾倉を使用しています。

ジ やつと学んだのか。

セ 装填数は3発で…

ジ ちょっと待つて下さい、装填数減つてるじゃないですか！

セ 安心して下さい。この弾倉は腰部の他に、ザクの右肩シールドにもマウントする事が出来るんですよ！

ジ はあ。

セ なのでやろうと思えば右肩シールドに8つ、左右の腰部に4つ、バズーカに1つで合計39発も持ち運び出来る様になったのです！

ジ それって右腕の負担は？

セ あくまでも”最大積載量”なので考慮していませんけどね！

(ヤツ・パリネー)

……まあ、それはともかく。一回の装填数が少ないので、口径を280mmから320mmに変えて威力をUPさせましたし、この改良後期型はザクバズーカの最高傑作と言つても過言ではないですよ。

ジ なんかサラリと”口径が320mmになつた”と聞こえた気が……

セ はい、そう言いましたが……

ジ もしかして、3つのバズーカつて互換性は……

セ 無いに決まつて いるじゃないですか。

ジ (そんな笑顔で 言われても なあ)

ジ (ちなみに、この改良後期型はジ・オリジンのザクバズーカA2型そのまんまの見  
た目やな)

セ 他にもザクIが使つていた”最初期型”や、水中用ザクの”水中試験型”、ドム  
が使用しているロケットモータ一点火式……あれはちょっと違うか。おつと、もうこん  
な時間。ジーンさん、もう少しで出撃です。MSの性能を100%引き出せる様に念入  
りに整備してあるので、おもいつきり暴れまわつても大丈夫ですからね。

ジ ありがとうございます！

ジ (総評するとすれば、地球降下作戦のせいで滅茶苦茶めんどくさくなつてゐるな  
……互換性がないし、改良後期型のせいでも、しつちやかめつちやかになりそう。な  
んだかジオンはやつぱり勝てなさそうな気がしてきた……)

「ジーン出撃だ！行くぞ！」

シヤア中佐が声を掛け、MSに乗り込む。それに続いて俺も自分のMSに乗り込む。胸部から下がつて乗り込み用のタラップに足を掛け、上昇する。下からセキヤさんが手を振つてくれてるので、それを敬礼で返してコツクピットへ乗り込んだ。

シヤアからは離れてはいけない。特に今日はミノフスキ」粒子散布濃度が濃く、通信対象から500メートル以上離れると何言つてるか分からん状態になる。でも、ちゃつちやとホワイトベースをぶつ潰しておけばいらん努力だつたよな……

「勝利の栄光を君に！」

シヤアが原作通りの台詞を決めたところで降下開始。とにかく、ガルマ暗殺を食い止めつつ生き残らなければならない。何でこんな面倒な事に巻き込まれたんだ? どうせ転生するならジヨニー・ライデンになりたかつたな。シン・マツナガでも良いかもしけん。あ、アナベルちゃんは止めて下さい4年後口クな目に合わないので。(キツパリ)

薄暗い、というか普通に夜戦と言つてもおかしくないぐらいに辺りが暗い。時刻はまだ18時過ぎだが、厚い雲が太陽を遮つてている。ザクのカメラを夜戦用に切り替える。画面が若干赤みが掛かるが見えないよりはマシである。

「よし、これより木馬の搜索を開始する。ガンダムも出でているはずだ、気を付けろ」

「了解です」

搜索とは言つたものの、ホワイトベースのいる雨天野球場からはかなり離れている。

おおよそ4kmといったところか。そこそこ歩かなきやいけない上に、上官と別行動は基本的にご法度だ。

と、ここでアラームが鳴る。熱源探知が反応し、モニターの情報欄にはガンダムの表記が出ている。はえーよホセ！しかし、まだこちらには気づいていないようだ。「向こうからやつて来るとは、我々も運が良いな。ジーン、私が良いと言うまで物音立てるなよ」

「分かつてますって」

シヤアの指示でガンダムを挟み撃ちにする戦法を取った。ガンダムはまだシヤアを探しているらしく、キヨロキヨロとゆっくり動き回っている。（でも確かガンダムは“囮”だつたよな……？）にしてもガンダム討つのにザクII2機つて、あり得んよな。普通。一応温存していたザクII15機を投入してホワイトベースの捜索をしているらしきけど……そんなに温存していたのか。っていうか作戦変更していなければ、そのザク達はガンダム達の餌食に……二つの意味で恐ろしいな。

集中しよう、たつた一機でガンダムをぶつ叩くのはほぼ無理に近いがやらなきゃアカン。とりあえず一撃必殺のビームライフルをお見舞してやれば……

ガンダムが近づいてくる。自分から半径300メートル位のところまで熱源探知で分かる。廃ビルが崩れ、丁度良くガンダムの進行方向を捉える場所構える事ができた。

後はシャアの動きも良く見ておかないと。多分シャアはまだホワイトベースが何処に隠れているかまでは把握出来ていらないはずだ。何故なら、原作ではガンダムを発見した後にジャンプしてホワイトベースを見つけたが、まだ行っていない。地図をこの世界のシアトルにはちゃんと雨天野球場がある。そして自分達が居る場所からおおよそ4km離れてよく見えない（存在感は結構あるけど）ので、確認するまでは動かないと思いたい。

手に汗を握るとはまさにこういう場面だろう。”もしかしたら”のチャンスがやつて来たのだ。精密に狙撃出来るように両手持ちで構え、瓦礫の上に立ち密かにその時を待っていた。ここで”もしかしたら”を実現すれば、ガルマ暗殺を阻止出来る……そう信じるしかない。気をつけなければな、ここは瓦礫が多いから物音を立てやすい。原作ではそれでガンダムがザクに見つかってしまった（ガラガラ）からな。そうそうこんな感じに……

気づいた時には外の風景が若干斜めになっていた。ついでに言うと黒いガンダムがハイパー・バズーカを構えてこちらを向いていた。  
「こ、こんなところに居たのか！」

(やつちまつたあああああ!!!!)

「ええい！ジーンの奴、しくじったか！」

バズーカ弾が左脇腹を掠め、後ろにあつたビルを爆破し、粉々にした。殺られてたまるかと三発程ライフルを撃つたが、どれもガンダムには当たらなかつた。シャアが助太刀に入り、バズーカを足元にお見舞するが、あんまり効いてない気がする。一応新しいバズーカで威力はアップしているはずなのが……

ガンダムとシャアザクはどちらも蝶のように舞い、蜂のように刺す一進一退の攻防を広げてゐる。もうここまで発展してしまふと、むやみに攻撃出来なくなる。フレンドリーファイヤーはキシリシアなら許してくれそうだが、ドズルは駄目だろうなあ。だつて私情でガルマの仇討ち部隊編成する程だし。「お前のせいだシャアが死んだ！」と言われて即銃殺やろなあ。

「何をやつてるんだジーン！貴様も戦闘に参加せんか！」

「何つて、フレンドリーファイヤーでもしたら、どうするんですか！一発でアウトですよ！」

「貴様はそんなへマをする奴……ではないはずだ！」

なぜ一瞬言葉を飲んだ？

「中佐、ジャンプしたらライフルで撃ちますからね！」

「ああ分かつた！」

つばせり合いから一瞬、シャアザクが後方へジャンプする。それを追いかけるガンダムをこれでもか！と言わんばかりに撃つた。しかし緊張とプレッシャーで狙いが定まらず七発も撃つて左肩を小破させただけだつた。

「焦るなジーン！チャンスはまだある！よく狙つて撃て！」

「す、すいませエん！」

誰か、誰か助けてくれないだろうか……

もう限界に近い。頭が真っ白になりかけている。

「ジーン！もう一度行くぞ！」

「了解！」

バズーカを撃ちながら後方へジャンプするシャアザク。今度は冷静になつて撃とうとしたが、私はアムロはどういう奴なのかを忘れていた。

「今度はさせるか！」

とシャアを追いかける前にガンダムシールドを投げつけてきた。うわあ！これがガンダム名物のシールド投げかあ！！回避したが少し遅かつた。右腕を切断されてしまつたのだ。ただのシールドが何故ここまで切れ味を出しているかはホントに不明であるが、大ピンチである事は解つていた。今回は予備武装を持ってきて正解だつた。すぐ

さまバズーカを左手に持ち、三発撃ち切ったがジャンプして避けられてしまった。

……つてちょっと待て反転しながらこつちに来るなああああああああああああ!!!!

「てりやああ！」

「ヤメロオオオオオオオオ!!!」

思わずザクバズーカ（改良後期型）を投げつけてバックステップを踏む。ビームサー  
ベルの犠牲になつたバズーカの代わりに何とか助かつた……けど、どうしよう。武器が  
ヒートホークしかなくなつてしまつた……

このままじや殺られる！もう誰でも良いから助けにきれくれえ！お願ひだから助け  
てえ!!!

「助太刀に来たぞお!!!」

友軍が助けに来てくれた……

絶望のどん底から希望の光が射してきた。もしかしたら一般兵士じゃすぐに殺られ  
るかもしれないけど、一瞬でも気を引いてくれたら後方に下がれる。緊張とプレッ  
シャーが無くなり、生きる活力とやる気が湧いてきた。ザクがあれよあれよと増えて1

O機も来てくれた。え?こんなに来て捜索は大丈夫なの?

先頭に立つザクは多分、隊長機だな。色は暗くてよく解らないけどアンテナブレードがあるし、バルカン砲が頭に4門付いてるし、右手に持つてたヒートホークはちょっと大型で……

へ?頭部にバルカン砲??ま、まさか!??!?

「ええい連邦の黒い悪魔め……これ以上好き勝手にはさせんぞ! 落ちろツ! 落ちろオオ!

!」

(。口。) ?!  
(。口。) ?!

モニターの情報欄には「M S — 0 6 F S」の文字がくつきりと写しだされていた。

## 第34話 ガルマ散る [散りに来ちゃった編]

「勝利の栄光を君に！」

シャアのキザな台詞に微笑みを感じながら、二機のザクがガウから降下していくのをガルマは見届けた。

「ほ、本当に出撃なさるのですか…？」

ガルマの副官ダロタは心配そうに言う。

「ああ勿論だ。この為にわざわざ私のザクを隠した。シャアに心配されると厄介だからな」

「しかしどうして…貴方は仮にも地球方面軍の指揮者なのですよ？ここは後方でしつかりと構えてもらつて…」

「ええい！シャアだって中佐のくせに前線で戦つているではないか！」

「し、シャア中佐は特別編成の遊撃部隊なので、ガルマ様とは訳が違うのですよ！」

ああもう駄目だ。こうなつてしまつては、ガルマ様はテコでも動かないだろう。いくら地球方面軍の全権はキシリシア様が握つてゐるとはいへ、北米での活動は決して無駄ではないのに。何故そこまでしてホワイトベースの撃破に執着するか…

ダロタは大きなため息を吐きながら

「解りました、もう私は止めません。しかし、木馬捜索に当たつているザクを、何機か護衛に付ける事が条件です」

「む……やむを得んな。私が声を掛けよう。それでいいな?」

「はい……」

隠していたガルマザクの立ち上げが終わり、その時が来てしまった。ガルマは自分のザクへ乗り込み、ダロタは胃が痛いのを我慢しながら敬礼で見送った。

「ガルマ、出撃!」

とうとうガルマのザクがガウから降下していった。あとは上官の帰還を祈るしかなくなつてしまつた。今日から胃薬の量を倍にしようと決断したダロタであつた。

これが30分前の出来事である。

ザクを一個中隊引き連れて我々の目の前に来たのは、紛れもないMS—06FS。つまりガルマ・ザビ大佐本人である。シャアも驚きを隠せていないのが通信でも分かる。「きつ、キサ…ガルマ！ 何故ここに居る？！」

「何故つて、ガンダムを討ちに来たんだ！」

「ガルマ！ 貴様は前線の指揮者だぞ！ 後方に下がつて指揮するのが仕事だろうに！」  
「それを言うならばシャアこそ、ガンダムを追いかけている時は、ドレン中尉にファルメルを任せて、自分だつて前線に狩り出しているではないか！」

「うぐつ！ そ、それは話の規模が…」

意外や意外、ガルマの指摘にシャアがたじろいでいる。まあ五十歩百歩だけど。

ガンダムもあまりの光景にたじろいでいる。いきなり10機のザクが出てくりや、驚かない方がおかしいもんな。

「ええい！ こうなつたら全力でガンダムを倒すぞジーン！」

「わ、分かりました！」

二手三手先を読むのが得意なシャアの弱点。それは想定外の出来事に対処することである。いわゆるやぶ蛇というやつだ。かくいう俺もガルマがザクに乗つて降りてくるとは思わなんだ。予測しろつて言う方がおかしい。

でもヒートホーク一本でどうやって倒せと？

「者共撃てッ！撃ちまくれエ!!」

横からマシンガンとバズーカの雨あられが飛んで来る。ちょっと待てや！俺を巻き込むんじやない！！

何とか俺は避けたが、ガンダムはもうに食らってしまう。あまりの衝撃にぶつ倒れたが、これだけ攻撃を食らつてもカロリーゼロ♥？もといダメージゼロなんだから末恐ろしい。

やはりダメージは受けてないらしく、すぐさまに立ち上がったガンダム。おっ、来るか？と身構えたが、バックステップを駆使して逃げてしまつた。分かるぞアムロ少年。いくらガンダムとはいえ、同時に12機のザクを相手にするのは分が悪すぎるという考えをして当然だ。それにガンダムはただの囮だし。

「ガルマ！ガンダムを見つけたら報告をするつて言つただろ！何故待てない！」

「君が『シアトルでホワイトベースを叩き潰そう』つて提案したじやないか！」

「あれは、ホワイトベースを叩き潰すのであつて、ガンダムを叩き潰す、訳ではないぞ！」

「ガンダムを倒してしまえば、目標の五割は達成するんだ！」

お二人さん、コードネームの木馬じやなくてホワイトベースつて呼んじやつてるよ。まあ、気になったところで差ほど意味は無いだろうけど。

「ガルマ、何故そんなに焦っているんだ？もしや、あの彼女の為に戦果を上げようと？」  
「そつ、そんなわけ……」

「ガルマ！戦場にラブロマンスを持ち込むなんぞ、愚の骨頂だぞ！それで前線に異常を招いたらどうするつもりだ！」

お前が言うか―――――っ!!!

二人が口喧嘩している間にガンダムが遠くに逃げ……てない。そうか、ガンダムは囮だつたよな（二回目）。中々来ないから警戒しながらこちらをチラチラ見ている。ガルマについて来たザク達も命令が無いからオロオロしている。せめて移動しながら喧嘩してくれませんか？

「あの、お二人共、そろそろ作戦に戻つて……」  
「分かつてる！！」

…もうお前ら結婚しろよ。

うーむ、皆でガンダムを追いかけているが一向に倒せる気配がしない。古の腐女子御

用達のガルマとシャアがしょーもない喧嘩している内に、ギリギリ攻撃が当たらない距離まで離されたからな。ガンダムの歩行速度自体はザクと同程度なんだけど、いかんせんスラスター推力が桁違いに高いのよ。地上で追い付くのはシャアザクでも厳しいと思う。でもガンダムは囮だからあえてザクが追い付けるスピードで移動してくれるから、離される事はない。

……のは良いことだけど、ホワイトベースからはかなり離れてしまった。ガルマよ、ぶつつけ本番で着任したブライトに戦術で負けてどうする。このまま隙を突かれてシアルから脱出されたら、元も子もないぞ。

と、思つていたらガンダムがUターンし始めた。そうか、ガンダムも離れすぎると帰れなくなるもんな。ぴょんぴょん跳ねるガンダムを、ぴょんぴょん跳ねながらザクで追いかけ回す。うーん、攻撃さえこなれば意外と楽しいな、これ。

「見つけたぞ！」

「うわあ、ガルマよいきなり叫ぶな。

「ガルマ、一体何を見つけたんだ？」

「ホワイトベースだ！ ガンダムはホワイトベースへと向かっているのだ！」

「ツー……待てよ、このままだとガンダムに逃げられる事になるな」

「なにツ！ それだけはさせてたまるか！」

「……」

あつヤバい、シャアが機転を利かせて、ガンダムとの戦闘でガルマを見殺しにするつもりだ。ヤバいな、身を呈してもガルマを守らないと……それで死んだら元も子もないけど。

ぴょんぴょん跳ねながら大体元の場所まで戻ってきた。「やっぱり追い付かないなあ」と思つていたらシャアがガンダムの進路を塞ぐように攻撃したので、ぐつと近づいた。ガルマと一個中隊のザク達がガンダムに突撃する中、シャアは殿を勤めるような素振りで後ろからついていった。

「ちゅ、中佐！ ガルマ様をお守りしなくて良いのですか!?」

「ガルマはああ見えて頑固でな。下手に手出しをすると怒るからな」

「そんな事言つて、ガルマ様が斬られたらどうするんですか！」  
「私のクビも斬られるだろうな」

呑気に洒落なんか決めやがつて。お前ガルマ暗殺して、意外と凹んでただろ。  
ともかく、シャアは予定通りにガルマを暗殺するらしい。俺はフォロー出来るよう  
ガルマのすぐ横らへんに陣取つて監視する。いくらなんでもこの状況でシャア自らガ

ルマに手を下す事は無かるう。こんだけザクがいれば、無線で嘘情報流した後の処理が出来ないだろうし。

ザク一個中隊がいい感じにガンダムを包囲してくれたので、ガンダムは逃げにくくなつた。やっぱりMSの動かし方や戦術はMSパイロットの方が分かつてゐる。はいそこ、ガルマもMS乗りと指摘しない。どこでガルマが提案をしてきた。

「ジーン曹長、これからガンダムに攻撃を仕掛けたいのだが……きつかけを作つてくれないか？」

「が、ガルマ様……指揮官なのですから、無茶は」

「ここ）でやらねば、ジオンが滅ぶ！」

貴方が死んでもジオンは滅びますよ？

「あの黒い悪魔を始末しなければ、ジオンは滅びる！だからきつかけを作るんだ曹長！」

「はい了解です……」

大佐から命令されちゃ、断れないな……シャアも黙つてゐるし、何とかせなきやアカンのかあ。というか俺、右腕無いし、武装がヒートホークだけなんですけど。どうしろと？

「ん？……これは……使えるかも」

ソレを手に取った俺はガンダムの気を逸らせる作戦を決行する。ガルマにガンダムの背後を取らせれば、何とかやつづける事も可能かもしれない。今はそれに賭ける他ない。

「ガンダム、勝負じやああ！」

「あ、アイツ：ガンダムシールドを!?」

「でりやああ！」

ザクの左手で持っているのは、少し前にガンダムが武器として投げつけたガンダムシールドだった。投げつけても良し、守つても良しの万能兵器である。シールドを前にしてガンダムに突っ込む。ガンダムはバズーカを使いきつたのでサーベルを持とうとしていたが、反応が遅れてタックルを受けて吹き飛ばされる。

「今です大佐！」

「これでトドメだ！」

ヒートホークを振りかぶりながら走つてくるガルマ専用ザク。立ち上がるガンダムの背後を斬りかかる絶妙な陣取りだつた。

そのはずだつた。

「!?」「なにッ!?」

立ち上がるはずのガンダムはあろうことか、立ち上がらずにそのままバーニアを吹かせ、ガルマザク目指して仰向けのまま突進してきたではないか！ガルマザクは何とか上昇して回避したが、着地に失敗して地面に倒れる。対するガンダムは起き上がりつてビームサーベルを抜いた。

マズイ、形勢逆転してしまった。このままだとランドセルと一緒にコックピットを串刺しにされる。まずいマズイ不味いどうにかしないと！武器はあるじゃないか。

「ええい！一か八かじやあ！」

持っていたガンダムシールドを投げる。が、クラッカーを投げる動作を無理やり出した為に、ガンダムシールドは緩い放物線を描くようにフワア～っと飛んだ。

ガンダムはサッと避けて、ガルマザク目指して走り出した。

時間稼ぎにもならねえ！

武器はヒートホーク一つ。でもこれでガンダムに攻撃すればガルマザクにも当たる

！この状況でどうやってガンダムを退けるか……ッ！

一体…どうすれば……

……発想を逆転せろ

”ガンダムを退ける”のではなく

”ガルマさえ守ればいい”と……

そうだ…ザクなんかでガンダムは倒せつこない。  
アレックス「呼んだ?」マドロック「呼ばれた気が」

ならやることは一つ！

ジーンザクとガンダムとほぼ同時に走り出す。ガルマザクはようやつと立ち上がるモーションを取つて。このままだと本当に串刺しにされてしまう。間に合つてくれ！

ガンダムはビームサーベルを逆手持ちにして突こうとしている。タツクルでガルマザクを吹き飛ばすには少し遅いかも知れない。となれば、アレを試す他ない……

「ガルマ様！失礼！」

「なにッ？ グハア！」

セキヤ技術少佐が入れた新しいモーションの一つ「回し蹴り」を炸裂させた。右足は見事に立ち上がった直後のガルマザクの脇腹に決まり、横へ吹つ飛ばした。代わりにジーンザクの右足が串刺しにされる。それほど刹那なタイミングだった。

回し蹴りの勢い余つて、そのまま半周回つて右足がもげた。そのままバランスを崩してうつ伏せで倒れ込み、死を覚悟した。

ああ、ここで俺は死ぬのか……

いつそのこと、一思いに突き刺してくれ……

.....

あれ？まだ生きてる。

「ジーン！大丈夫か！」

シャアの声が聞こえる。まだ死んでないみたい。

「少佐！私は大丈夫ですか、一体どうなつてているんです？」

「説明するより見た方が早い、立てるか？」

「補助を頼みます」

シャアザクに肩を貸してもらい、指定された方角を見ると、ホワイトベースが飛んでいた。

「ガウが遠くに行つた時を見計らつて飛び立つたようだな。そのうち一機は背後から、

ガンタンクやガンキヤノンに不意打ちされて落ちた。ガルマのガウは追いかける程の燃料が残っていない。残る一機は遠くでやつと旋回し終わつた……という感じだな」「つまり、ガンダムはホワイトベースに戻つた。つてことでいいのでしょうか？」

「そうだな」

どうやらこの状況に痺れを切らしたブライトは、強行策に出て上手く逃げれたようだ。絨毯爆撃のシフトちゃんと敷いとけよ……と思いつながらも、ガルマを生き延びさせる事に成功したのはかなり大きい。これで、このガンダム世界の歴史がどう変わるのか……

ガルマの暗殺を阻止した俺をシャアはどう見るのか、オデッサの戦いはどうなるのか、それよりA-12部隊はこの後どう動くのかすら解らない。

一つだけ解つた事があるとすれば、ガルマの策略はブライト以下だつて事だ。

そんな事を考えながらも、壊れた足でガウへと戻つたジーンであつた。

## 第35話 キヤリフオルニアベースの内情

「こてんぱんにやられましたねえ」

「す、スマセン…」

M S 格納庫でジーン（転生）とセキヤ技術少佐が話していた。ここはキヤリフオルニアベースの本拠地「サンフランシスコ基地」。このサンフランシスコ基地は北米ジョンの本拠地で、その周りをいくつもの中小基地で囲んである地帯の総称が「キヤリフオルニアベース」である。

「直せますかね？」

「直せますよ。直せますけど……」

濁つた言い方に気になつたが、とりあえず聞いてみる。

「一週間ぐらい後になりますかねえ……」

「そんなに時間が掛かるんですか!?」

「あ、いえ、修理自体は一日あれば、なんですけど……少しだけ話が長くなつても?」

俺は無言で頷く。

「まず、ジーンさんのM Sは試作機なのはご存知ですよね?」

確かにあのザクは“Y”MSだから試作機だ。

「この試作機MSはビームライフルの運用を実戦でデータを取つて評価をする。ここまではいいですね？」

コクコク

「その評価の対象に”中破以上の損害が出たら戦闘データを作成し、評価をする事”がドズル中将から指示されているのです」

……いや、そんなの聞いてないんだけど。

「ああ！いやいや！これは搭乗者には言わないようにしていましたので……もし、この事を知つていたらジーンさん、貴方ならどうしますか？」

「多分、慎重に戦うと思います」

「それだと思うような実戦データが取れませんよね？」

「コクコク…？」

「？でも、そんなにこのMSの運用データが必要なんですか？」

「…オフレコでお願いいたしますよ？」

あつ、はい。

「私はジーンさんが持つて帰つたビームライフルを撃ちたくて、必死に解析して、何とか

「ファルメルからエネルギー供給を行つて試射を行いました。その時、近くを漂つたいたサラミス級を的にして、試射をしたのですが…その威力に度肝を抜かれまして！『これは我が軍に必要な物だ!!!』と、鼻血を大量に吹き出しながら思いまして！」

へえ～

「何とか無理やり、言い訳に近い理由をドズル中将に並べて試作機への改造を許可してもらつたのですが……」

「その条件に例のアレが含まれた。つて事ですか？」

「その通りです」

あのMSにそんな経緯があつたのか……

でも次に乗るMSどうするんだ？基本的にパイロット一人につき、一機支給が原則だし。

「あ、でも安心してください。次に乗るMSの手配は済んでいますから……」

フツフツフ……と怪しい笑い声と共にメガネが光つた。なんだろう、ニュータイプでも無いのに悪寒が……

「それはそうとジーンさん、ガルマ大佐のお見舞いには行きましたか？何やら大佐がジーンさんに会いたがつているそうですけど」

グハア！？

そ、そんな事いきなり言わないでくれ！本当に豆鉄砲を食らったかのような衝撃に襲われた。喉が痛い。

「あららスミマセン。でも行かないとガルマ大佐の面子を潰すことに成りかねませんから……ここは我慢してでも行つた方が身のため、ですよ？」

はあ……昨日の事を思い出しただけで胃が痛くなる。あれは、キャリフォルニアベースに向かうガウでの事……

10月4日23時45分 ガウ攻撃空母機内

ホワイトベースの追撃はガルマの負傷で中止になつた。追いかけるガウがあるから行かせてくれ、と懇願した兵が多かつたが

「ガウ一機分の戦力だけで、ホワイトベースは落とせん……キャリフォルニアベースに戻つて態勢を、整えてから……くそつ、痛い……」  
という訳で引き返したのだが：

ガウの機内にて

「おうおうおう！ジーン曹長殿オ！テメエ、どの面提げてここにいるんじや!!!」

「貴様あ〜！ガルマ様に、なんちゅうことしてくれたんじやあ！」

「俺たちが直々に『修正』してやらんとなあ？」ボキボキ

ガルマの（自称）親衛隊に目を付けられていた。

まあ、言いたい事は分かるけどさあ……ほならね？あんた達が助ければ良かつたと  
ちゃいまんの？

「俺たちが助ければ良かつたなんて顔しゃがつてえ！修正してやる！」

「げえ！なんでバレた！うわやめろ俺は死ぬ程疲れて

「そこまでだ！これ以上騒ぎを起こすなら軍法会議に掛けられるものと思え！」

「し、シャア中佐……」

シャアの一喝により、場の空気が一変する。

「ツ……！命拾いしたなあ曹長、飼い主様のお出ましのようだ。お前ら、行くぞ」「おつ、覚えてろ！」

「お前は絶対、アフリカ送りだからな！」

ズカズカと歩いて行く三人組に鋭い視線を送る中佐。背中から殺気のような物が見える。その殺気が神経にチクチクと刺さつて痛い。

「全く：威張り散らしていた男は、ジーンと同じ曹長じゃないか。良くもまああんな大事が言えるな」

「でも口には出さずとも、他の兵士からの視線は結構痛いですよ？皆、同じ事を言いたいんでしよう」

本当に皆からの視線が痛い。怒りを我慢しているのが分かるぐらい顔が赤い人もいれば、ダロタみたいに顔面蒼白になつてる人もいたしなあ。

流石に真紫色だつたのはダロタだけだつたが。

そういうえばシャアはガルマの暗殺を企てていたつけ。俺に阻止されてどう思つているのだろうか？

「ジーン、少しだけいいか？」

「はつ、何でしようか？」

くるのか？ 来るのか？

「他の兵には言わないでくれ」

「承知しました」

「……正直、ジーンがガルマを蹴飛ばした時、余りの衝撃に顎が割れそうに外れそうになつた。そして……大きな声で笑つてしまつた」

「わ、笑つたのですか？」

「ああ、通信回線を咄嗟に切れて良かった。あの後、腹が振れる程に笑つたよ」

腹が振れる程？ 原作より笑うシャアつて……ガンダムさんのシャアぐらいか？

「いやあ、あれは、状況が：状況だから、仕方：ない：ククク……駄目だ、思い出しだけて笑いが」

ハツハツハと笑い出したシャアに、周囲にいた兵士達が一気に視線を向ける。そして

皆がみんな、固まつてしまつた。ようやく笑いの収まつたシャアは話を続けた。

「まつたくだ。全く君という男はとんでもない事をしてのけるな。私が上官じやなかつたら、あの三人組の言うとおりアフリカ戦線送りだな」

「ちよつと中佐あ……」

「すまんすまん。だがジーン、君がガルマを蹴飛ばさなかつたら、確実にガルマはガンダムのビームサーベルに串刺しになつていた。君はガルマを救つた、それは事実だ。ガルマもそう怒らないはずだろ、誇つていい」

「そうですかねえ」

「これで良かつたのか……？」

「なんか言いました？」

「何でもない、基地に着くまでゆつくり休め」

「はっ」

……というような事があつた。

気が進まないが、行かねば。行つた後は野となれ山となれどうにでもなれ、つてやつ

だ。

基地内病棟へ向けてスイスイと歩く。流石北米の一大拠点なだけあつて人もかなり多い。

が、何故かスイスイ歩ける。どうしてかというと、皆が皆サツと一步（うわあ…という顔をしながら）退くのよね。いつの世も噂という物は広まるのが早い事を実感した。

病棟に着くと、ガルマの副官ダロタが「お待ちしていました」と言わんばかりに受付横で突っ立っていた。

「ジーン曹長、お待ちしていました。こちらです」

ダロタについて行き、案内されたのはそれなりに豪華な個室だった。まさか専用病室…? 何だか縁起が悪そうだが、口には出さないようにしなくては。

「わざわざここまで来てもらつてすまない。何せ、こんな状態になつてしまつたからな…」

ガルマを見ると、頭からつま先までグルグルと包帯が巻かれている。ミイラがパジャマを着ているかのようだ。

「やはりこの包帯が気になるか?」

「はい…」

「君に蹴つ飛ばされて助かつた代償、とでも言えばいいのかな? ああ、蹴つ飛ばされた事

はかなり驚いたが、別に君を叱責する訳ではない」

ホツ、とりあえずアフリカ戦線送りは無さそうだ。

「君に渡したい物がある。ダロタ、すまないが」

「はつ」

ダロタが取り出したのは小さく薄つぺらい深緑色の箱。俺の目の前で箱を開けると、中にはメダルのような物が入っていた。

「ジオン特別勲章だ。受け取ってくれたまえ」

「え？ と、特別勲章ですか？」

ジオン特別勲章とは

ジオニストの間では有名なジオン十字勲章の2つ下にあたる勲章。2つ下とはいえ普通なら、一回の戦闘でMS1個中隊を一人で返り討ちにしないと貰えないぐらいの代物である。（必ず貰えるとは言つてない）ちなみにジオン十字勲章だと更に+2個小隊と戦艦5隻が最低ラインだつたかなあ……二階級特進の方が確率的に高い。

「それでも君達の上官に譲歩して貰つた結果だからな。あろうことが兄さ…ドズル中将は二階級特進を進言したからな」

あの人ならやりかねんな……ガンダムも倒してないのにいきなり中尉にでもなったら、これ以上周りの視線に耐えられない……と俺は思う。

「まあそれはともかく。ジーン曹長、改めて礼を言わせてもらう。君のおかげで助かった、ありがとう」

「…光榮です！」

ビシッと敬礼を決める。やはりガルマはこういつた事が出来る人間だから皆に愛されるんだろうなあ。やつぱりガルマにはザビ家の長男長女には欠落した人徳という物があるんだなあ。

「…さて、それでは本題に移るとしてよう」

ガルマの声のトーンが少し下がる。さつきの話からすると、ドズルと話をしたようだから、ついでに指令でも下つたのかな?と、そこに

「そろそろ私も会話に参加しても大丈夫そうだな」

「シャアか?丁度いい、君の部隊への指令が下つたから、伝えようと思つたんだ」

チヨワ!いきなりの登場にビックリしてしまつた。シャアはいつもの衣装と両手には花束を持っていた。

「中佐、何時からここに?」

「そうだな:『わざわざここまで来てもらつてすまない』のところからだが」

「ほぼ最初からじやないですか！」

「ガルマが笑う。ダロタは吹き出しそうになるが、我慢できたみたいだ。

「ガルマ、無事で何よりだ」

「ありがとうございます。やはり君の部下はとても優秀だな」

「そう言つて貰えるとありがたい」

ガルマは貰つた花束を花瓶に移すよう、ダロタに指示を出した。その後に咳払いを一つして

「それではドズル中将に代わり、今後の木馬討伐についてを話そう。君達A-12部隊は引き続き、木馬の追跡を行つてもらう。ただし…」

「木馬の撃破を禁ずる。以上だ」

へ？ホワイトベースをやつつけるなつてこと？今までの苦労とは一体……？

何かを察したシャアが口を開く。

「あえて聞くが、木馬を撃破してはならん理由はなんだ？」

「元々、木馬はサイド7からジャブローへ行こうとしていたが、君達がそれを阻んで北米へと進路を変更させた。今は北太平洋を横断してアジア方面に向けて進んでいるが、最終的な目的地はやはりジャブローになるだろう」

「そこで我々が木馬を追いかけて、ジャブローの入り口を見つけ出そうという訳か」「そういう事だ」

「流れるような説明への導入、俺でなきゃ見逃しちゃうね。

「しかしがルマ、木馬が囮だつたらどうする」

「その可能性は無いさ。何故ならガンダムに備わっている学習装置のデータを、量産型MSにインプットしなければならないからな。それに資料によれば今の木馬は正規の武装ではない。このまま運用を続けるのなら必ず、ジャブローで改修を受ける事になるだろう」

「ふむ、確かにそれならジャブローへ行く確率は高そうだが……何事にも絶対という事はない。アテが外れたらどうするつもりだ」

「…正直、V作戦のデータは手に入つたのだから、ジャブローの入り口探索以外のメリツトがない。しかし、今や木馬は連邦のプロパガンダの広告塔になつてゐる。このまま野放しにはしたくないのも事実だ」

「だが、地上軍には木馬をずっと偵察できる体力も、追い返す戦力もない。だから我々が追いかける。そうだろ？」

「流石だ、シャアは分かつていたか」

要するに「いっぱい動ける我々が木馬にちよつかいを出しつつ、ジャブローの入り口を探す」っていう作戦か。IFルートでもやる事はさほど変わらんのな。

「ここ」でドアのノックが鳴り、軍医が検診に來た。

「ガルマ様、お身体の具合は如何でしようか？」

「やつと一息ついたところだ。まだ動かせんが、手足があるだけで有難いと思わんとな」

「左様でござりますか」

ニッコリと笑う軍医はこちら側に向き、物腰柔らかそうに退室を促し、それに従つた。

日がテツペンに昇り、少し傾いた頃に病棟から二人は出てきた。10月の初頭だが、

まだ意外にも暑い。これもコロニー落としの弊害なのだろうか。

「ここでふと、シャアが持っていた紫色の花束が気になり話しかけてみた。

「しかし中佐、花束なんて購買部で売つていましたっけ？」

「あれか、あれは物売りから買ったものだ」

「へえ物売り……」

物売りというのは、基地の入り口近くで出入りする兵士相手に商売をする人達のこと。無論、基地内には入れないが、たまに購買部では買えないものを売つていたりするので、利用する人は意外に多い。原作だとベルファストで出会ったミハルがそれに当たる。まあ、ミハルみたいなスペイも居るから気を付けなきやいけないけど。

「ちなみにあの花つて、何の花ですか？」

「確か…サフランとか言つていたはずだが」

「へえ、サフラン…あの花が」

サフランライスとか聞いた事あつたけど、あれがそうなのか。

シャアが歩きながらこちらを向いて話す。

「さてジーン、そろそろシャトルが着く頃合いだ。そちらに行くぞ」

「え？ シャトルって、定期便で来るやつですか？」

「そうだ。そういうえばジーンに伝えてなかつたな」

「一体何があるんですね？」

「……行けば分かるさ」

素直に教えてくれたっていいのに…  
まあいいや、定期便の中身を観に行くとしよう。

「ガルマ様、約束して頂けるのですね？」

「ああ、MSの出撃は金輪際しない」

「ほ、本当ですね!?」

「勿論さ」

ああ、やつと落ち着きを取り戻してくれたのか！ガルマ様が負傷したと聞いた時は心臓が止まつたかと思つた。軍医から全身打撲にむち打ち、果てには軽度の脳震盪と言われた時は血液が全部抜けたかと思つた。そして、まるでミイラみたいに包帯をグルグル巻きにされたガルマ様を見たとたんに神経が抜き取られたかと思つた。

しかし！やつと！ついに！前線から身を引いて、後方でドッシリと構えてくれる日が来るとは……

「ガルマ様！これからもダロタ、ガルマ様の副官としてサポー<sup>ト</sup>させて頂きます！」

「ありがとうダロタ、とても心強いよ」

ああ……余りの嬉しさに背中から翼が生えて飛んで行きそうだ……

「これからも、後方でのサポートを頼む」

ん？ん？ん？ん？ん？テメエ今なんつった？

「え？ 後方…ですか？」

「そうだ、いつも通り後方で」

「いやでもさつき出撃しないと……」

「ああ M S では出撃しない」

?????????

「M S では地上しか見渡せないからな。 しかも障害物があると有視では限度がある。 だ  
から……」

だから

???????????

バ  
タ  
ン  
!

「出撃はドップに限る!!」

# 第36話 再会 A-1-2部隊

シャアとジーン（転生）はシャトルの発着場に来ていた。

宇宙から来る定期便を観に来たのだ。発着場周辺は見物に来た兵士でガヤガヤしている。まるでちょっとした観光地みたいだ。

「発着場って、こんなに賑やかなんですね」

「いや、今日は特別だ。」臨時便がもう一隻来るからな。我々の目当てはそれだ  
「へえ、もう一隻か。物資特盛で！つて奴かな。」

沢山いる野次馬をかき分けて見えてきたのは、まさかの代物だった。  
ザンジバル級が停泊していたのだ。

「……これ、ザンジバル級ですよね？」

「そうだ、木馬を追いかける為に使う艦だ」

「はひよー」

まさかザンジバルに乗れる日が来るとは……ってか、これじや実質ランバ・ラル隊  
じゃないか。しかもあのザンジバル、投光器が4つあるテストタイプだし。

「やつと来ましたね。ジーンさん、あの中にジーンさんの搭乗するM.S.が搭載されてい

ますよ」

いきなり横から話しかけられたのでびっくりした。セキヤさんも観に来たらしい。  
というか俺達が乗るんだから、セキヤさんも乗りに来たのか。よく考えれば当たり前だ  
な。

「そろそろ教えてくれても、良いんじやないですか？」

「それは乗るまでのお楽しみで…」ニヤツ

ぞぞぞつと背中に悪寒が走る。まさか今キャリフオルニアベースで開発されてると  
いうグフフライトイプじやねーだろうなあ？万が一ジュアックとかだつたら、その  
鶯つ鼻がへし折れるまで殴つてやるぞ???

ザンジバルから荷物が運び出された。と言つてもシャアへの受け渡しがメインだか  
ら量は少ない。どちらかといえば降りてくる人員の方が多いと感じる。  
「おーいシャア中佐ー！」

どこかで聞き覚えのある声が聞こえた。声の主を探していると、二人組がこちらへ近  
づいてきた。

「デニム曹長とスレンダー軍曹！」

「おお、ジーンか！つとその前に、訂正してもらわねばな」

「？……あ！デニム少尉とスレンダー曹長でしたね、失礼しました」

「解れば宜しい」

おおよそ一週間ぶりの再会だ。

：え？たつた一週間？なんか半年ぶりな感覚がある。中身が濃すぎる日が多くたせいなのか、大気圏突入作戦の日が遠くに感じるな。

「久しぶりだな、地球までのご足労感謝する」

「いやいや中佐、あの後衛星パトロールしていたんですけどね、もう暇で暇でしようがなくて…呼ばれて嬉しかったですよ」

久しぶりの再会で饒舌になるデニム曹長…じやなかつた少尉。対照的にスレンダーは黙つたままだ。

「どうしたスレンダー？元気ないな」

「地球の空気が合わなくて、気分があまり良くないんです……ゲホツ」

「そうか、それはちとキツイな。まあ、じきに慣れるさ」

ゲホゲホと咳をし始めた。やつぱりコロニー育ちだと地球の環境はキツイのかあ。

俺も地球に降りた時、少し違和感を感じたからな。今は慣れたけど。

「よし、二人はゆっくり休んで地球の環境に少しでも慣れてくれ。出発は現地時間で明日の朝6時だ。解つたか？」

「了解です」 「はつ…」

二人が兵舎に消え、配給物資を観にきた野次馬たちもまばらになつた頃にセキヤ技術少佐が声を掛けてきた。

「ジーンさん、見に行きませんか？ 貴方の新しいMSを、ね？」

どちらかというと、セキヤさんが観に行きたそうな雰囲気を醸し出している。まあ、気持ちは分かる。自分が選りすぐつたMSだもんな。ある意味「俺自慢のMS」だもんな。

セキヤ少佐について行き、ザンジバルの格納庫へと案内される。やつぱりザンジバルとMSの運搬がメインで、物資はオマケ程度の運搬だつようだ。荷物の置場所を固定する箇所が少なすぎる。中で作業している人はMSの調子を見ている整備兵ばかりで、荷下ろししていた人はもう殆どいない。

「こちらです！ こちらがジーン曹長のMSです！」

元気な声で少佐が右腕がビシッ！と指す方向には

青いツノ！

青い身体！

青い盾！

そして胸の白いジオンマーク！

どつからどう見てもYMS-07-B通称グフが鎮座していた。

……てつきりゲテモノMSを持つてくるんじや、と思つていたので、盛大に肩透かしを食らつた気分だ。でもまあ、うん、グフなら……うん、ねえ？

……正直不安でしかない。

原作でのグフはランバ・ラルの大活躍により、とても強そうな機体に見える。しかし！あれはあくまでも歴然の猛者が乗つた場合である!!一般兵が乗つたら「出力がちょっと上がつたJ型ザク」になつてしまふのだ!!

戦場の紺をプレイした事のあるジオニストなら多分解つてくれると思う。憧れていたグフに乗つて格闘無双しようと思つていたら、気づくと4回も撃破されているあの衝撃を……お前だけだよ

連撃が決まらない……

ヒートロツトが当たらない……

75mm機関砲がカス……

相手のジムストライカーの方が強い……

エトセトラ……

←曹長L.V. 1が何か言つてるぞ

これは下手くその域ではない。そもそもその戦闘コンセプトが間違つてゐるのである。  
近接戦闘が強いのは良い。ヒートロットも悪くない（仕組みは謎だけど）。盾も必要  
だろう。なのに何故左手を機関砲にした!? ザクマシンガンじやダメなのか?!

マニピュレーターはほぼ機能しないクソ！

腕全体が弾薬庫で補給に整備が必要なクソ！

核融合炉の次に被弾するとヤバい場所でクソ！

肝心の威力は牽制にしか使えなくてクソのクソ！

……素人お断りの機体は前世のゲームでもそうだが、こちらの世界でも嫌われてい  
る。上記の通りなので、パイロットと整備兵のどちらからも、だ。

よもやもよもやだ、まさか俺たちがランバ・ラル隊の代わりとなるとは……これが歴  
史の修正力というやつなのか……

「…聞いていました？ 私の話？」

セキヤ少佐が問いかける。不安で頭一杯になつていて正直聞いてなかつた。

「一応ですが、命に関わる事ですからね？しつかりと聞いて貰わないと困ります」

「ごめんなさい…」

「いいですか？このグフは”特別製”ですからね？そんじよそこらのグフとは訳が違いますからね？」

まーたセキヤさんの”お手製”という訳か。

「まずこのグフのジェネレータには、ゲルググ用に試作された物が使われています」

初つぱなからなに言つてんのこの人？

「ゲルググに正式採用されたのはジオニック社製の出力1440キロワットのジェネレータですが、このグフに積んであるのはツイマッド社製の出力1520キロワットのジェネレータです。正式採用こそされませんでしたが、性能や安全性は私が保証します」

そんな代物どうやつて手に入れたんだ…

「いやあ～これもジーンさんが命懸けでV作戦の資料を手に入れてくれたおかげですよ」

「へ？」

「一階級特進して少佐になつたので、色々と権限が増えてやれることが増えたんですよ。本当にありがとうございます」

「いやいや、頭を下げられても……」

「いやホントにジーンさんのおかげですよ。流石にツテだけでグラナダにある試作グフのジェネレータの積み替えは行えませんよ」

：もしかして俺、とんでもない怪物を作り上げていた？

「あ！出力は1520キロワットですけど、グフの性能に合わせて引き下げているので、通常は1100キロワットですのでご安心を。出力を上げたい場合は三分だけ元に戻せるリミッター解除ボタンを付けましたので、そちらをお使い下さい」

すんげーな（語彙力）

：あれ？ グフの出力って1100キロワットだつたっけ？ 1034か64じゃなかつたっけ？

「それでは機体の説明を致しますので、コクピットへ」

「あ、はい」

コクピット内に入り、説明を受ける。

うん、恐ろしい程にザクと変わらない。九割五分同じである。流石ジオニック社製のMSである。セキヤさんの丁寧な説明と相まって、直ぐに覚えられそうだ。

今日のところはシミュレータでしつかりと覚え、筋トレで肉体維持をして明日に備えた。数日ぶりにホワイトベースの尻を追つかける日々がまた続く……

10月6日午前6時

ザンジバルが北米の空へと旅立つ。

作戦目標は、地球連邦軍本部ジャブローの入り口の特定。その為、ホワイトベースを尾行する。

偵察部隊の情報によると、ホワイトベースはカナダ領の西海岸付近を飛んでいたらしい。原作通り、北太平洋を経由するみたいだ。

搭載MSはグフ、ザクIIJ型×2、シャアザクの4機。尾行がメインになつたせいか、MS関連の補給物資はカツカツだ。世知辛い。

というかこの作戦、シャア出ないってどういう事なのよ。あんた自分から「私は前線

に立ちたい（意訳）」みたいな事抜かした癖に……

しようがない、「目立たないように尾行するから出撃しない」と考えよう。聞いても無駄そうだし。何か原作の進み方とあんまり変わらないのが気掛かりだけど、目の前の事に集中しなければならん。ならんが……

「アムロと戦うのはなあ……」

シアトルで天パの脅威を身をもつて体感した。このままの成長スピードだと、もうそろそろ俺の技量を越す。絶対に。だから経験値を与えないという点で戦いたくない。何気にタンクとキヤノンも戦力になりつつあるし。どうしたものか……

とにもかくにも、劇場版だと【哀戦士編】に突入する場面になつた。ランバ・ラルの代わりをする事になつた俺達。まだまだ息絶えない黒いガンダム。この先、起ころるであ

ろうオーデツサの戦い。黒い三連星も関わるのかどうか……

ジーン（転生）は生き残る事が出来るのか？

## 第37話 改造グフの脅威

キヤリフィオルニアベースから旅立つて1日経つた10月7日、北大西洋上でホワイトベースを捕捉した。さて、このまま尾行するのか。それとも…

「総員第一戦闘配置！MS隊は搭乗にて待機！」

デスヨネー

という訳で、ドタバタしているザンジバルの中からこんにちは。ジーン（転生）です。早速グフに乗ることになるのかな？と思いつつ、せわしなく人がアツチヤコツチヤ動いてる通路を小走りしながら格納庫へと着く。MSがズラアつと並ぶ中、唯一青く輝く（魔改造）グフ、やつぱり格好いいなあ。乗りこなせるか心配だけど。

「ジーンさん！準備は万端ですよ、早く乗つて下さい！」

セキヤさんが声を掛ける。せわしなく手を振つて早くこちらに来るよう促してい る。何か子犬みたい。

「ジーンさん！調整はバツチリですので！後は思う存分動かして下さい！」

「ありがとうございます、何か注意する事とかあります？」

「あつそだ！忘れるところだった。お願ひが一つあるんですが：五連装バルカンを出

来るだけ使い切つて欲しいんです」

「指バルカンを？」

「はい。実はジーンさんのグフ、グフA型の左マニピュレータに付け替える予定なんですよ。なので少しでも誘爆の危険性を下げる為にお願いします。それに…」

「それに？」

私の質問に対し、セキヤは軽く頭を搔きながら

「もつたいないじゃないですか」

とだけ呟いた。

雷が鳴り響く破天荒の中、私（ジーン）とデニム、スレンダーの3人で降下を始める。デカブツの癖して意外と風に煽られる。酔いややすい人は堪えるだろうなあ。周囲も灰色一色で気も滅入る。そうこうしている間に地上が近づき、着地体勢を取る。無事に3機とも着陸に成功し、ホワイトベースの捜索を始める。コムサイもビュンビュン飛んで探している。

「さてさて、ホワイトベースを探しますか」

「そうだなジーン、まずは南の方から行くぞ。スレンダーも続け」

「了解です」

3人は荒野を行く。

「そういえばデニム曹：少尉、隊列はこのままでよろしいのでしょうか？」  
隊列はアローフォームーション。ジーン（転生）を先頭に右後ろがスレンダー、左後ろがデニムとなっている。

「ああ、この今までいいさ」

「…こういうのって、小隊長か階級が高い人が先頭ですよね。普通は」

「まあな」

いいのだろうか？何か弾除けにされている気がするのだが。

（まあ、良い弾除けになるしな）

（ジーン曹長、弾除けに丁度良さげですしね）

——方その頃ホワイトベースでは：

「ほらアムロ！しゃきつとせんか！ほら早く着替えろ！」

「りゅ、リュウさん、止めてください、一人で出来ますよ」

連戦の疲れで、新兵がよくなる病気<sup>1</sup>に掛かってしまったアムロを、荒治療で治そうとするリュウ曹長とのやり取り真つ最中だつた。

ガンダムが無事（？）発進した。

「ほ、ホントにあれで大丈夫なのか？」

「心配するなブライト、あれで大体は良くなる。それに…」

「それに？」

「俺はあれしか治し方知らねえからな」

仕方ないとはいへ、苦虫を噛み潰したような顔をしながら頭を搔きむしるブライトであつた。

「デニム少尉！あちらに」

「おお、居よつたなホワイトベース」

コムサイの信号弾を元に移動し、崖から見下すと遠目にホワイトベースが見える。と同時にガンダムが発進したのが見えた。黒いせいで曇天だと認識しづらい。シアトルでもそんな感じだつたな。

「ガンダム出てきました！」

「よし、ジーンはガンダムの相手をしてくれ。ワシとスレンダーは時折援護しつつホワイトベースを攻撃していく」

「了解です」「了解……」

「……ん？ ちょっと待て、時折って事は俺殆どガンダムとタイマンしろって事?? 「デニム少尉、時折ってどれぐらいの頻度で？」

「時折はトキオリだ！ ほら行け！」

「ええそんな！ ってかアローフォーメーションを組んだ意味は!?」

ズギヤビヤーンと雷が鳴る。ガンダムが崖の方を見上げるとジオンのモビルスーツが3機立っていた。第12話の例のシーンである。

ジーン達は崖から降り、降下を始めた。セキヤから言われた通り、ジーンは盛大に左手のバルカン砲を撒き散らした。ガンダムは盾で防ぎ、着地を狙つてバズーカを一発撃つた。しかし、バルカン砲でバズーカ弾をいなされ、グフは盾で爆風を防ぎながら突進してきた。

「うわーっ！」

立て続けにバズーカを2発撃つが、一発は外れてもう一発は躱されてしまった。更にもう一発撃ち込もうと構えた所で、左腕から鞭の様な物が出てきてハイパーバズーカに絡みつかれた。アムロはとつさの判断でバズーカを手放した。と同時にバズーカが爆

発してガンダムは吹っ飛ばされた。

「これ…もしかしたら…ガンダムに勝てる…かも?」

ジーン（転生）はヒートロッドを炸裂させた時にそう思つた。セキヤ技術少佐殿の丁寧な仕事のおかげで思い通りに機体を動かせる。かつ、試作機だからなのか操作レバーのレスポンスもいい。ハイパー・バズーカの弾速つて思いの外速いのよ。ザク・バズーカと同じつて思つていると絶対間に合わないのよ。知識があつたとはいえ、躱せたのはやはり機体性能のおかげだろう。

ここでガンダムがビームサーベルを出してきた。近接戦か、近接戦”だけ”ならグフは負けんぞ！スッと盾からヒート剣を取り出し、中段にて構えた。お互いに鍔迫り合いになるが、ガンダムはなりふり構わず振つているが、グフは払い除ける感じでいなしている。精神的な余裕がジーン（転生）を楽にさせ、精神的な余裕がアムロを苦境に立たせていた。

ここでガンダムがやや大きなモーションで袈裟斬りをしてきた。それを見逃さなかつたジーン（転生）は左腕でガードする。

例の効果音（デエーン グワンワーン）

「こ、コイツ…やはりザクとは比べ物にならない位にパワーが違う！」

「ザクとは違うのだよ！ザクとは…グフとも若干違うけど！」

「いける…いけるぞ！このままの勢いなら勝てるぞジーン（転生）！ついにあの憎き天パを宇宙世紀から葬れるぞ！こんなに嬉しい事は無い！アツ、バルカンが来る。」

ガンダムの頭がクイツと下に向いた。コツクピットに照準を付けた証拠である。サツとバックステップで距離を取り、盾でコツクピット付近をガードする。やはり予想した通り、頭部バルカン砲を撃つて来た。冴えてる、冴えてるよ今日の自分！体勢整えたし、このままガンダム撃破に

「ジーンデニムスレンダー、今日の所はもういい。帰還しろ」

「へ？これからって時に？確かに原作は偵察程度だつたけども…：

「ジーンどうした、返事が無いぞ。応答しろ」

「へつ？いや、ハイ！います！」

「何だ、います！、つて返事。いや、それよりもガンダム撃破出来そうなのに…（ ）。

ド。）ハツ！

そうだ、今の任務は『ガンダム及びホワイトベースの撃破』じやなくて『ホワイトベースを尾行しジャブローの入口を見つける』のが目的だつた：

そんなん、やつとこチャンスが巡り会えたのに……ここで諦めなきやいけないだなんて

⋮

「ゞ」苦勞だった、全員無事で何よりだ

シャア中佐の労いの言葉を聞き、その後は待機室の仮眠ベットに寝そべつた。ホワイトベースはエンジンの修理中でまだ動き出しそうになかったが、警戒度を第二戦闘配置に切り替え様子を見張っていた。例の如くMSパイロットは待機室で待機だ。

「はあ……このままだと、どうなるんだ？俺達」

ガルマは何とか生かしたし、ランバ・ラルはサイド3に幽閉中だし、シャアは暗殺に失敗しても不満気無さそうだし、ガンダムは黒いし⋮

この先、本来の一年戦争の歴史とは違つてゐる。だからこそ一つひとつの行動に小さな歴史の歯車がはめられていく。その歯車達が噛み合つた時、思いもよらぬ歯車が回つたり、まさかの正史の歯車が回るやもしれぬ。

正直怖いよ。でも行動しないことには生き残れないし。でも…：

「はあゝ駄目だ。寝よ」

こういう時には寝る。寝れるときに寝る。それが一番。体力温存して、明日は明日の自分に任せよう…：

なんかこれ、前にも言つた気がする…まあいいや…：

戦闘終了3時間後、ホワイトベースはエンジンの応急処置を終えてひつそりと旅立つた。もちろん、我々ザンジバルもひつそりと後を追つた。10月7日の深夜、北太平洋に2つの舟が月夜に浮いていた。

「そういうやアイツら、”トキオリ援護する”って言つときながら全然援護しなかつたな  
⋮」

# 第38話 帰郷

10月8日 AM7:32 太平洋上空

おはようございます。あの後は特にスクランブルも無く、よく眠れました。ジーン（転生）です。当ザンジバルは日付変更線を越えた所を航行中でございます。

聞いた噂によると、この前の嵐でザンジバルの機器が不調になつたらしく、一旦整備も兼ねて近場の基地に降りるとの事。ハワイは遠すぎるし北京辺りになるのかな？あれ？北京つて連邦に奪還されたんだつけ？確かまだだつたような気がするけど残るとしたら：ワンチヤン日本も有り得る？なにはともあれ、情報が欲しいのでブリッジへ行くことにした。

ブリッジへ行くとお目当てにしていたシャアは居なかつた。どうやら朝ごはんを自室で食べているらしい。オペレーターが教えてくれた。ついでにこの人に件の噂を聞いてみた。

「ああ、それでしたら本当ですよ。」「で、どこに泊まるん？」

「消極法で二ホンに行く予定です。アジアはどこもかしも戦線が不安定で泥沼化してる

らしいですし、比較的安定しているのがここみたいなので。あとは一番近い基地がここなので」

なるほど、二ホンか。……日本に行くのか。懐かしい響きだ。

前世での名前を思い出せない俺でも、日本の事だけはハツキリと覚えている。俺の住んでいた所は田舎だったから水も空気も飯も旨かつた。梅雨がちよつと嫌だけど基本的に暮らしやすい気候だつた。いやはや、今世でも生まれ故郷に行けるとは：徳は積むものですな。（何処で積んだんだ）

数時間後、ザンジバルが基地の滑走路一杯に着陸する。下船許可も出たので基地内をうろちよろすることにした。ドアの前で待ち、タラップの接続がなされると機密ドアを開いた。開いた直後、ふわっ、と香る醤油の匂いに思わず

「あゝ、日本に帰ってきたんだな…」

と思わず呟いてしまつた。醤油の匂いという事は関東だな。信じられないかもしけないが、関東はホントに醤油の匂いがするのだ。

その後、俺の後に降りてくる人を何となく数えてみたが、一日居る訳でもないので船からあまり人は降りなかつた。2～30人といつたところか。それにこここの基地は補

給が行き届いていないので、口クな装備がないらしい。ザンジバルの発着が出来るだけマシ、という訳だ。

しかしここは何処の基地なんだ？関東の航空基地なら入間らへんか？にしては遠くにある団地のような建物は何となくアメリカンな感じがするし：

答えは直ぐに判つた。何故ならボロボロの廃屋に掛けられた看板が教えてくれたからだ。

「アメリカ軍 横田基地」

( 。 ピ。 ) ハッ！ 「横田やんけ！」

私は今、東京都福生市にある旧米軍基地に居る。

宇宙世紀における米軍基地は役目を果たし、日本にある米軍基地は全て日本に返還されていて、入間にあるジョンソンタウンみたく、住宅地にする計画が何回かあつたらしいが全部頓挫したという。噂によると計画が頓挫したのは地下に”核爆弾”が眠つているからだとか：

といった噂はさておき、廃基地と化していたが、ジョン軍が地球侵攻したときに占領したのがこの基地。整備されてないから楽に手に入つたが、連邦軍の急襲や補給不足に

よりこのようなボロボロの状態が続いているらしい。

基地内をぶらぶらしてみたが、キッチンと整備されているのが通信指令室とMSハンガー位だった。兵宿舎等の施設はボロいまんまだった。足場が組まれていて、改修する気はあるみたいだが。やや遠くの方に黒くて平べつたい建物が見えた。多分だが、ホームセンターのジ○イフル本田じやなかろうか？宇宙世紀に入つても営業していたのかな…：

ぶらぶらと歩いていたらいつの間にか出入り口付近まで来ていた。ボロボロの守衛所に一人の老婆が守衛に話しかけていた。

「おやあんた、あの船から降りてきたのかい？」

見るからに昭和のお婆ちゃんみたいなルツクスの御婦人が声を掛けってきた。こう見えても令和産まれなのかなあ」と思いつつ、

「いやあ、職務上ヒミツなんで…」

「んなはは！こんな辺鄙な所にジオンの船がやつて來たんさ。オメエは言わねえだろが、オバちゃん、お見通しだかんね！」

「ゞ、ゞ想像にお任せします…」

どうやら宇宙世紀になつてもオバちゃんパワーは健在のようだ。

「どうだい、何か買つてかねか?」

「何があるん?」

俺が声を掛けると「待つてました!」と言わんばかりに顔をニヤつかせるお婆ちゃん。何だろう、一瞬だけセキヤさんの顔が浮かんだ。俺たちと守衛以外周りに居ないのに、凄く警戒するように周りをキヨロキヨロしながら俺の耳元で、

「とつておきの”上物”手に入つたんだよお、買わねが?」

何の上物だろうか?お酒?エロ本?気になるので更に聞くと、オバはたつた三文字で返してきた。

「ふなわ」

…ふなわ?フナワ?ふなわ、フナワ、舟和:あつ舟和舟和とは、東京都浅草に構える  
創業1902年の和菓子屋。か!

「もしかして…“イモ”?」

こう聞いたらお婆ちゃんは縦に3回程頷いた。

「で、いくらなの?」

「日本円なら嬉しいけど、ドル払いもOKよ」

「じゃあ、ドルで」

「それなら600ドルだね」

「なるほど600ドル…って高つか!!」

1ドル100円の脳死計算なら6万円だぞ!ボツタクリにも程があるだろ!

「日本円なら2万円だけどね。為替の手数料が高いからドル払いは3倍よ」

日本円は持っていないが、幸いにも我らジオン兵の給料はドル払いである。理由は単純、ジオンが沢山ドルを持つてゐるからだ。理由について話すとちよつくら話が長くなるが、勘弁してくれ。

話は宇宙世紀初頭に遡る。ジオン公国の面影がまだない頃、重工業コロニーとして役目を与えたサード3は、地球に機械類を卸して外貨を得ていた。その外貨がドルだと言うわけだ。最初期に「やべえ、鉱物資源取れなくて外貨獲得出来んわ」ってなつて一時期通貨危機に陥つたらしいけど、その後何とか資源小惑星を見つけられて事なきを得た。その教訓からか重工業コロニーとして積極的に地球と取引を行い、少しでも地球との格差を経済の力で補おうとしていた。

ジオン公国として独立を宣言した際、色々と制裁として地球資源（水、空気、食料等）

の値上げ、卸している機械類の関税の増税等経済的な制裁を与えられた。その中にはMSの動力源である熱核融合炉に必要なヘリウム3が含まれた為、半官半民企業の木星旅団が誕生した。資源を獲得でき、更には連邦に渡す金が少なくて済むので重宝したみたいだ。

そもそもジオン公国を制裁するならドルでの取引を止めたりすれば良いんじゃないか、と思うがそうは問屋が卸さない。一度廻り始めた経済という名の歯車を止めるとなるとジオンだけではなく、地球連邦にもダメージが行く。更に言うと宇宙世紀でもドルは地球でのメイン通貨とされていて、制裁をすると今度は地球連邦が、というか地球全体が通貨危機に陥る事になる。実を言うと政府は通貨を統一する事も視野に入れていたが、通貨の方はあまり手を加えてなかつた。理由は上記のソレだからだ。なので今まで日本の「円」やEU圏の「ユーロ」もサブ通貨として（住んでる国ではメインとして）流通している。

：とまあ、上記の複雑な経済事情から兵士への給料はドル払いになつてゐる。予想外の地球侵攻もドルのお陰で兵士の食料から何まで、占領地政策もドルのお陰で上手く立ち回っていた。

「分かつたよ、600ドルで買うよ」  
「あいよ」

渋々と給料の一部を渡し、高つつかい芋羊羹を手に入れた。これは、アレだな。食いたいのも山々だけど、”もしも”の時の保険として取つておこう。山吹色のお菓子つて訳だ。日本人の血が入つてゐるあの人なら多分好きだろう。

そろそろ帰ろうとヒターンした直後、けたたましい音でサイレンがなつた。スクランブル警報、すなわち敵襲である。

畜生め、ザンジバルが来たのを感じられたか？ともかく急いでザンジバルへ戻る。そうしたら丁度良く見回り中のジープと出会い乗せてつてくれた。

「こりやアレだな、例の奴だな」

ジープの運転手が呟く。

「例の奴つて何スカ？」

「この基地に何かしら来ると嗅ぎつけてるく連邦軍さ。多分いつもの北東方面から来る航空部隊だろうよ。今日も今日とて強行偵察か」

こつから北東方面か：多分だけど、入間航空基地からか？あそこは連邦の基地なんだな。てか、メツチャ近くないか？そんな離れてないだろうよ、入間と横田。多分10キロぐらいいの距離だぜ？

色々と考えてゐる内にザンジバルの横に着いた。降りようとしたらツナギを着た整備兵に引き止められた。

「あんた確かザンジバルに乗つてきたMSパイロットだろ？すまないがウチのザクに乗つてくれないか。アイツまた腹下しやがつて…」

「何だつて！あのヘボ！またこんな時に…！」

どうやらここMSパイロットは常にポンポンがペインらしい。緊急事態なので承諾し、ポンポンペイン野郎のザクに機乗した。搭乗したは良いがまさか武器がマゼラトップ砲とはな…

「ザクマシンガンは無いのか？対空性能ならそつちが上だろ？」

「マシンガンは補給が入らなくて無い」

「…ザクバズーカも？」

「当たり前だ、じやなきやあんなもん使う訳ねえよ。幸い4発とも弾は残つてるから、外れても良いから景気良くぶつ放してくれ」

極東の補給事情を垣間見た。何だか泣きそう。一般兵転生ならA-12部隊は大当たり：なのかな？

「了解、落としても構わないのだろう？」

「はは、落とせるならね」

準備が整いザクを動かした。MSハンガーから外に出て分かつた事がある。

「重つつづも！」

前に乗つてた魔改造ザクより動きが重い。マゼラトップ砲は取り回しがし辛い上に弾数が4発しか無い。武器としては正直（威力以外は）ザクバズーカ以下だ。でもこういった補給がままならない部隊にとつては貴重な戦力だという。泣けるぜ。

俺は敵が来るであろう方角に砲を向け、射角を取る。20度が限界らしい。設定を変えて45度ぐらいまで上げたかったが、連ジDXのマゼラトップ砲は撃った後の反動があつた事を思い出したのでヤメた。でも絶対角度足りないだろ、コレ。

あれこれ考えてる内に航空機を捉えた。TINコッド3機と：ディツシュ1機か。正にTHE强行偵察つて感じだな。俺はすぐさま、ザクのコンピューターに攻撃が当たるタイミングを計算させた。エンターを押すと、すぐに「ERROR」の文字が出た。どう足搔いても当たらぬらしい。デスヨネー。まあとにかくぶつ放す！

景気良くぶつ放したマゼラトップ砲は全弾、こちらに向かつて来る航空部隊の遙か真下を通過した。「景気良くぶつ放してくれ」と言われたが、補給が口クに来ない基地の貴重な弾薬を使って良かったのだろうか？ザンジバルも機銃で応戦したが、サーツと旧横田基地を横断して去つてしまつた。はー終わつた終わつた、帰ろ。

强行偵察の事もあり、早急に修理を終わらせて横田基地から旅立つた。幸いにも不調は軽かつた。昨日は快適な空の旅だったので今回のスクランブルはちょっとした準備

運動にはなつたかな？良い感じのお土産も買えだし、久しぶりの日本で気分は上々だ。  
筋トレして一汗搔いてから昼寝でもしようかな。

思いもよらぬ日本への帰郷で気分も調子も上向きになつたジーン（転生）であつた。

なお上向きになつた気分と調子は、日本を抜けるまでちよつかいを出してきた連邦軍  
航空部隊の皆さんのお陰で地の底まで落ちた。